

# 瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書

平成11年度

東大阪市教育委員会

# 序

東大阪市は、大和と並び古代より日本の中核地域であった河内の一画を占めています。市内からは現在、旧石器時代以降各時代の遺跡が約130箇所発見されており、まさに埋蔵文化財の宝庫と言えます。なかでも、市域の北半に往時存在した河内湖の縁辺には、弥生時代の大集落として全国的にも著名な今回報告します瓜生堂遺跡をはじめ鬼虎川遺跡など大遺跡が存在し、当時の繁栄の様子を今に示しています。

江戸時代以降は商都大阪の近郊農村地帯でしたが、現在市域の大半は住宅・工場などが立ち並びまとまった水田地帯はわずかとなり、市街化が進んでおります。

今回報告する瓜生堂遺跡第46次調査は、連続立体交差事業にともない発掘調査を実施したものであります。

瓜生堂遺跡は、河内湖の南の岸辺に位置した遺跡です。若江寺や織田信長もたびたび訪れた若江城が存在した地として知られる若江遺跡のすぐ北に所在しています。今まで遺跡の中心部付近の調査が行われてきましたが、周辺部は余り例が有りませんでした。この度の調査では、遺跡の北端近くを調査したところ弥生時代中期を中心当時の遺跡の様子を知る上に新たな発見が多くありました。土器を中心とした出土品は当時の人々の生活を偲ばせてくれるものであります。現在、出土品については整理作業を実施中でありますが、取り敢えず調査成果の一端を一早くお知らせするためにここに中間報告を上梓するものであります。

本書が、地域の歴史を解明する上でお役に立てれば幸いであります。また文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査を実施する上に多大なご協力をいただきました大阪府八尾土木事務所をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

東大阪市教育委員会  
教育長 奥田健次

## 例　　言

1. 本書は東大阪市西岩田2丁目地内において大阪府八尾土木事務所が計画した平成10年度都市計画道路大阪瓢箪山線建設事業に伴う、瓜生堂遺跡第46次調査の発掘調査中間報告書である。本報告書は、平成12年度まで継続して行う発掘調査が完了した後に平成13年度の整理作業終了を待って刊行する予定である。
2. 本調査は東大阪市教育委員会が、大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した。
3. 主要な現地調査は、平成10年6月1日から平成11年3月30日まで福永信雄・西口朗弘・鶴山まりを担当として実施した。
4. 本書の執筆は福永信雄の指示の元にⅡ章-2、Ⅲ章-1～3を鶴山まり、Ⅲ章-3打製石器を井筒美智子、Ⅲ章-3木製品を田之上裕子が担当した。その他の章と編集は福永が行なった。
5. 遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影はG・Fプロに委託した。
6. 現地調査実施にあたっては、大阪府八尾土木事務所・近鉄ハーツ株式会社の方々から多大なご協力いただいた。記して謝意を表する。
7. 測量杭の打設は有限会社明香コンサルタントに、航空測量図の作成は株式会社サンヨーに委託して実施した。その他の遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図を川内清・千喜良淳が担当した。遺物実測図は、弥生土器を鶴山・楠木理恵、打製石器を井筒、磨製石器を鶴山・井筒、木製品を田之上が作成した。遺物実測図の整図は千喜良が行なった。なお、本書掲載の遺物の挿図番号は、図版番号と一致させている。
8. 遺構実測図の水準高はT.P.値を用いた。
9. 調査および本書作成にあたって、下記の方々から多くの協力を得た。心より謝意を表する。(敬称省略・順不同)  
西谷真治・金閥恕・山内紀嗣・金原正明・栗田薰・奥田尚・山本忠尚・濱田延充・若林邦彦・国分政子・渡邊昌宏・宮崎泰史・林日佐子・内田正俊・秋山浩三・石神幸子
10. 現地調査および本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の参加を得た。  
北村奈菜・久木真美・河村恵理・中谷直貴・田中良輔

# 本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 位置と環境	1
II調査概要	5
1. 調査方法と目的	5
2. 調査経過	6
III遺跡	7
1. 基本層序	7
2. 造構	16
3. 出土遺物	28
中近世の遺物	28
弥生時代後期末～庄内期の遺物	28
弥生時代中期他の遺物	29
弥生土器	29
石器	37
土製品・骨製品・縄文土器	49
木製品	51
IVまとめ	63

# 挿図目次

第1図 既往の調査と本調査報告地点位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査地区剖図	5
第4図 調査地位置図	5
第5図 基本層序模式図	8
第6図 東壁断面土層図	10
第7図 南壁断面土層図	11
第8図 南壁断面土層図	12
第9図 南壁断面土層図	13
第10図 上面遺構航空測量図	17
第11図 上・中面遺構航空測量図	19
第12図 下面遺構航空測量図	21
第13図 A-1マウンド1周辺遺構図	22
第14図 A-4～6下面遺構面建物復元案図	23
第15図 ピット断面図	25
第16図 ピット断面図	26

第17図	ピット断面図	27
第18図	旧耕土・床土・川1出土土器実測図	28
第19図	土器だまり1出土弥生土器(壺・壺・鉢)実測図	30
第20図	土器だまり3出土弥生土器(壺)実測図	31
第21図	土器だまり3出土弥生土器(壺・壺・鉢)実測図	32
第22図	川2出土弥生土器(壺・壺・鉢)実測図	35
第23図	その他の遺構(土坑21・溝32・溝38) 出土弥生土器(壺・壺・鉢等)実測図	36
第24図	磨製石器(性器形石製品)実測図	38
第25図	磨製石器(磨製石底丁)実測図	39
第26図	磨製石器(大型石底丁)実測図	40
第27図	磨製石器(叩石・大型蛤刃石斧・砥石)実測図	41
第28図	磨製石器(叩石・石錐)実測図	42
第29図	打製石器(石鎌)実測図	44
第30図	打製石器(石鎌・石錐等)実測図	45
第31図	打製石器(石錐・石剣等)実測図	46
第32図	打製石器(石剣・削器等)実測図	47
第33図	磨製石器(石剣・紡錘車) 土製品(ミニチュア土器・紡錘車・円板等)	
	骨製品・縄文土器等実測図	50
第34図	木製品(平鋸・衡・有頭棒等)実測図	52
第35図	木製品(丸鋸・衡未製品・朱塗木製品等)実測図	53
第36図	木製品(木底丁・鋸柄・鋸未製品等)実測図	55
第37図	木製品(槽・柱材等)実測図	56

## 表 目 次

表1	石鎌・石錐形態分類表	37
表2	サヌカイト点数地区別集計表	48
表3	石器観察表	57~59
表4	木製品観察表	60~62

## 写 真 目 次

写真1	作業風景	10
-----	------	----

## 図版目次

- 図版1 遺構 上. 調査地全景 中. A-1 東崖断面 下. A-1 南壁断面
- 図版2 遺構 上. A-11 南壁断面川1 中. A-7 南壁断面 下. A-7~9 南壁断面
- 図版3 遺構 上. A-11 南壁断面 中. A-12 南壁断面 下. A-15 川2 東西アゼ断面(南西より)
- 図版4 遺構 上. A-7・8 上面遺構検出状況(東より) 下. A-6~10 上・中面遺構検出状況(東より)
- 図版5 遺構 上. A-7・8 中・下面遺構検出状況(南より) 下. A-6~8 中・下面遺構検出状況(東より)
- 図版6 遺構 上. A-1 マウンド1 遺構検出状況(南より) 下. A-1 マウンド1 遺構検出状況(北西より)
- 図版7 遺構 上. A-12~14 中・下面遺構検出状況(東より) 中. A-11・12 溝・土坑検出状況(東より) 下. A-15 ピット検出状況(北西より)
- 図版8 遺構 上. A-8~10 中・下面遺構検出状況(南より) 中. A-2~6 中・下面遺構検出状況(東より)  
下. A-5 ピット群検出状況(東より)
- 図版9 遺構 上. A-5 ピット内礎板検出状況(南より) 中. A-15 ピット421 断ち割り断面(西より)  
下. A-5 ピット内敷物検出状況(南より)
- 図版10 遺構 上. A-5 ピット154 断ち割り断面(西より) 中. A-5 ピット163 内礎板検出状況(北より)  
下. A-5 ピット146 内礎板検出状況(北より)
- 図版11 遺構 上. A-6 ピットF・G・H 断面(北より) 中. A-6 ピットG・H 断面(北より)  
下. A-6 土坑D 断面(北より)
- 図版12 遺構 上. A-9・10 土器だまり1 検出状況(西より) 中. A-12・13 土器だまり3 検出状況(西より)  
下. A-13 土器だまり3 検出状況(北より)
- 図版13 遺構 上. A-1 性器形石製品出上状況復元(南西より) 中. A-15 川2 弥生土器出上状況(南より)  
下. A-8 溝32 弥生土器出土状況(東より)
- 図版14 遺構 上. A-13 錫出土状況 中. A-12 井戸状遺構内木製品出上状況(北より) 下. A-9 ピット270 内太型船石斧出土状況(南より)
- 図版15 遺構 上. A-9 溝13 骨製刺突具出土状況(南より) 中. A-14 海産貝(アカニシ)出土状況(南より)  
下. A-9 ピット315 淡水産貝(セタシジミ)出土状況(南東より)
- 図版16 遺物 旧耕土・床土・川1 出土遺物(中近世、弥生時代後期~庄内期) 上. 国產磁器(7・202・203)、瓦器(1・2・201)、中世須恵器(5・6)、中国産磁器(3・4) 下. 瓢(8)、底部(9~11)
- 図版17 遺物 上器だまり1・3 出土弥生土器 瓢(14・18・51)、壺(204)、壺底部(19)
- 図版18 遺物 土器だまり1・3 出土弥生土器 壺(23・28・30)、鉢(20・44)、脚(36)
- 図版19 遺物 川2・溝32 出土弥生土器 脚(70)、蓋(91・92)、鉢(87)、高杯(93)、甕(90)
- 図版20 遺物 溝38 出土弥生土器 瓢(94~98・205)
- 図版21 遺物 上器だまり1・3 出土弥生土器 上. 壺(12・13・15~17) 下. 壺(22・24~27・29)

- 図版22 遺物 土器だまり 3 出土弥生土器 上. 細頸壺(37・38)、鉢(45)、蓋(42)、壺底部(32~34)  
壺底部(39・40・43) 下. 壺(31)、高杯(35)、鉢(46)
- 図版23 遺物 土器だまり 3 出土弥生土器 上. 壺(41・47~50) 下. 壺(52~58)
- 図版24 遺物 川 2 出土弥生土器 上. 壺(59~62・71・72・206) 下. 壺底部(64~68・73~77・207  
~209)
- 図版25 遺物 川 2・土坑21出土弥生土器 上. 鉢(69・78・79)、無頸壺(76)、細頸壺(80)、蓋(63  
~74・75) 下. 壺(81)、鉢(82)、壺(83・84)、底部(85・86)
- 図版26 遺物 磨製石器(大型石庖丁) 大型石庖丁(A面)
- 図版27 遺物 磨製石器(大型石庖丁) 大型石庖丁(B面)
- 図版28 遺物 磨製石器(性器形石製品) 上. 性器形石製品(A面) 下. 性器形石製品(B面)
- 図版29 遺物 磨製石器(石庖丁・石剣・紡錘車) 上. 石庖丁(3~5)、石剣(58)、紡錘車(59~61)  
(A面) 下. 石庖丁(3'~5')、石剣(58')、紡錘車(59'~61')(B面)
- 図版30 遺物 磨製石器(石庖丁) 上. 石庖丁(A面) 下. 石庖丁(B面)
- 図版31 遺物 磨製石器(砥石) 上. 砥石(表) 下. 砥石(裏)
- 図版32 遺物 磨製石器(石鍤・大型蛤刃石斧) 上. 石鍤(22・23)、大型蛤刃石斧(17)(表) 下. 石  
鍤(22'・23')、大型蛤刃石斧(17')(裏)
- 図版33 遺物 磨製石器(叩石) 上. 叩石(表) 下. 叩石(裏)
- 図版34 遺物 打製石器(石鐵) 上. 石鐵(A面) 下. 石鐵(B面)
- 図版35 遺物 打製石器(石鐵・石錐) 上. 石鐵(26・30・36・37・42)、石錐(43・44・46~49) (A  
面) 下. 石錐(26'・30'・36'・37'・42')、石錐(43'・44'・46'~49') (B面)
- 図版36 遺物 打製石器(石剣・石鐵・石錐) 上. 石剣(50~52)、石鐵(38~41・212・213)、石錐  
(45) (A面) 下. 石剣(50'~52')、石鐵(38'~41'・212'・213')、石錐(45') (B面)
- 図版37 遺物 打製石器(削器) 上. 削器(A面) 下. 削器(B面)
- 図版38 遺物 打製石器(削器) 上. 削器(A面) 下. 削器(B面)
- 図版39 遺物 木製品 平鍬(1・1')、鋤(2・2'・3・3')、有頭棒(12)、棒材(13)
- 図版40 遺物 木製品 有頭棒(16・16'・16")、鍬未製品(10)、不明木製品(9・9')、梢円板材(22)、  
鋤柄(11)
- 図版41 遺物 木製品 組合せ鋤(6・6')、刃突具(20)、丸鍬(4・4')、狭鍬(5・5')
- 図版42 遺物 木製品 木庖丁(8・8')、棒材(15)、鍬未製品(7)、不明木製品(23・23'・23")
- 図版43 遺物 木製品 把手付槽(18・18'・18")、刻み入り有頭棒(14)、朱塗木製品(21)、板材(24)、  
棒材(19・19')、槽(17)、柱材(25・25')
- 図版44 遺物 土製品・骨製品・繩文土器 上左. ミニチュア土器(70・71) 同右. 不明土製品(72)  
下. 紡錘車(62~64)、円板(65・66・223・224)、骨製刃突具(67・68)、骨角器(69)、  
繩文土器(73)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

瓜生堂遺跡は河内平野の一画、旧河内国のはば中心に位置する。昭和40年に工業用水道埋設工事の際に多量の弥生土器と青銅利器(銅劍ないし銅戈)が出土したことから、遺跡の存在がひろく知られた。その後、平成10年現在までに大阪府文化財調査研究センター調査実施分をあわせると50次を超える調査が実施されており東大阪市域では最も調査の進んだ遺跡の一つといえる。

第46次調査は、東大阪市西岩田2丁目地内において都市計画道路大阪瓢箪山線建設に関連して平成10年度に実施したものである。調査地は、当初従前の周辺の調査結果から遺跡の北辺にあたり、河内湖の南岸に隣接する地であると考えられていた。調査する現場調査は、継続して平成12年度までの計3年間実施する予定である。最終的に本報告書を調査終了後1年間の整理期間後の平成13年度末に予定しているが、中間報告として10年度の調査概要を上梓することになった。

## 2. 位置と環境

### 位置

瓜生堂遺跡は、従前の調査の結果から標高約5mの旧大和川の形成した自然堤防ないし三角州上に営まれた弥生時代の集落跡(墓域を含む)で、河内平野の一画に位置する。北に岩田遺跡、南に若江・巨摩庵寺遺跡などが存在し、平野部の中でも特に顯著な弥生から古墳時代の遺跡密集地の一角を占める。古代の国郡制では河内国若江郡にあたり、地形上は河内国のはば中央に所在する。

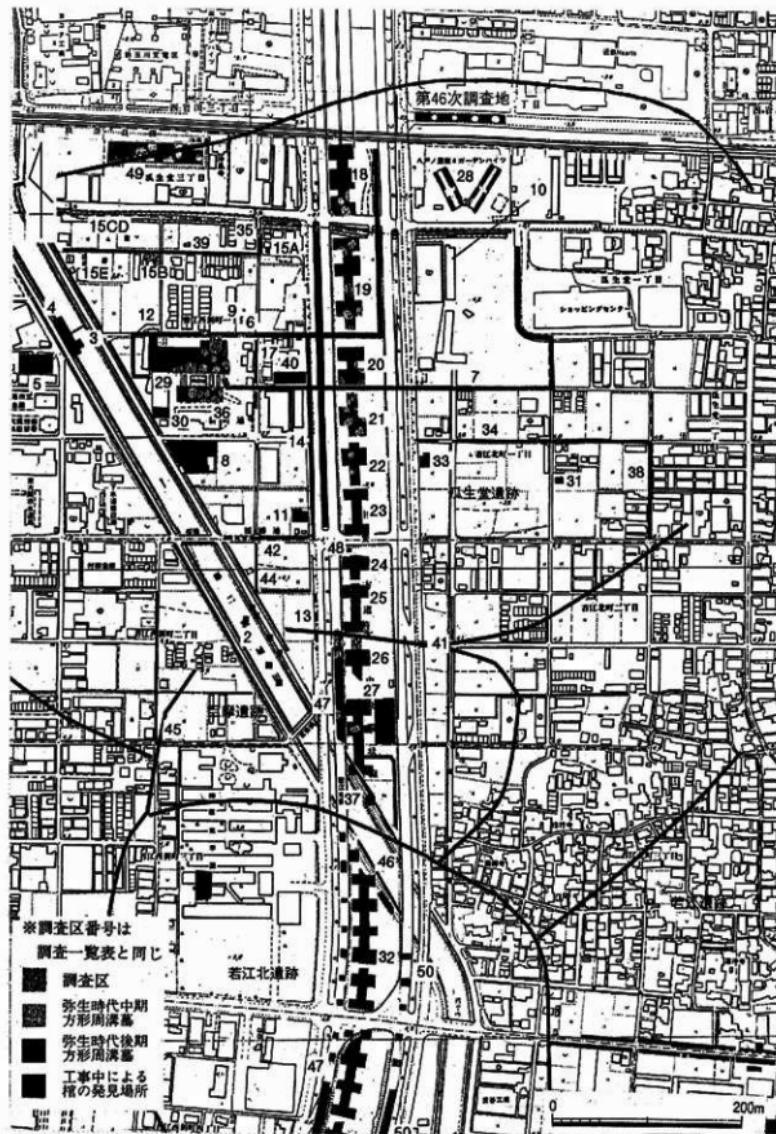
近鉄奈良線八戸ノ里駅の南方、大阪府寝屋川流域南部下水道ポンプ場を中心とした南北約1.1km、東西約0.7kmの東大阪市瓜生堂と若江西新町にかけての範囲に広がる(第1図)ことが明らかになっている。遺跡のはば中心を南北に大阪中央環状線が通る。今回の調査地は近鉄奈良線の北側で中央環状線の東辺に隣接した地である。国土地理院発行の1/2500「大阪東南部」の地形図では北東隅付近にあたる。

### 地理的歴史的環境

本遺跡が位置する現在の河内平野北半の低平な地は、縄文時代前期にいわゆる繩文海進により河内湾と呼ばれる海が上町台地の先端から進入していた。河内湾には現在の玉串川や長瀬川の前身となる旧大和川が南から北に向い幾筋も流れ込み、川が運ぶ上砂の堆積などにより海水の流入が減じこの時代の終わり河内潟に変化する。弥生時代初めには、さらに堆積が進み淡水の河内湖に変わる。潟あるいは湖の沿岸には、これらの川によって運ばれた土砂によって形成された三角州が広がり、流れ込む川の両側には自然堤防、その背後には後背湿地が形成された。本遺跡付近は、河内潟・湖の南辺部にあたる。

平野北半分における人間活動の痕跡は、現在のところ新家遺跡(本遺跡の北約1.5km)や山賀遺跡(南約1km)で少量の晩期中頃の土器が出土し、この頃から認められる。しかし、活動が本格化するのは弥生時代前期である。後背湿地が稲作の耕作地として早くから利用されたことが、若江北遺跡(南0.5km)で検出された前期初頭の水田址の存在から、当時伝来した稲作農耕が後背湿地を利用していく早く行われたことが窺える。当時の居住地は、同遺跡で検出された堅穴住居や掘立柱建物から自然堤防や三角州上の微高地を選んで営まれたことが知られる。

現在知られる遺物出土状況などから見ると本遺跡には、北東部で弥生時代前期中頃から後半に、北西部で弥生時代前期後半に小規模な集落が出現する。位置から見て若江北遺跡から北東部にまず派生



第1図 岐住の調査と本調査地点位置図

(淡田延充「瓜牛堂遺跡の調査成果」「大阪の弥生遺跡の検討」大阪の弥生遺跡検討会1998に加筆、一部改変)

し、短期間居住をした後に自然環境の変化などから北西部に移動したことが考えられる。若江北遺跡は短期間で消滅するが、南に位置する山賀遺跡で本遺跡の北東部に集落が営まれたと同時期に比較的大きな集落がみられることから、この遺跡に主体が移ったと考えられる。

中期には、本遺跡を含む若江北・巨摩廃寺・山賀遺跡と共に東西1.5km、南北1.6kmの範囲を占める人規模な遺跡群(瓜生堂遺跡群)が形成される。これを一つの集落と考えると河内湖南辺に営まれた最大規模の集落であり、河内における中心的な集落のひとつであることは間違いない。なお、湖の東辺には鬼虎川・西ノ辻・楨附・鬼塚遺跡からなる遺跡群(鬼虎川遺跡群)がほぼ同時期に存在している。両者とも弥生時代中期中頃から後半に最も範囲を広げる。両遺跡群の存在は、単に農耕の拡大だけでは後の時代の遺跡の在り方から見ても説明が困難で、背景に川や湖を利用した水運がもたらす富などが考えられる。巨摩廃寺遺跡から出土した「貨泉」はその証拠の一つと考えられている。また、鬼虎川遺跡では中期初頭の環濠が検出されているが、本遺跡においては知られていない。本遺跡の性格を示しているのかもしれない。

後期には両遺跡とも規模を縮小し瓜生堂遺跡群は巨摩廃寺遺跡に、鬼虎川遺跡群は西ノ辻遺跡に收敛していくと考えられている。時を同じくして中期末に生駒山麓の標高100m付近に高地性集落の山畑遺跡、後期に岩滝山遺跡が出現する。高地性集落は、居住に不適切な場所にあえて営まれていることなどから戦争に備えた集落と考えられている。遺跡群の衰退が高地性集落の出現とほぼ時を同じくしていることは、背景に当時の不安定な社会状況を反映しているものと考えられる。

古墳時代は、北約0.5kmの前期の西岩田遺跡から前代から続く水運に關係すると考えられる山陽・山陰地方の土器や中期前半の大型の倉庫と考えられる掘立柱建物などが検出されている。中期後半と後期は仁德記「羅江」の開削が伝えるように瀬戸内海への出口が狭められたためか、水運を窺わせる資料はあまり見られない。

大規模な古墳は存在しないが、集落の有力者に許された最低限の古墳である小型低方墳は、巨摩廃寺遺跡(中期後半)と山賀遺跡(後期前半)で検出されている。本遺跡からも古墳時代中期から後期の埴輪が出土しており古墳の存在が想定できる。この種の古墳は、集落に隣接して営まれるため、検出地点の遠くないところに同時期の集落が存在すると予想されるが、実態は明らかでない。

飛鳥・奈良時代は、奈良時代後期の集落の一端が本遺跡で、山賀遺跡と友井東遺跡(本遺跡の南2km)から水田址が検出されている。本遺跡は上述した墨書き器の存在から若江郡衙を想定する考え方もあるが、検出されている建物の規模が小さく遺物の量も少ない。むしろ、織田信長による若江城の大改築に伴う削平のため遺構は今のところ確認されていないが、遺物量の豊富さや種類の多さから見て後述する若江守に隣接した地を考えるべきである。

寺院址は、飛鳥時代後期創建の若江寺(南東約1km)あるいは白鳳時代に創建された西郡庵寺(南東約1.5km)が存在する。若江寺は、中央政権に直接結びつく瓦や唐三彩が出土しており河内における主要寺院の一つであることが判明している。また、本遺跡の名称の元となった「瓜生堂」は、平安時代後期に浄土教の民衆への浸透によって河内各所に創建された1堂程度の小規模な寺院であったと考えられる。

以降、室町時代に若江遺跡に存在した河内守護所(若江城)が示すように、本遺跡周辺は中世にいたるまで河内の中心として存在し、栄えた地域ということができる。この背景には、やはり河内湖および旧大和川の水運や、河内国のはば中心に位置する地勢的条件を考える必要がある。弥生時代後期段階で、本遺跡から巨摩廃寺遺跡の移住で明らかにされているように、連接する遺跡を含む限られた地域の中で、時代により自然条件の変化などに適応して居住地を替えたものと考えられる。



第2図 周辺遺跡分布図

## II 調査概要

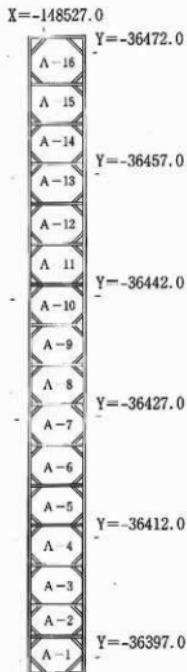
### 1. 調査方法と目的

今回の調査は、長辺約80m、短辺約8mの東西に細長い長方形の調査範囲が設定された。調査面積は約640m<sup>2</sup>である。

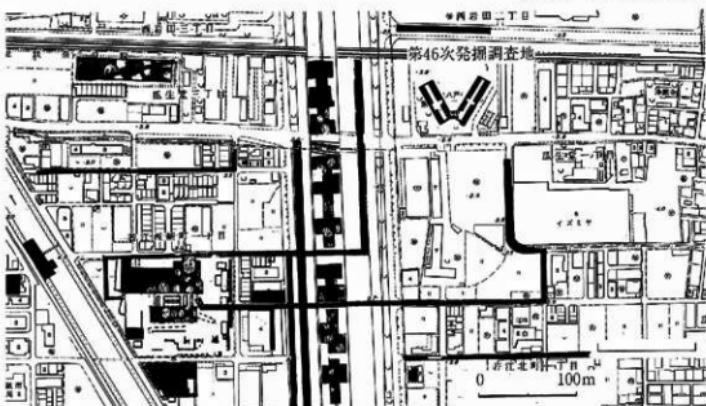
調査は上留の鋼矢板を打設した後、盛土および耕土を現地表下1.5mまで機械を用いて掘削した。以下は、調査対象深度とされた地表下4.5mまで人力で掘り下げ行なった。機械掘削終了後、鋼矢板保持のため1段渠の仕保工を入れた。仕保工が5m毎に区切られたのを利用して、土捨て場とした西端の1区画を除き、東から西に小地区に区分しA-1からA-15と仮称して調査を実施した。

調査の目的は、従前の調査結果などから下記の事柄を明らかにすることを主とした。

- 1) 従前の調査結果から調査地は、本遺跡の北限にあたり弥生時代に存在した河内湖の南岸にあたる地と考えられるため、当時の岸辺の状況や遺構・包含層の広がりの確認。
- 2) 遺跡内各所で検出されている方形周溝墓が、調査地点まで存在するかの確認。
- 3) 弥生時代以降近世に至るまでの遺構存在の有無の確認。特に、遺跡の東端で最近、平安時代後期に創建されたと考えられる「瓜生堂」所用の瓦が出土し、これに関連する遺構の確認。
- 4) 土層の堆積状況を確認することにより、弥生時代から現代までの調査地の自然状況変化と推移の究明。



第3図 調査地地区割図



第4図 調査地位置図

## 2. 調査経過

主要な現場調査は平成10年6月1日より開始し、翌3月30日に終了した。途中元請け業者の倒産という予期せぬ事態のため、9月14日より11月9日まで調査が中断した。調査地区はA地区と仮称し、東から順に5m毎にA-1~15まで地区分けした。調査の進捗状況に合わせてクレーン車を使用した航空測量を3回、バケット車を用いた遺構全景写真撮影を5回行なった。

### 調査日誌抄

- 8月3日 調査地区東端から機械掘削を開始する。
- 8月20日 現地表面から約1.5m掘り下げ、機械掘削を終了する。
- 8月27日 人力掘削を開始する。地区内北側に先行トレンチを設定し、掘り下げる。旧耕土・床土・砂層を確認する。旧耕土中より、瓦器・中世須恵器などが出土する。
- 9月14日 砂層掘削途中で上述の理由により現場調査を中断する。
- 11月10日 約2ヵ月ぶりに調査を再開する。先行トレンチに堆積した砂の再掘削を行なう。
- 11月16日 先行トレンチを弥生包含層上面まで掘り下げる。現地表面から約3m付近で弥生中期包含層を確認する。上部を覆う砂層の厚さは1mを超す。A-11~13で川1を検出し、庄内期の土器が少量出土する。
- 11月18日 排水を確実にするため先行トレンチを拡幅し、さらに掘り下げを開始する。
- 11月26日 先行トレンチの掘削終了する。土層断面から、西側へ遺構面は傾斜しており、包含層は厚い場所では50cmを超え、遺構面は最低2面あるのを確認する。包含層をA・B・C・Dと分層する。B・C層は東・西端のみ存在する。以降、各層位毎に掘り下げる。
- 12月7日 包含層上面までの東・西・南壁土層断面図を作成する。各地区で自然堤防と考えられるマウンド状の起伏を確認する。
- 12月15日 A-9~12の自然堤防の凹地から土器だまり1・2を検出する。
- 12月16日 バケット車で遺構全景写真撮影を行なう。足場を設置するよりも能率的であった。
- 12月18日 クレーン車による航空測量および土器だまり1・2詳細撮影を行なう。
- 12月22日 調査区内の5ヵ所の高まり部分を東よりマウンド1~5と設定し、5cm毎に掘り下げる。マウンド5で土器だまり3を検出する。
- 12月24日 土器だまり3で被焼により割れた大型石窓が出土する。
- 1月7日 マウンド掘削続く。各地区でピットや溝などの遺構を検出する。マウンド1で性器形石製品を取り上げる。A-15で川2(新)を検出する。
- 2月3日 中面遺構を残しながら掘り下げ続く。マウンドの下面遺構は厚さ約50cmの盛り土を挟んで検出される。川2(IH)で弥生土器や木製品等出土する。
- 2月15日 性器形石製品の出土状況を復元し、写真撮影する。
- 2月16日 井戸状遺構中の木製品検出状況から、未製品の貯蔵穴の可能性が高まる。
- 2月27日 現地説明会を行う。性器形石製品の出土が報道機間に大きく取り上げられたため、雨模様の天候不順にもかかわらず、約300人の市民の参加を得て成功裡に終わる。デジタルカメラで撮影した写真パネルなども好評であった。
- 3月12日 柱・杭などのピットを断ち割りのために残し、深堀りを開始する。多数のピットで礎板やヨシと考えられる植物纖維を利用した敷物を検出する。
- 3月30日 西端の南壁掘り下げ中に、下部の自然堆積層から繩文土器片が1点出土する。A-13・14で川3を検出し、種子などの植物遺体を採集する。

### III 遺 跡

#### 1. 基本層序

今回の調査で確認した層序について、記述の便を計るために、基本層序を模式化して説明する。個々の層序に関しては別掲の土層断面図を参照されたい。

第1層 盛土。厚さ約130cm。近畿日本鉄道玉川工場建設に伴い、耕土の上に盛られる。

第2層 旧耕土。灰色粘土。厚さ約40cm。奈良時代から近代以降の遺物が細片で少量含まれる。

第3層 床土。黄褐色粘土。厚さ約20~50cm。種などの根に付着した鉄分の沈着が見られる。主に瓦器や土師器、肥前系磁器などの中世~近世以降の遺物が細片で少量含まれる。遺構は確認されなかった。

第4層 灰色細粒砂~中粒砂、黄灰色シルトの互層。厚さ約80~130cm。ヨシなどの植物遺体を含むレンズ状堆積層や流木が混じる庄内期以降の水成の堆積層で、各地区で厚みが変化する。

川1 淡黄色~灰色の細礫~細粒砂。幅11m以上、最大厚さ約145cm。肩部分は灰色細粒砂~シルト。調査地西側A-11~13で確認された。流木が多量に見られ、畿内第V様式~庄内期に属する甕などの土器が少量含まれる。上器は摩滅していた。第4層を切り込んでいることから、庄内期以降に流れた河川と考えられる。

第5層 灰色粘土。厚さ約20~40cm。

第6層 黒色粘土。厚さ約6~15cm。

第7層 灰色粘土。厚さ約10~20cm。

第8層 黒色粘土。厚さ約6~18cm。

第9層 灰色粘土。厚さ約6~20cm。

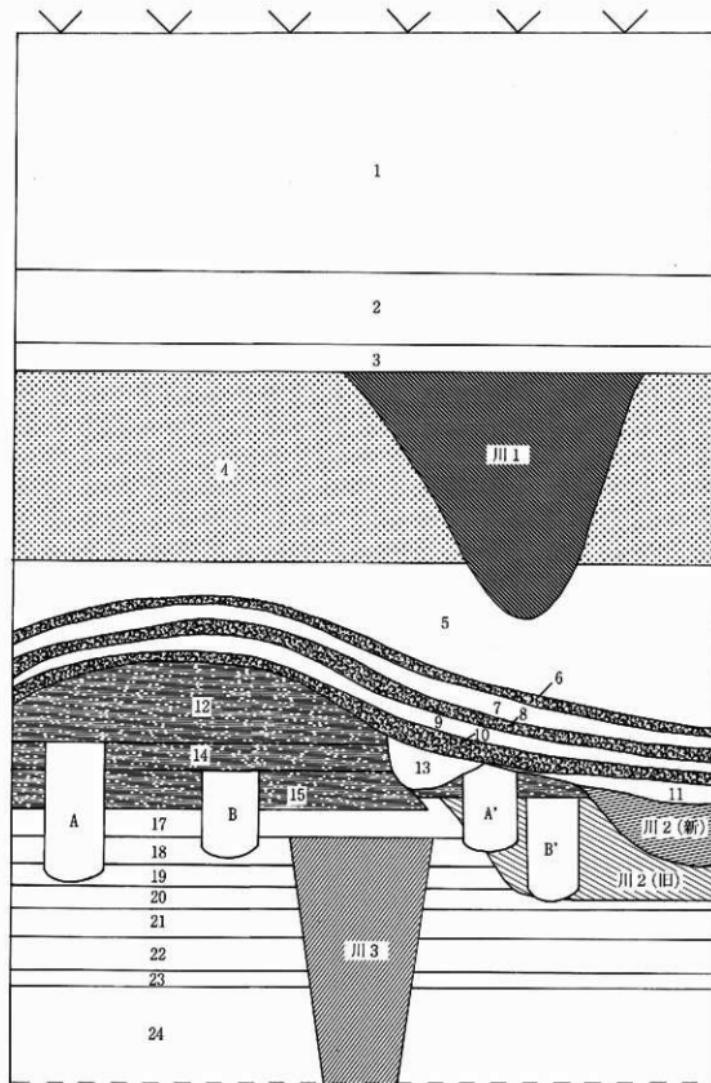
第10層 黒色粘土。厚さ約4~15cm。畿内第III様式後半~IV様式前半に属す土器を少量含む。

第11層 灰色粘土。厚さ約6~20cm。調査地西端およびマウンド状の起伏(自然堤防)の途切れた凹地で確認された。畿内第III様式後半~IV様式前半に属す土器を少量含む。

今回の調査では第5~9層からは遺構・遺物を検出せず、堆積時期が明らかにできなかつたが、東に隣接する平成11年度実施の第47-1次調査で、連続する層内から遺物が出土したため、堆積時期が限定できた。この調査で第7層から庄内期の手焙形土器が、第8層では庄内期初頭の土器が、第9層では畿内第V様式後半の上器が出土した。したがって、第5・6層は庄内期以降、第7・8層は庄内期、第9層は畿内第V様式の堆積層である。

第10・11層は畿内第IV様式の堆積層である。層厚はほぼ均一であるが、下層は下層のマウンド状の起伏(自然堤防)の影響を受けて凸凹のある堆積となっている。3条の黒色粘土層には陥地化したこととを示す炭化物やヨシなどの植物遺体が混じる。間層の灰色粘土は水没時に堆積した粘土である。このことから、調査地が畿内第IV様式~庄内期までの短い周期で陥地化・水没を繰り返したことが判明した。1条目(第6層)の黒色粘土上面のレベルは高い所でT.P.+0.2m前後、低い所でT.P.-0.5m前後、第10層上面のレベルは高い所でT.P.-0.1m前後、低い所でT.P.-0.8m前後である。

第12層 オリーブ黑色~黒色細礫~細粒砂を含む粘質土。炭化物や植物遺体が混じる。厚さ約15~50cm。調査地点における居住域が廃絶したものの盛土である。明確な生活痕跡は確認されず数条の溝と畿内第III様式後半~IV様式前半に属す遺物を含む土器だまりを検出した。



第5図 基本層序模式図

第13層 黒色シルト質粘土。後述する川2【古い時期を(旧)、新しい時期を(新)と仮称】に堆積した層で西端のA-13・14地区を覆う。下面造構形成段階から流れ、深さと幅を変えながら上面造構段階まで存在したと考えられる。畿内第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式前半に属す土器の他木製品が多く出土した。幅13m以上、最大厚さ約140cm。

第14層 中面造構に伴う盛土。厚さ約20~40cm。

第15層 下面造構に伴う盛土。厚さ約20~40cm。

第14・15層は今回確認されたマウンド状の起伏(自然堤防)が起因した人為的な盛土である。東端と西端のマウンドを除いて共通する。土質は第12層と基本的に同一である。東端のマウンドでは中粒砂混じりオリーブ黒色粘土(厚さ約10~30cm)に変わるが基本的に同一の性格をもつ。畿内第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式前半に属す土器などの遺物を含む。

第16層 上面造構に伴う盛土。厚さ約10~30cm。灰色シルト質粘土に暗オリーブ灰色粘土がブロック状に混じる。西端のマウンドで部分的に確認された。

第14~16層上面では、いずれも畿内第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式前半に属す土器を伴う柱穴や溝・土坑を多数検出したが、土器に型式差は認められない。このことから上～下面造構の形成された時期は限定される。

川2(新) 上層は灰色粗砂～中粒砂、下層は黄灰色中粒砂～細砾、最大厚さ140cm、幅5m以上。調査地西端で確認された。畿内第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式前半に属す土器や木製品などの遺物を含む。

川3 灰色微～細粒砂。推定最大厚さ3m以上。土器は出土しなかったが細かい流木や種子などの植物遺体を含む。調査地西側で第17層を切り込んで流れていたことが確認された。第24層以下に続き、底は確認できなかった。

以下、いわゆる地山層として下記の層が続く。

第17層 オリーブ灰色粘土。厚さ約20cm。上面のレベルはT.P. -0.7m前後である。

第18層 オリーブ黒色粘土。厚さ約15cm。ヨシなどの植物遺体を含む。

第19層 オリーブ黒色粘土。厚さ約15cm。

第20層 黒色粘土。厚さ約12cm。

第21層 暗オリーブシルト質灰色粘土。厚さ約20cm。

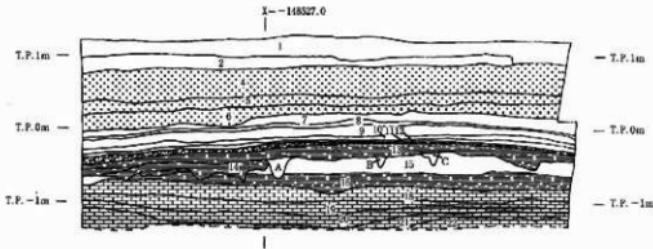
第22層 オリーブ黒色シルト質粘土。厚さ約20cm。上面のレベルはT.P. -1.5m前後である。

第23層 黒色シルト。厚さ約10cm。

第24層 オリーブ黒色シルト。厚さ約30cm以上。

以下、調査予定掘削深度を越えるため、未調査である。

第17~24層は粘上ないしシルトの水平堆積層である。造構の中で柱穴など、深く掘られていたものは第24層まで達していたが、層中には遺物は含まれていなかった。但し、23層中で縄文時代後期から弥生時代中期までに少なくとも約1.1m以上の堆積があったことを示す。層の堆積状況からみて、河内湯ないし河内湖の縁辺部の堆積層と考えられる。第18層中で認められたヨシは、この層の堆積時に一時期陸地化したこと示している。

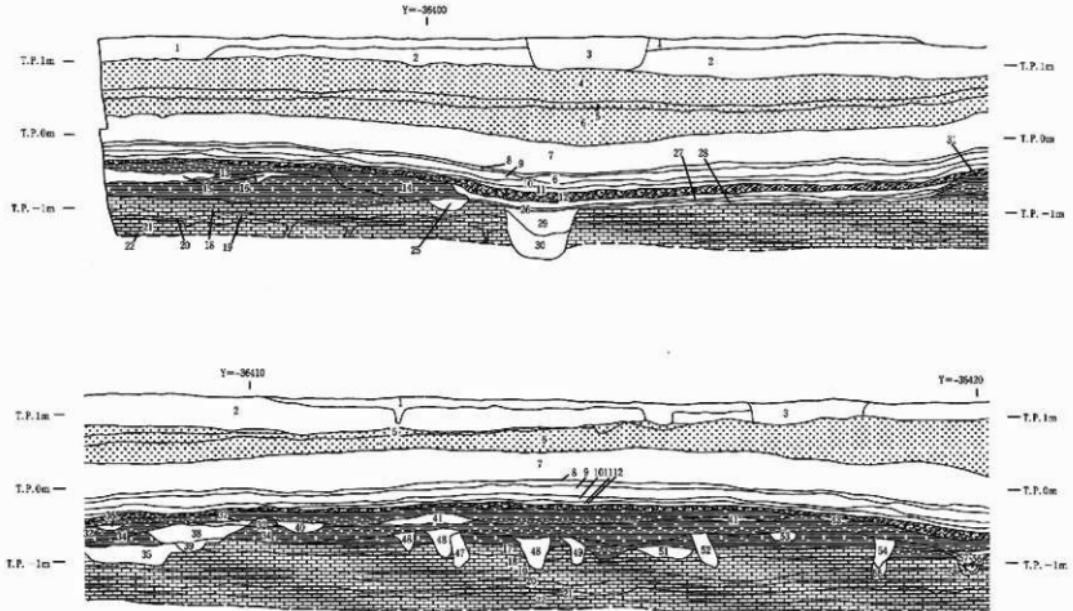


第6図 東壁断面土層図

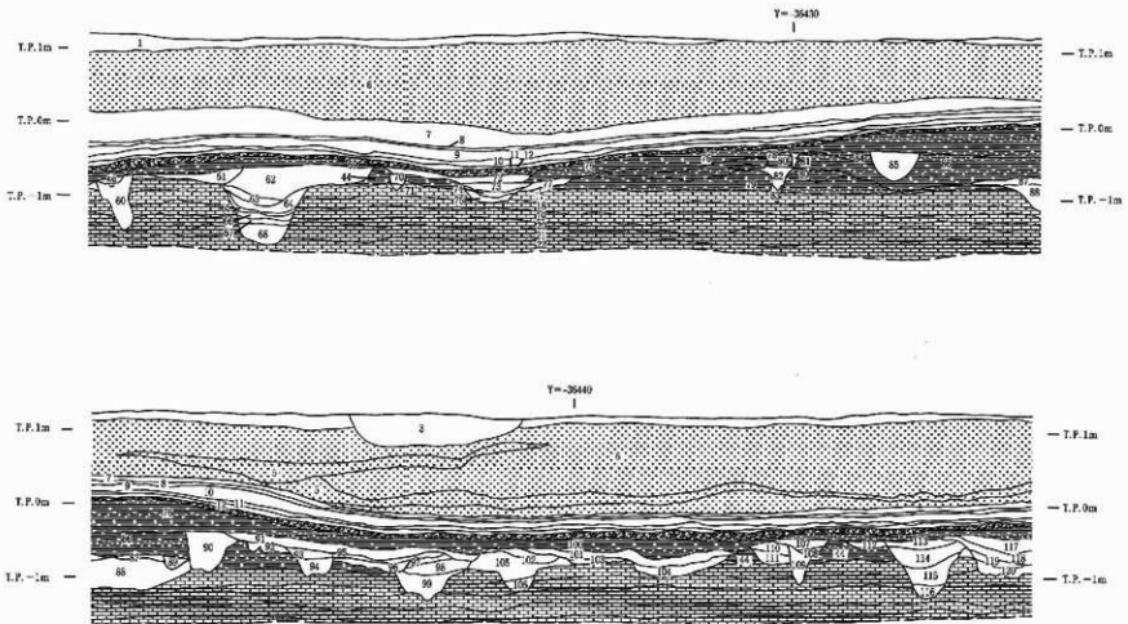
- |                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| 1. 灰色粘土 (旧耕作土、土器含む)             | 砂層  |
| 2. 黄褐色粘土、鉄分沈着 (床土、土器含む)         | 包含層 |
| 4. 黄褐色細粒砂～灰色シルトの互層              | 盛土  |
| 5. 黄灰色粘土                        | 川   |
| 6. 灰色粗粒砂～中粒砂、黄灰色シルトの互層          | 地山層 |
| 7. 灰色粘土                         |     |
| 8. オリーブ黒色粘土                     |     |
| 9. 灰色粘土                         |     |
| 10. 黒色粘土                        |     |
| 11. 灰色粘土                        |     |
| 12. 黑色粘土 (弥生土器含む)               |     |
| 13. オリーブ黒色粘質土、砂礫混じり (盛土、弥生土器含む) |     |
| 14. 黒色粘質土、砂礫混じり (盛土)            |     |
| 15. 黒色粘質土 (盛土、性器形石製品出土)         |     |
| 16. 暗オリーブ灰色粘質土 (盛土、弥生土器含む)      |     |
| 18. オリーブ黒色粘土                    |     |
| 19. オリーブ黒色粘土                    |     |
| 20. 黒色粘土                        |     |
| 21. 暗オリーブ灰色シルト質粘土               |     |
| 22. オリーブ黒色シルト質粘土                |     |
- A. 断面ピット  
B. 断面ピット  
C. 断面ピット



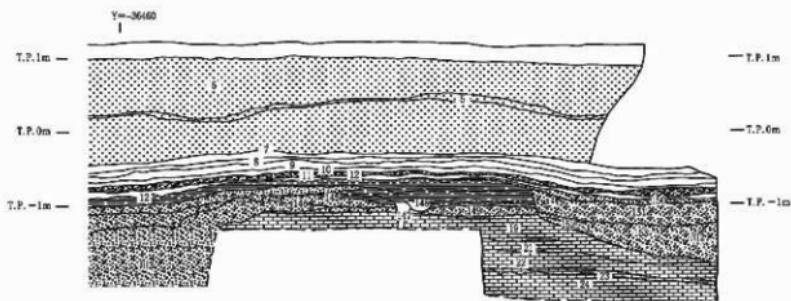
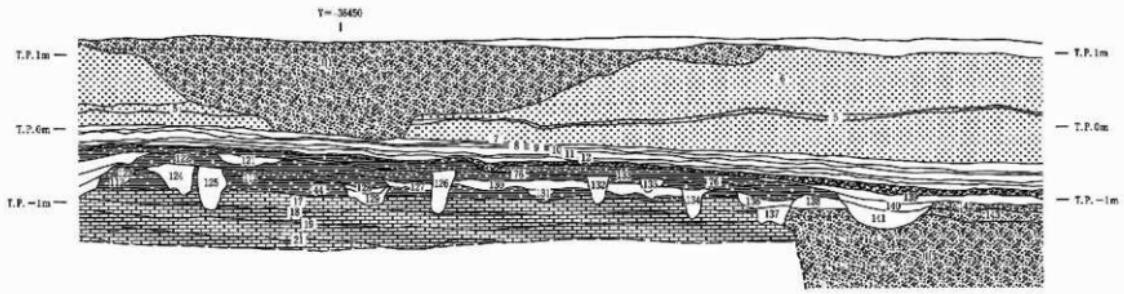
写真1 作業風景



第7図 南壁断面土層図



第8図 南壁断面土層図



第9図 南壁断面土層図

## 南壁断面 I:層一覧

1. 灰色粘土(旧耕作土、土器含む)
2. 黄褐色粘土、鉄分沈着(粘土、土器含む)
3. 灰色粘土と黄褐色粘土が混ざる
4. 黄褐色細粒砂～灰色シルトの互層
5. 黄褐色粘土
6. 灰色粗粒砂～中粒砂、黄灰色シルトの互層
7. 灰色粘土
8. オリーブ黑色粘土
9. 灰色粘土
10. 黒色粘土
11. 黑色粘土
12. 黑色粘土(弥生土器含む)
13. オリーブ黒色粘質土、砂礫混じり(盛土、弥生土器含む)
14. 黑色粘質土、砂礫混じり(盛土)
15. 黑色粘質土(盛土、器形器石製品出土)
16. 暗オリーブ灰色粘質土(盛土、弥生土器含む)
17. オリーブ灰色粘土
18. オリーブ黒色粘土
19. オリーブ黒色粘土
20. 黑色粘土
21. 暗オリーブ灰色シルト質粘土
22. オリーブ黒色シルト質粘土
23. 黑色シルト(純文土器 1点含む)
24. オリーブ黒色シルト
25. オリーブ黒色中粒砂～細粒砂を含む粘土と暗オリーブ灰色粘土が混ざる(土坑A)
26. 暗オリーブ灰色シルト質粘土
27. 黑色シルト質粘土
28. オリーブ黒色シルト質粘土
29. オリーブ黒色中粒砂～細粒砂を含む粘土と暗オリーブ灰色粘土が混ざる
30. 暗オリーブ灰色粘土、灰色細粒砂～シルトが混ざる

溝40

土坑B

溝19

46. 黒色粗砂～細粒砂を含む粘質土にオリーブ灰色粘土が混ざる(ピット112)
47. 黒色粗砂～細粒砂を含む粘質土に暗オリーブ灰色粘土が混ざる(ピットb)
48. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土にオリーブ灰色粘土が混ざる(ピット360)
49. 暗オリーブ灰色粗砂～細粒砂を含む粘質土にオリーブ灰色粘土が混ざる(ピットc)

土坑13

50. 岩層の下部に黑色粗砂～細粒砂
51. 暗緑灰色砂礫
52. 暗緑灰色粘質土(ピットd)
53. オリーブ黑色砂礫(ピットe)
54. オリーブ黑色砂礫

ピットf

55. 灰色砂礫
56. オリーブ黑色細粒～粗粒砂
57. 暗緑灰色粘質土
58. オリーブ黑色粘質土

ピットg

59. オリーブ黑色中粒砂～中粒砂
60. 暗緑灰色粗粒砂～中粒砂
61. 暗オリーブ灰色粘質土にオリーブ黒色粘質土が混ざる(土坑25)
62. 黑色標～細粒砂と灰色粘土が混ざる(溝20)

ピットh

63. オリーブ黒色粘質土
64. 暗オリーブ灰色粘質土にオリーブ黒色粗砂～細粒砂が混ざる
65. 植物遺体堆積層
66. 暗オリーブ灰色粘質土とオリーブ黒色粘質土が混ざる

土坑D

67. 暗オリーブ灰色粗砂～中粒砂とオリーブ黒色粘質土が混ざる
68. オリーブ黑色粗砂～中粒砂とオリーブ黒色粘質土が混ざる
69. オリーブ黑色中粒砂～シルト(盛土)
70. 暗緑灰色砂礫にオリーブ黑色粘質土が混ざる

ピットi

71. オリーブ黑色粘質土
72. 黑色粘質土(溝15)
73. 暗オリーブ色粗砂～中粒砂の下部に黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土が混ざる
74. 黑色中粒砂～シルトを含む粘質土の下部に植物遺体堆積層

土坑E

75. 暗オリーブ灰色粘土と灰色粗砂～細粒砂が混ざる
76. 細纖維～細粒砂を含む粘質土(弥生土器含む)
77. 暗オリーブ灰色粘土と黑色粗砂～細粒砂が混ざる
78. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土に暗オリーブ灰色粘土がブロック状に混ざる(盛土、土器含む)

土坑F

79. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土(土坑16)
80. オリーブ黑色中粒砂～細粒砂を含む粘質土(盛土)
81. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土(ピットj)
82. オリーブ黑色中粒砂～細粒砂を含む粘質土

土坑G

83. 灰色粗砂～細粒砂と褐色粘土が混ざる
84. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土に暗オリーブ灰色粘土がブロック状に混ざる(盛土、土器含む)
85. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土に暗オリーブ灰色粘土が混ざる(ピット252)

土坑H

86. オリーブ黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土に暗オリーブ灰色粘土が部分的に混ざる(盛土、土器含む)

40. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土(土坑1)
41. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土に暗緑灰色粘土が混ざる(土坑2)
42. 暗緑灰色粘土
43. 黑色細纖維～細粒砂を含む粘質土に暗緑灰色粘土が混ざる(溝9)
44. 暗オリーブ・暗緑灰色中粒砂～細粒砂(盛土)
45. オリーブ黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土(ピットa)

溝32	87. 灰色細粒砂～シルト 88. 灰オリーブ色粗砂～細粒砂下部に灰色中粒砂～シルトの互層 89. 黒色中粒砂～細粒砂を含む粘質土 90. 黑色細粒～細粒砂を含む粘質土下部に暗オリーブ色粘土が混ざる(溝34) 91. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土(土器だまり1)	上坑H	砂～シルトと暗オリーブ灰色粘土が混ざる(ピットm)
			126. 灰色粘土と黒色細粒砂～シルトが混ざる(ピット13)
土坑24	92. 黒色中粒砂～シルト(ピットk) 93. 炭と黒褐色細粒砂～シルトの互層 94. オリーブ黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土に 灰色粘土がブロック状に混ざる 95. 炭と黒褐色細粒砂～シルトの互層 96. オリーブ黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土に 灰色粘土がブロック状に混ざる 97. 灰オリーブ色中粒砂～細粒砂に黒色中粒砂 ～細粒砂が混ざる 98. ピオリーブ色中粒砂～細粒砂 99. 灰色粘土 100. 黒色細粒砂～シルト 101. 炭と植物遺体堆積層の互層 102. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土に灰色粘 土がブロック状に混ざる 103. 黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土と暗オリ ーブ灰色粘土が混ざる 104. 暗オリーブ灰色粘土に灰色中粒砂～シル トが混ざる	土坑 I	127. 黒色中粒砂～細粒砂(溝25) 128. 灰色粘土と黑色シルトが混ざる 129. 灰色粘土と灰色中粒砂～細粒砂と炭が混 ざる 130. 黑色シルトに炭が混ざる 131. 炭
			132. オリーブ黑色中粒砂～シルトとオリーブ 黑色・暗オリーブ黑色粘土が混ざる(ビ ットn) 133. 灰色シルトと黒色中粒砂～シルトが混 ざる(ピットo) 134. 黑色細粒砂～シルトと灰色・暗オリーブ 灰色粘土が混ざる(ピットp) 135. 黑色細粒砂～シルト(盛土) 136. オリーブ黑色シルト質粘土と灰色・黑 色粘土が混ざる 137. オリーブ黑色シルト質粘土と灰色粘土と 灰オリーブ色中粒砂～細粒砂が混ざる 138. 灰オリーブ色・灰色シルト質粘土が混 ざる(盛土) 139. 灰色粘土(弥生土器含む) 140. 黑色細粒～細粒砂を含む粘質土と黒色中 粒砂～シルトを含む粘質土が混ざる
溝37	106. 暗オリーブ灰色細粒砂～シルト 107. オリーブ黑色粗砂～細粒砂を含む粘質土 108. 灰オリーブ色中粒砂～細粒砂に黒色中粒 砂～細粒砂が混ざる 109. 黑色中粒砂～細粒砂を含む粘質土下部に 灰色粘土とオリーブ黑色中粒砂～細粒砂 が混ざる 110. 黑色中粒砂～細粒砂を含む粘質土に灰色 中粒砂～細粒砂が混ざる 111. 暗オリーブ灰色中粒砂～細粒砂と灰オリ ーブ色粗砂～細粒砂が混ざる 112. オリーブ黑色中粒砂～細粒砂(盛土) 113. 黑色粗砂～細粒砂にオリーブ黑色粘土が ブロック状に混ざる 114. 断オリーブ灰色・灰褐色粘土と灰色中粒砂 ～細粒砂がブロック状に混ざる 115. 暗オリーブ灰色中粒砂～細粒砂と黑色中 粒砂～細粒砂が混ざる 116. 暗オリーブ灰色粘土と灰色中粒砂～シル トが混ざる 117. 黑色粗砂～シルトとオリーブ黑色粗砂～ 細粒砂を含む粘質土 118. 炭 119. 灰色粘土と灰色中粒砂～細粒砂が混ざる 120. 暗オリーブ灰色粘土とオリーブ灰色中粒 砂～細粒砂が混ざる 121. オリーブ黑色中粒砂～細粒砂を含む粘質土 (土坑G)	溝49	141. オリーブ黑色中粒砂～シルトと黑色・灰 色粘土が混ざる 142. 黑色中粒砂～シルトを含む粘質土 143. 黑色中粒砂～シルトを含む粘質土 144. 灰色・オリーブ黑色シルト質粘土と灰色 粘土が混ざる 145. オリーブ黑色粘土と灰色粘土とオリーブ 黑色シルトが混ざる 146. 灰色シルトと灰色粘土が混ざる(川2(IH)) 147. オリーブ黑色シルト質粘土と黑色粘土が 混ざる(ピットq) 148. オリーブ黑色シルト質粘土と灰色粘土が 混ざる(ピットr) 149. 灰色粘土と暗オリーブ灰色粘土が混ざる (川2(II))
			150. 黑色粘土・炭・植物遺体混ざる 151. 灰色粗砂～中粒砂 152. オリーブ黑色粘土と灰色粘土とオリーブ 黑色シルトが混ざる 153. 黄灰色細粒～中粒砂 154. 淡黄色・灰褐色細粒～細粒砂、肩部分は灰 色細粒砂～シルト(川1、土器含む) 155. 灰色細粒砂植物遺体混ざる(川3)
土坑F	122. 黑色中粒砂～シルトとオリーブ黑色中粒 砂～細粒砂と暗オリーブ灰色・灰色粘土 が混ざる(盛土、土器含む) 123. 黑色中粒砂～シルトと暗オリーブ灰色中 粒砂～細粒砂が混ざる 124. 暗オリーブ灰色・灰褐色中粒砂～細粒砂と 暗オリーブ灰色粘土が混ざる(ピット1) 125. 黑色中粒砂～シルトとオリーブ黑色細粒	川2 (II)	川2 (新)

## 2. 遺構

今回検出した遺構は、第Ⅲ章の基本層序で触れたように庄内期以降の河川、弥生時代中期の柱穴、杭などのビット・溝・土坑・落込などである。調査地の範囲の関係で溝については、全形を知ることができたものは少ない。以下、上層の遺構から順に説明する。

### 弥生時代後期以降の遺構

調査地では中・近世以降の耕作層と床上の下は厚い砂層の堆積に覆われ、弥生時代中期以降、中世に耕作地となるまでこの地では人為的な遺構は確認できず、前述のように庄内期以降の河川(川1)を1条検出するにとどまった。

川1 幅11m以上、深さ1.5mで断面形はV字形を呈す。南西から北東方向に流れる。摩滅した庄内土器などが少量出土した。

### 弥生時代中期末の遺構

今回の調査で検出した遺構がすべてこの時期に含まれる。A-1~15地区で少なくとも2面、多い地区では3面の遺構面を確認した。上面・中面・下面と仮称し、順に以下、主要な遺構について説明する。3面に分けたが、上～下面遺構の出土土器は大きく見れば畿内第Ⅳ様式前半の段階に限られる。

これらの遺構は、調査区の中で南北方向の溝で画された後述する5箇所のマウンド状の高まりを中心検出した。この高まりは、中期以前に形成された南から北に向かって舌状に延びる自然堤防の砂層の盛り上がりに起因する。現状でも名残が認められるが、当時の地表面は東から西へ低くなっている。同一の遺構面で比較した場合、東端と西端では約1mの高低差がある。

#### 上面遺構(第10・11図、図版4・5・12)

基本層序13層の上面から切り込む遺構である。T.P.-0.3m前後で検出した。溝14条と弥生土器が多く出土した土器だまりが3箇所、自然の窪地に堆積した包含層の可能性もある落込が1箇所認められた。柱穴等は検出していない。

#### 土器だまり

下層(中面遺構)のマウンド状高まりの周囲の窪地状になった場所で検出した。いずれも堆積土は黒色粗砂～細粒砂を含む粘質土で炭が混ざる。

土器だまり1 A-9・10で検出した。長軸3m以上、短軸2.5m、深さ0.3mで平面形が梢円形を呈する範囲に認められた。南端は調査区外に延びる。

土器だまり2 A-12で検出した。長軸2.5m、短軸2m、深さ0.1mで平面形が不整形な方形を呈する範囲に認められた。

土器だまり3 A-12・13で検出した。長軸6m、短軸3.5m、深さ0.1mで平面形が不整形な方形を呈する範囲に認められた。

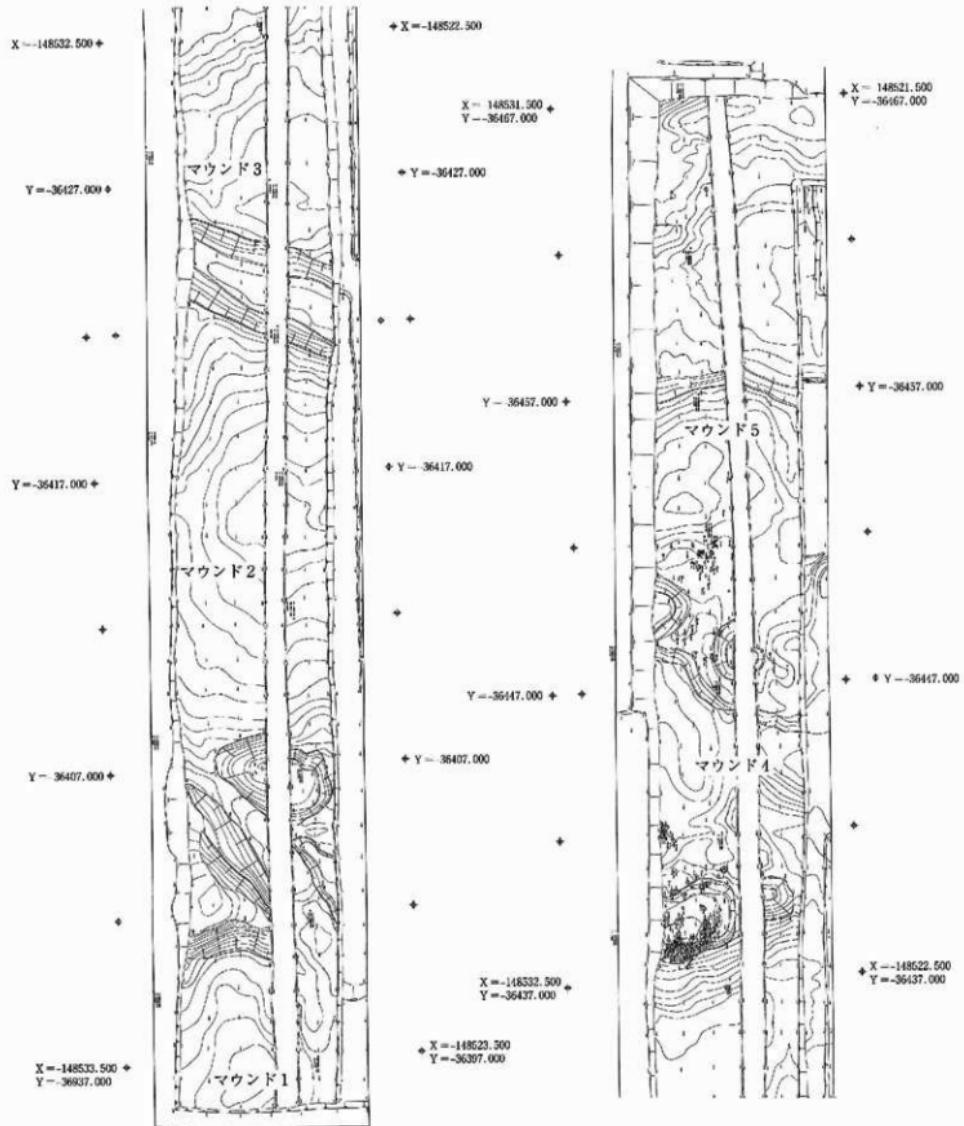
#### 溝

調査地のほぼ全域に散漫に認められた。大半が幅0.4m前後、深さ0.1~0.2m前後の浅い溝であり、南東から北西方向に流れる。

溝3 A-3・4で検出した。長さ5m以上、幅0.6m、深さ0.1mで断面形は皿状を呈す。弥生土器が少量出土した。中面遺構段階に形成された溝19の名残である。

溝9 A-6で検出した。長さ5m以上、幅0.8m、深さ0.1mで断面形は皿状を呈す。弥生土器が少量出土した。

溝13 A-9で検出した。長さ4m以上、幅0.5m、深さ0.1mで断面形は皿状を呈す。骨製刺突具1点と弥生土器が少量出土した。



第10図 上面造構航空測量図

## 落込

落込1 A-3で検出した。平面形は長軸4m、短軸2.6mの梢円形を呈し、深さ0.3mで断面形は皿状を呈す。堆積土は灰色粘土1層である。組合せ狄鉢1点と弥生土器が少量出土した。

## 中面遺構(第11・12図、図版4~6)

中面の遺構は、T.P.-0.4m前後で検出した。遺構は、周囲より約0.6m高い断面形が台形状を呈するマウンド状高まり5箇所(マウンド1~5と仮称)上で、柱穴・杭などのピット・溝・土坑などが集中して認められた。この高まりは、自然堤防を利用して次に述べる下面遺構の形成段階から人為的に盛上して造られたものである。周囲には排水用かと思われる溝が存在する。これらの溝は下面遺構段階で形成されていたものも含まれる。また、この遺構面のピットの中には埋土が類似するため、当初一つの土坑として検出されたが、下面遺構面まで掘り下げた段階で複数のピット(柱穴)と判明したものもある。

## マウンド

マウンド1 A-1・2で検出した。幅6m、深さ0.2mのL字状に巡る溝(溝40)で囲まれた東西5.5m以上、南北4m以上の平面形が隅丸方形を呈するマウンドで、西端部分を中心にピット・溝を検出した。なお、この面の下層で後述する下面遺構との間(土層断面15層)で北寄りの場所から、男根状石製品と女性器形石製品が約0.4m離れて出土した。男根状石製品は先端を東に向け横向きに置かれた状態で、女性器形石製品は男根状石製品に対して凹んだ面を向け立てられた状態で検出した。

出土層からみて両者が置かれた時期は中面遺構と下面遺構が當まれた間であり、集落域ではなかつた時と思われる。溝40からはミニチュアの無頸甌が出土しており、このマウンドの一画が祭場であった可能性が高い。

マウンド2 A-4~6で検出した。東側を溝19に囲まれた、東西12.5m以上、南北5.5m以上の平面形が隅丸長方形を呈するマウンドで、中央部分を中心にピット・溝・土坑などを検出した。西側は溝15によってマウンド3と隔離される。

マウンド3 A-7~9で検出した。東側を溝15、西側を下面遺構段階に形成された溝32に囲まれた東西8m以上、南北4m以上の平面形が隅丸方形を呈するマウンドで、中央部分を中心にピット・溝・土坑などを検出した。

マウンド4 A-11・12で検出した。北側を下面遺構段階に形成された溝37をはじめとして複数の溝(自然の窪地の可能性もある)で囲まれた東西5m以上、南北2.5m以上の平面形がほぼ円形を呈するマウンドで、中央部分を中心に杭などのピット・溝を少數検出した。

マウンド5 A-12・13で検出した。北側をマウンド4から続いて巡る溝で囲まれた東西5m以上、南北5.5m以上の平面形が梢円形を呈するマウンドで、東部分を中心に杭などのピット・溝を検出した。

## 掘立柱建物

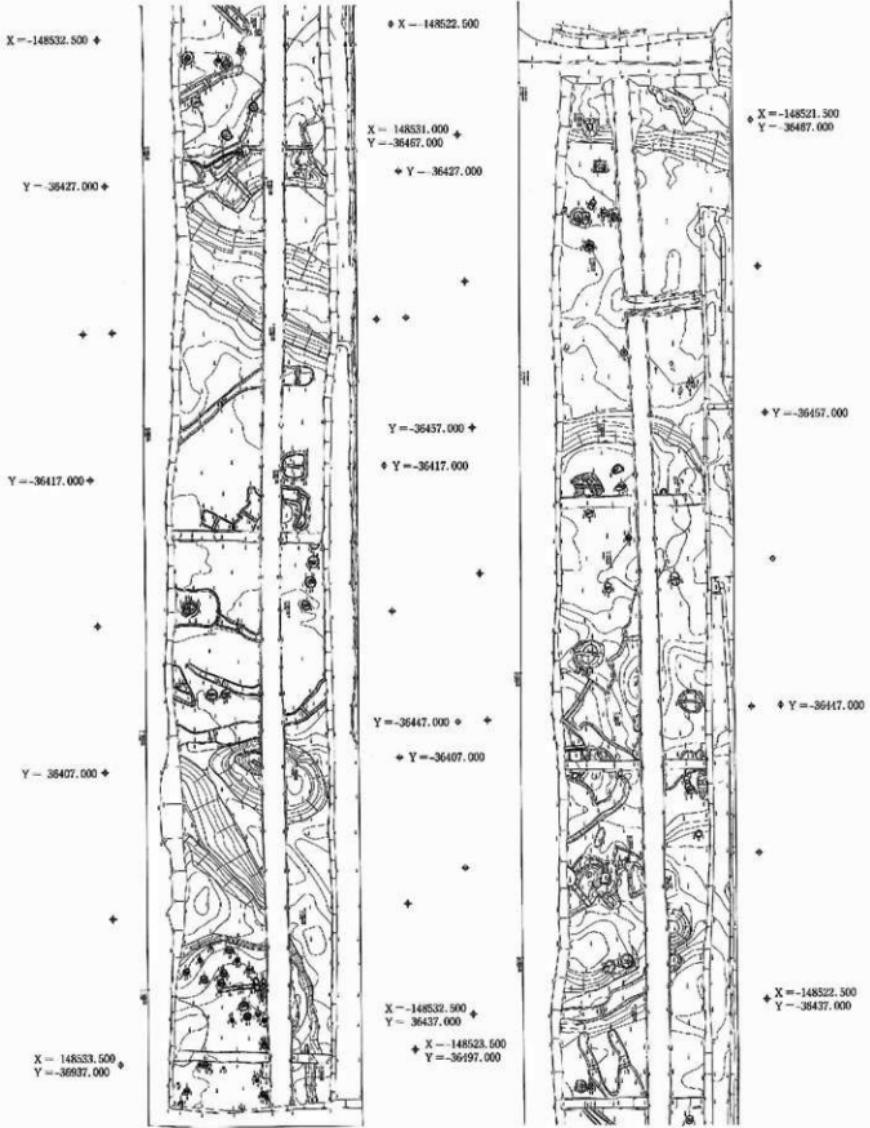
各マウンド上で柱穴と思われるピットを検出したことから掘立柱建物が存在したと考えられる。個別の掘立柱建物の復元についてはまだ検討を要するため、本報告で紹介したい。

## 土坑

各マウンドから検出されたが、下面遺構の溝の名残や調査区外に延びる溝になる可能性を含む。

土坑21 A-9で検出した。長軸1.2m以上、短軸1.0m、深さ0.6mで断面形は皿状を呈す。南端は調査区外へ延びる。溝32を切る。丸鉢1点と弥生土器が出土した。

土坑30 A-11で検出した。長軸2.2m以上、短軸0.8m、深さ0.6mで断面形は逆台形状を呈す。



第11図 上・中面遺構航空測量図

南端は調査区外へ延びる。堆積土は8層に分けられる。(南壁断面土層114~120)各層から弥生土器が出土した。

#### 溝

各マウンド上で検出した。小規模のものが大半を占めるが、前述したマウンドの周囲を巡る溝は比較的大きい。

溝19 A-3で検出した。長さ6m以上、幅0.6m、深さ0.1m。南から北方向に流れる。マウンド1・2を画する溝である。

溝15 A-6・7で検出した。長さ6m以上、幅1.3m、深さ0.2m。南西から北東方向に流れる。マウンド2・3を画する溝である。狭鉗・有頭棒各1点、モモ核1点、弥生土器が出土した。

#### 杭

A-11~13のマウンド4・5上を中心約60個検出した。直径約0.1m前後的小規模なものが多いが杭材が残るものも認められた。自然堤防を形成するシルト層に直接打込んでいた。

#### 川

基本層序で述べたように調査地西端で川を1条(川2)検出した。川2は下面遺構段階から存在し、埋没しながら中面遺構段階まで継続するため、(新)(旧)に分けて説明する。

川2(新) A-15で検出した。中面遺構が廃絶すると同時に埋没している。木庵丁・鍛柄各1点や弥生土器が出土した。

#### 下面遺構(第12図、図版7・8)

下面遺構は、中面遺構より約0.3m下で検出した。中面遺構との間は上述したように盛土(基本層序14・15層)が存在する。遺構は、柱穴・杭などのピット・溝・土坑などがある。柱穴ないしは杭と考えられるピットは約400個検出した。柱材や杭材が残存するものも多数認められたが、遺存しないものについては柱・杭の区別が困難なものがある。

#### 柱穴(第15~17図)

柱穴の掘り方は、径0.2~0.4m前後、深さ0.5~0.6m前後のものが多い。大半がヨシと思われる植物繊維を底に敷物状に敷き詰めていた。(図中の○が植物繊維を示す)植物繊維の厚さは現状で5cm前後である。埋土の状況から、穴を掘り、底にヨシを入れ、上から突き固めることで柱の沈下を防ごうとしたと考えられる。さらにヨシの敷物の上に礎板を置き、柱を載せたもののが多数認められた。礎板は、自然木を井桁状に組んだもの、板材を置いたもの、柱にホゾを切り丸太材を礎板として組合わせたものなど8タイプが認められた。これらのタイプのうち、板材を使用するもの、自然木を1本使用するもの、井桁に組んで使用するものの3タイプが多く見られた。しかし、1棟と考える掘立柱建物でも、柱と礎板の組み合せは一定していなかった。

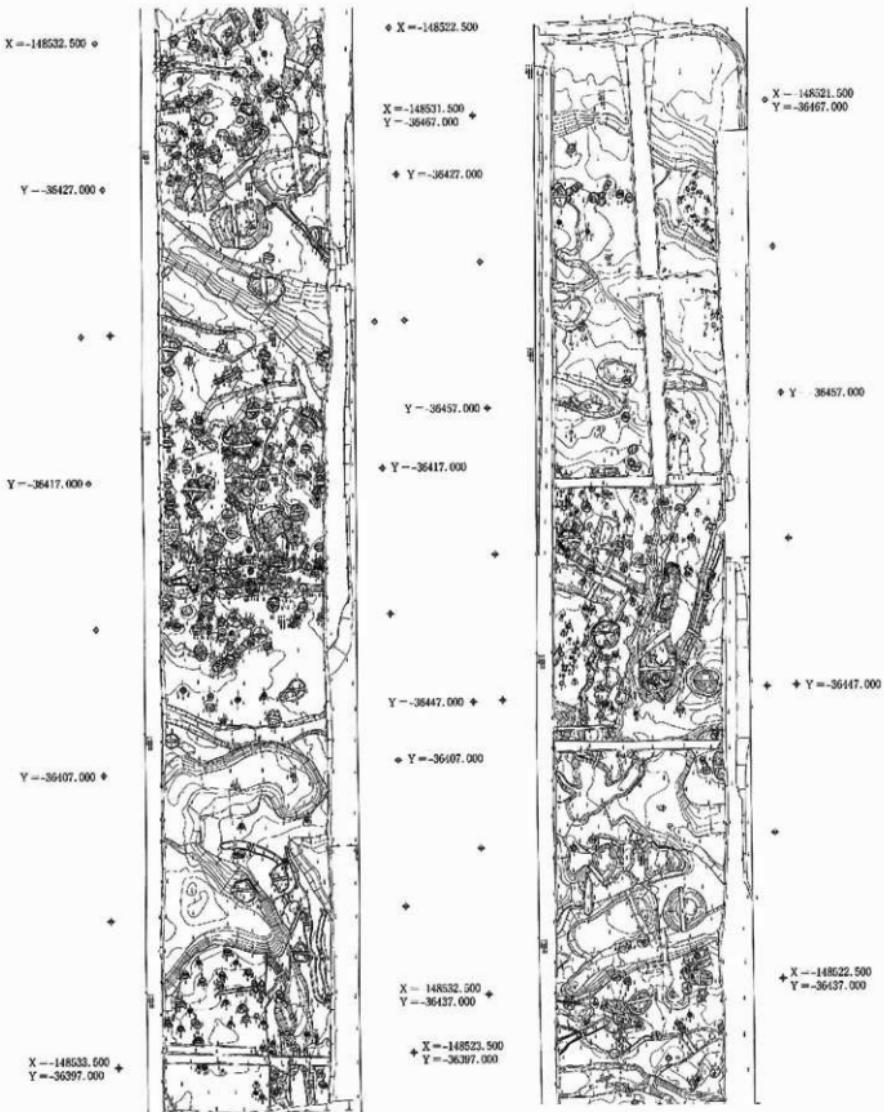
柱材は径15cm前後のものが多く、材質は正式の鑑定結果を待ちたいが大半は広葉樹と思われる。複数の柱穴に切り合いか認められること、密集していることから何回かの建て替えが行なわれ多数の掘立柱建物が存在したのは確定であるが、明確な復元はできなかった。今後検討を進めたいが、マウンド2付近の柱穴群について掘立柱建物(建物1~7と仮称)の一応の復元案を示しておく。(第14図)

建物1 北方向に主軸を持つ1×2間の建物を復元した。柱間は長辺2.4m、短辺1.2mである。

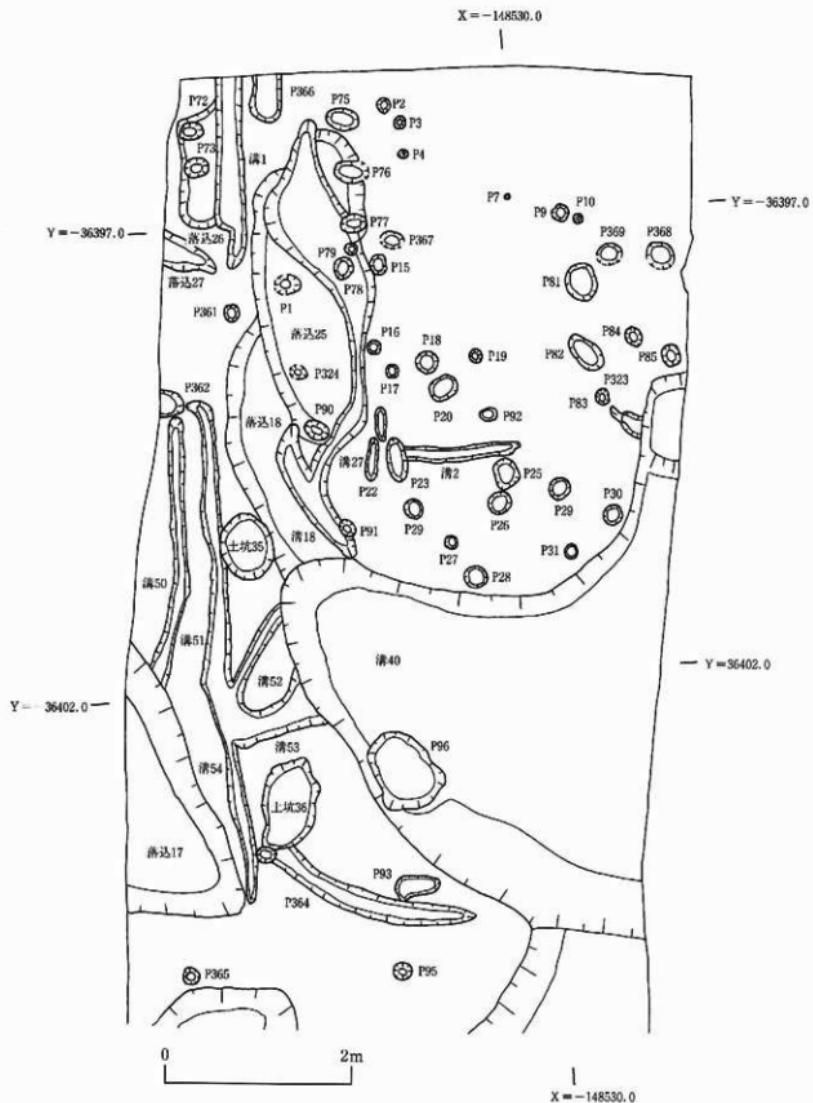
建物2 北北西方向に主軸を持つ1×1間の建物を復元した。柱間は長辺2.7m、短辺1.8mである。建物1と重複する。

建物3 北西方向に主軸を持つ1×1間の建物を復元した。柱間は長辺2.0m、短辺1.6mである。

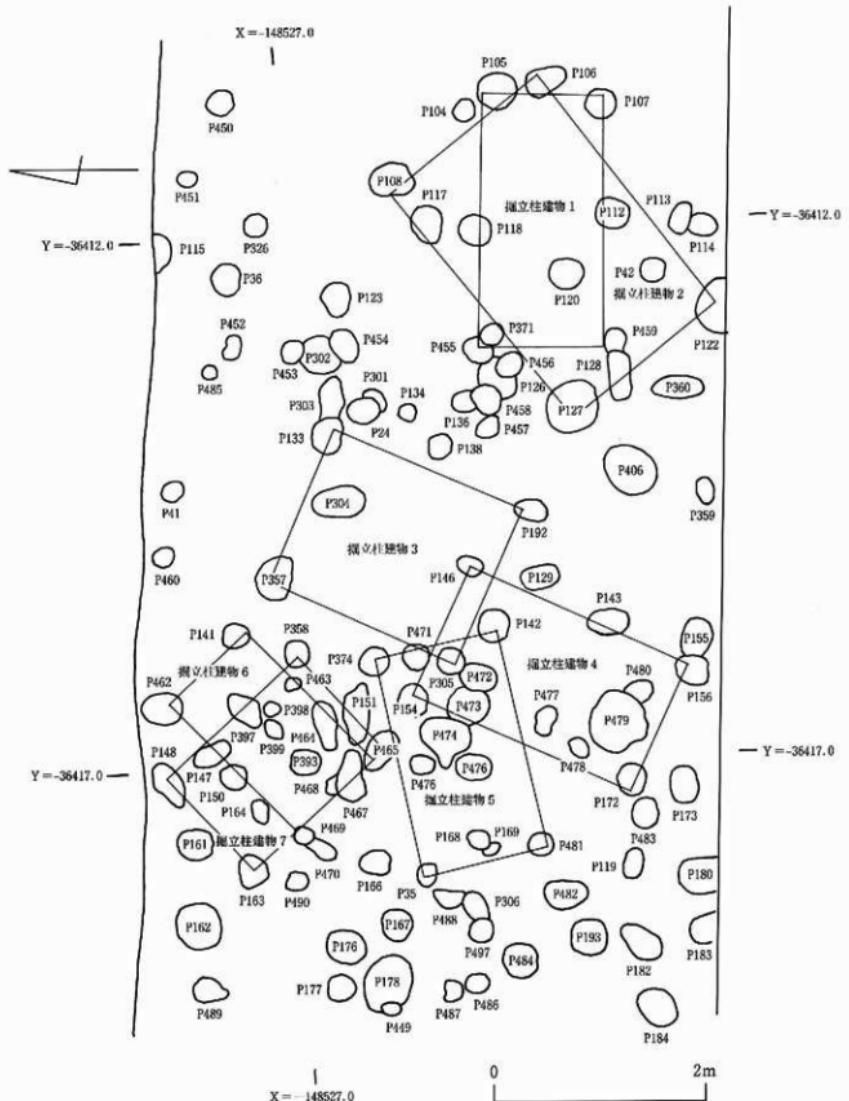
建物4・5と重複する。



第12図 下面遺構航空測量図



第13図 マウンド1周辺遺構図



第14図 A-4～6下面遺構面建物復元案図

建物4 北西方向に主軸を持つ $1 \times 2$ 間の建物を復元した。柱間は長辺2.2m、短辺1.4mである。建物3と主軸が同じであるが重複する。

建物5 北北西方向に主軸を持つ $1 \times 1$ 間の建物を復元した。柱間は長辺2.0m、短辺1.2mである。建物4と規模がほぼ同じであるが重複する。

建物6 北西方向に主軸を持つ $1 \times 1$ 間の建物を復元した。柱間は長辺1.8m、短辺1.2mである。建物7と重複する。

建物7 北東方向に主軸を持つ $1 \times 1$ 間の建物を復元した。柱間は長辺1.6m、短辺1.2mである。この復元案が正しければ、少なくとも3回の建て替えが想定できる。

#### 杭(第17図)

マウンド2・3を中心に検出した。残存している杭材は柱材とほぼ同じく径約10~15cm前後のものが多く、材質も広葉樹と思われる。盛土層に直接に打ち込んでいた。

#### 溝

各マウンド上で検出した。マウンド上の溝は小規模で長さ3m、幅0.6m、深さ0.2m前後のものが多い。マウンドを画する溝は比較的大きい。

溝32 A-9で検出した。長さ6m以上、幅1.2m、深さ0.3mで断面形は逆台形状を呈す。マウンド2の南西から北東方向にL字状に流れる。弥生土器が出土した。上坑21に切られる。東部分で隣接する土坑を3箇所検出した。

溝38 A-10・11で検出した。複数の溝に切られ不定形で、落込状を呈す。マウンド4付近はこれらの溝に高まりを削られ、ピットなどの上面遺構は少ない。棒材1点と弥生土器が出土した。

#### 土坑

マウンド3上で検出した。

土坑42 A-7で検出した。溝32と小溝でつながる。長軸2.7m、短軸1.6m、深さ0.2m。平面形は梢円形を呈す。加工木や弥生土器などが出土した。規模から木製品貯蔵穴の可能性が考えられる。

土坑40 A-7で検出した。土坑42と小溝でつながる。長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.2m。平面形は梢円形を呈す。槽・有頭棒各1点や弥生土器が出土した。規模から見て木製品の貯蔵穴の可能性が考えられる。

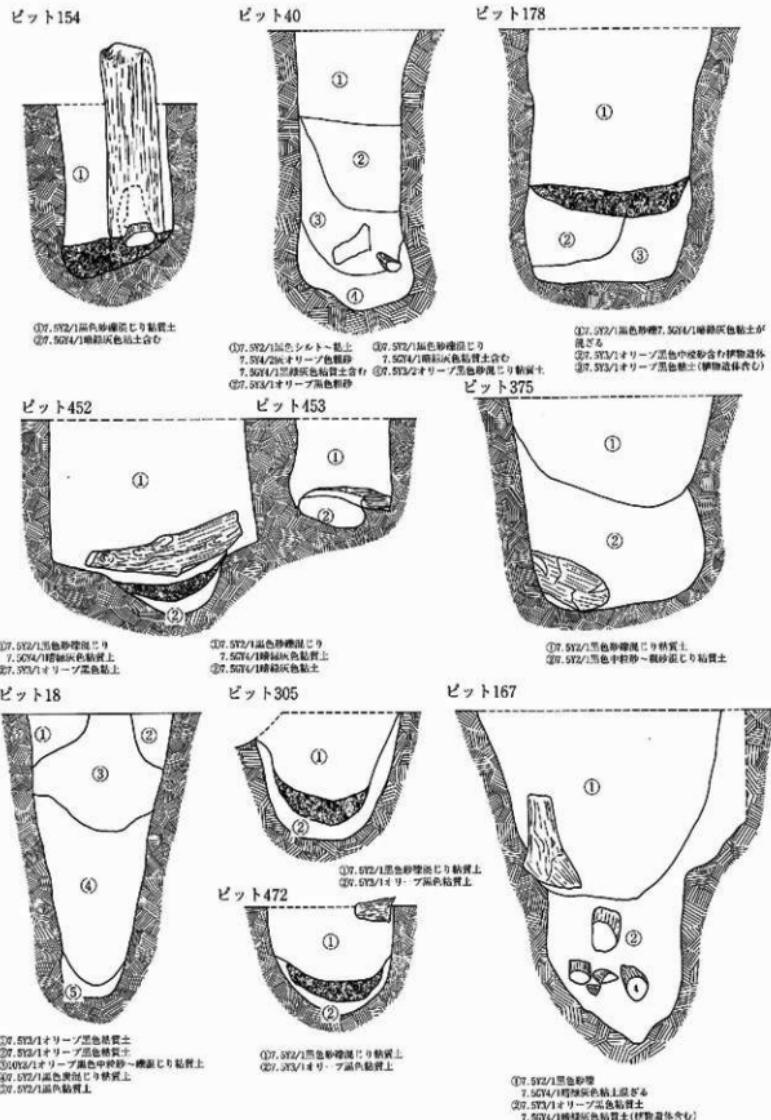
#### 井戸状遺構

A-11・12で検出した。全長4.5m、幅1.2m。東側部分は平面形が径約1.5mのほぼ円形で深くなっている。深さ0.8m。堆積土は黒色細粒砂～シルトを含む粘質土に腐葉土状の植物遺体混じりの單一層である。これに続く西側部分は深さ0.3mで堆積土は3層に分けられるが下層は東側と同一である。把手付槽・棒材や弥生土器が出土した。井戸とも考えられるが形態が不自然で、規模から木製品の貯蔵穴の可能性も考えられる。

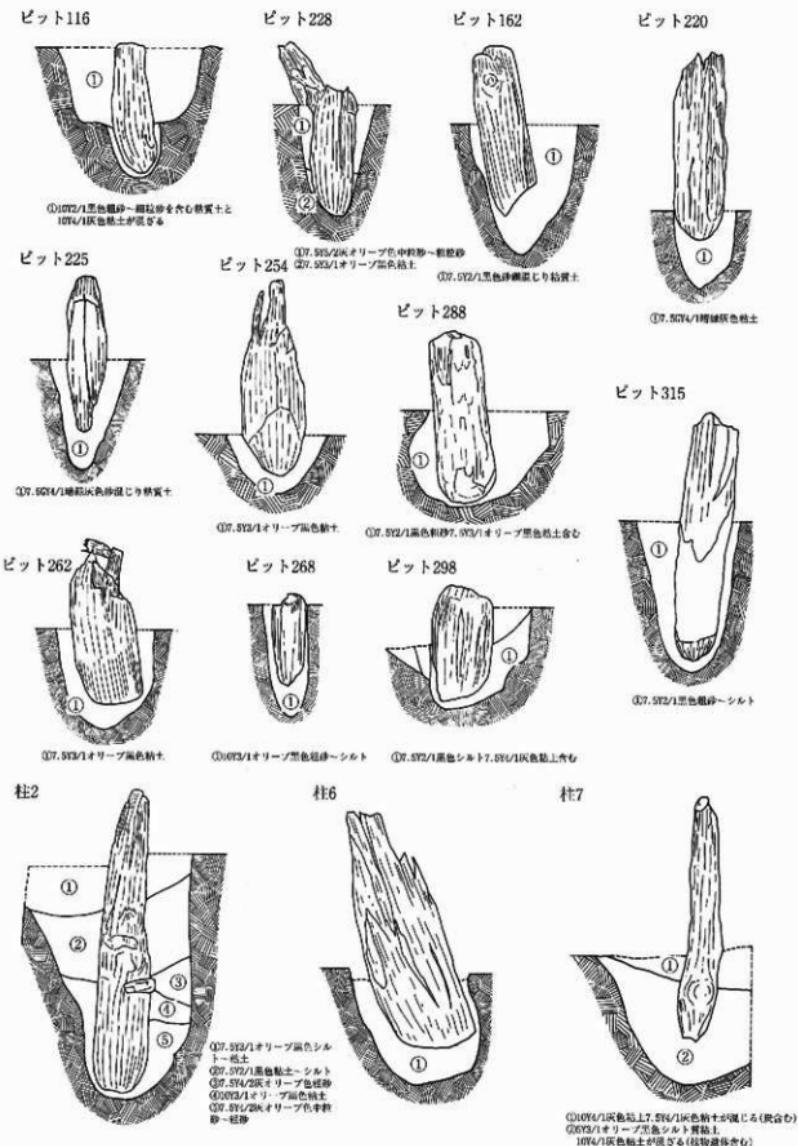
#### 川

川2(旧) A-13~15で検出した。幅13m以上、深さ1.4mで南から北方向に流れる。弥生土器や木製品、火を受けて炭化した稻の穂束などが出土した。遺物の出土状況などから調査地に居住域が設定された時期に西端近くを流れ、ごみ捨て場としても利用されていたと考えられる。

川3 A-13・14で検出した。幅6m以上、深さ3m以上。基本層序第17層を切り込み、底は第24層以下に統くため確認できなかった。土器は出土しなかったが、梢円板材1点が出土した。他に小さな流木や種子などの植物遺体が認められた。

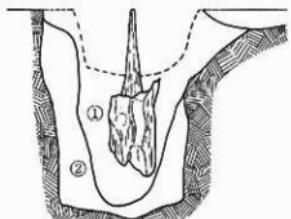


第15図 ピット断面図



第16図 ピット断面図

柱8



①1072/1褐色細粒土にシルト  
10.50m/色シルト(灰青色)  
2.50m/1層オリーブ灰色が混ざる

②801/1褐色オリーブ灰色シルト質粘土  
2.00m/1層オリーブ灰色粘土  
7.00m/1層オリーブ灰色シルト(植物遺体含む)が混ざる

ピット414



①7.50m/褐色シルト～粘土

ピット502



①7.50m/褐色灰土

ピット347



①7.50m/1層褐色灰土

ピット501

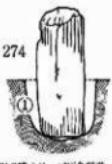


①7.50m/1層褐色灰土



①7.50m/1層褐色灰土

ピット274



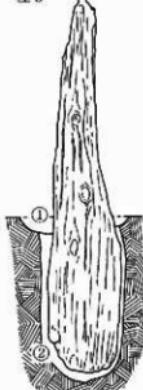
①60m/1層オリーブ灰色泥～シルト

ピット383



①7.50m/1層オリーブ色粘土～中粒砂  
②2.50m/1層褐色粘土

柱5



①0.50m/オリーブ褐色～中粒砂ビラシルト  
②7.50m/1層褐色粘土(植物遺体含む)

ピット296



①7.50m/褐色シルト

ピット338



①7.50m/1層褐色灰土

ピット210



①1072/1褐色砂礫混じり地土  
7.50m/1層褐色灰土



①0.50m/オリーブ褐色～中粒砂ビラシルト  
②7.50m/1層褐色粘土(植物遺体含む)



①7.50m/褐色シルト



①7.50m/1層褐色灰土

第17図 ピット断面図

### 3. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ約100箱の弥生時代中期から近代までの遺物が出土した。遺物の大半は弥生時代中期の土器でコンテナ約80箱を数える。他に弥生時代中期の石器・木製品がコンテナ約20箱、庄内式土器、旧耕土・床土中の奈良～近世以降の須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などが少量見られる。弥生時代中期の遺物については、石器を除き他は整理途中であるため、平成13年度に予定している本報告で詳細を報告することとし、一部について概要を説明する。

#### 中近世の遺物(第18図、図版16)

旧耕土・床土出土瓦器・東播系須恵器・国産磁器・中国産磁器(図1～7)

旧耕土・床土からは、奈良～近代までの遺物が細片でコンテナで約半箱分出土した。その大半は中世の土師器・瓦器である。

瓦器(図1・2)碗の底部がある。いずれも内外面とも摩滅が激しく、暗文は不明である。(図1)は高台径5.4cm、(図2)は高台径4.2cm。(図1)は13世紀前半、(図2)は13世紀後半に属す。

中国産磁器(図3・4)(図3)は同安窯系の小皿である。内外面にオリーブ灰色の釉を施す。外面底部は無釉、見込みに櫛描きによるいわゆる「猫搔文」を施す。底径3.6cm。(図4)は白磁碗である。粗い貫入が内外面に見られる。高台径5.6cm。(図3)は12世紀前半、(図4)は16世紀後半に属す。

東播系須恵器(図5・6)挫鉢がある。(図5)は口縁端部の断面が角ばって終わる。色調は灰色を呈するが、口縁部外面直下に重ね焼の際の黒い帯状の変色が認められる。口径24.0cm。(図6)は口縁端部下端を拡張する。色調は明褐灰色を呈す。口径28.0cm。(図5)は12世紀中葉、(図6)は14世紀後半～15世紀前半に属す。

国産磁器(図7)肥前系磁器の染付碗で、いわゆる「くらわんか手」である。内面に4本、外面に3本の界線を引き、円形の文様を描く。口径11.9cm、器高6.6cm。19世紀前半に属す。

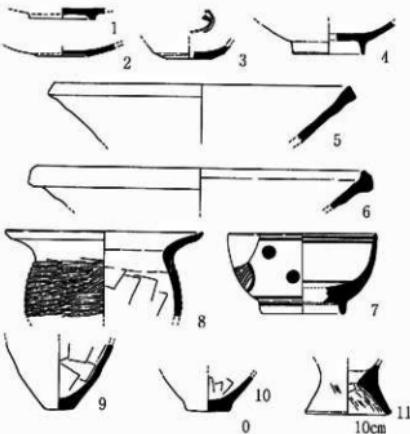
#### 弥生時代後期～庄内期の遺物(第18図、図版16)

##### 川1 出土土器(図8～11)

土器の破片が十数点出土した。摩滅が激しく調整が不明瞭である。図化できるものはすべて図示した。壺の口縁部と底部がある。

(図8)の壺はくの字状に大きく外反する口縁を持ち端部をわずかにつまみ上げる。やや右上がりのタタキ(3条/cm)を施し、内面は板ナゲで仕上げる。色調はにぶい橙色を呈す。口径14.8cm。

(図9～11)はいずれも壺・壺の底部である。色調は橙色を呈す。(図9)は底径2.0cm。(図10)は底径3.6cm、摩耗した外面にわずかにタタキが残る。(図11)は台付壺の底部と思われる。内外面に条数不明のハケメが残る。底径8.6cm。個々の形態から畿内第IV様式～庄内期に属すと考える。



第18図 旧耕土・床土・川1 出土土器実測図

### 弥生時代中期の遺物

弥生土器のうち、生駒西麓産としたものは、胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈するものをさす。これ以外の土器は、本遺跡で作られたものや他地域産のものも含まれると考えられるが、識別が困難であるため产地を記していない。器種分類は、大阪府文化財調査研究センターが刊行した「河内平野の動態Ⅲ」に基本的に従った。文様の説明後方に付した( )内の数字は原体幅を表す。

弥生土器は遺構出土品について説明する。石器・木製品・土製品・骨製品は包含層出土品を含めて触れる。まず上器について説明し、石器等は項を改める。なお、土器については整理作業途中であるため、一部について概要を報告する。今回紹介する土器は個々の形態を見ると畿内第Ⅲ様式後半に属するものもあるが、全体としては第Ⅳ様式前半に属すと思われる。

また、文章の簡便を図るため、弥生時代包含層をA～E層と表記する。第Ⅲ章で説明した基本層序の第10層がA層、第11層がB層、第13層がC層、第12・14・15層がD層、第16層がE層に相当する。

土器だまり1出土弥生土器(第19図、図版17・18・21)

コンテナ約6箱分が出土した。壺・鉢・甕・高杯などがある。

甕は口縁部がくの字状に外反するA 1(図12～14・16～18)と端部をつまみ上げるC(図15)がある。(図13・14・16・18)が生駒西麓産。A 1(図12)は口縁部ヨコナデ、内外面タテハケ、灰黄褐色を呈す。口径13.3cm。(図13)は口縁部ヨコナデ、内外面タテハケ、外面部以下ヘラミガキ。口径15.3cm。(図14)は口縁部内面ヨコハケ、内外面タテハケ、体部外面下半ヘラミガキ。口径14.7cm。(図16)は口縁部ヨコナデ、内面ヨコハケ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、灰黄褐色を呈す。口径15.2cm。(図17)は口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ、内面ヨコハケをナデ消す。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、灰黄褐色を呈す。口径18.2cm。(図18)は口縁部ヨコナデ、頸部内外面以下ヘラミガキ。口径16.3cm。C(図15)は肩部内面ヨコハケ、体部タテハケ、外面ヘラミガキ、にぶい黄橙色を呈す。口径28.3cm。

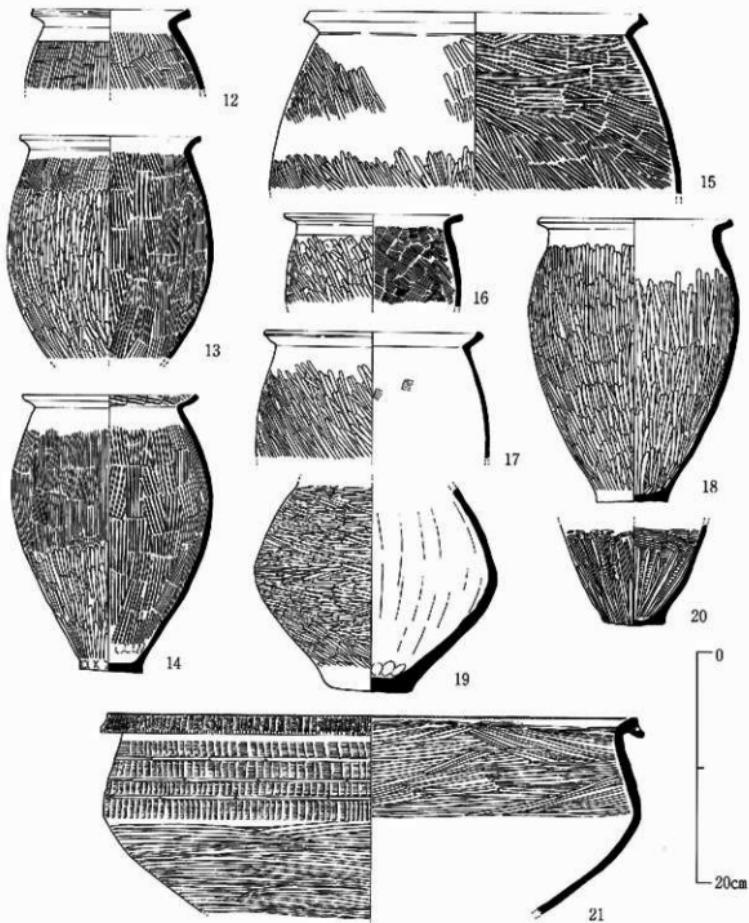
壺底部(図19)は全体に煤が付着し上端が炭化する。器台に転用されたと思われる。生駒西麓産。

鉢は口縁部が直口して端部をまるくおさめるA 1(図20)、口縁が外反し体部近くまで折り曲げるB 1(図21)がある。いずれも生駒西麓産。A 1(図20)は外面ヨコ方向のタタキ(3条/0.8cm)、内面ヨコハケの上に粗いヘラミガキ。把手の痕跡がある。口径12.5cm、器高8.6cm。B 1(図21)は外向口縁端部に原体数不明の簾状文(1cmあたり10条)、刻目、刺突文。体部4帯の簾状文、間をヘラミガキ、体部下半ヨコ方向のヘラミガキ。体部内面上半ヘラミガキ。口径45.4cm。

土器だまり3出土弥生土器(第20・21図、図版17・18・21～23)

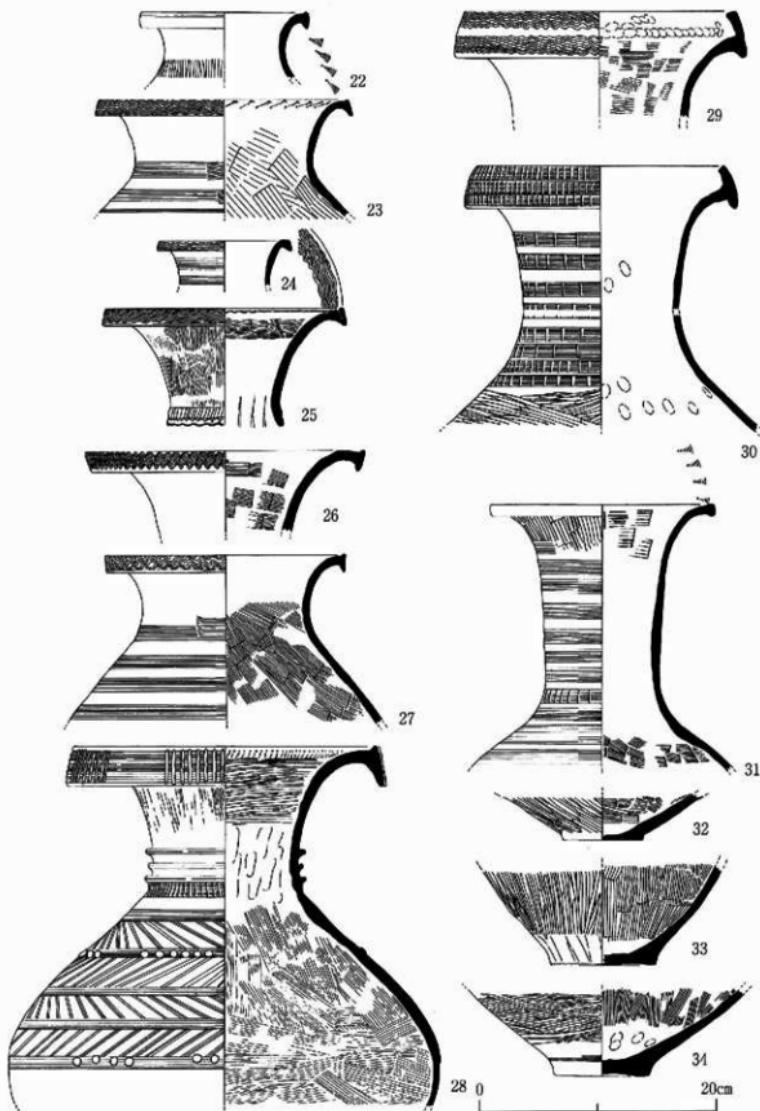
コンテナ約12箱分が出土した。広口壺・短頸壺・鉢・高杯・甕・蓋などがある。

広口壺は、頸が細長く、口縁端部を斜め下方に拡張するA 1(図31)、頸が太く、口縁端部を斜め下方に拡張するA 2(図28)、A 2の小形のB 1(図24)、口縁部が垂下するA 3(図29・30)、肩から頸・口縁にかけてゆるやかに屈曲して広がり、口縁端部を上下方に拡張するC(図22・23・25～27)がある。A 1(図31)は口縁部内面扇形文、頸部7帯・肩部4帯の原体7条の直線文(原体幅1.2cm)、頸部と肩部の境に簾状文(直線文と同一原体)。灰黄色を呈す。口径18.6cm。B 1(図24)は口縁部に原体5条の波状文、頸部に直線文(波状文と同一原体、1.0cm)、口縁部内面に扇形文。灰黄褐色を呈す。口径10.7cm。A 2(図28)は口縁部に凹線6条の上に棒状浮文、内面に原体13条の列点文2带(1.4cm)。頸部外向凸帶3条の下に簾状文、肩部以下に直線文と斜線文を交互に組合せ、円形浮文を貼る。体部外面に黒斑あり。淡黄橙色を呈す。口径25.0cm。A 3(図29)は口縁部に原体7条の波状文2条、頸部内面ヨコハケ。生駒西麓産。口径23.0cm。(図30)は口縁部3帯・頸部8帯の原体9条の簾状文(1.2cm)。肩部以下ヨコ方向のヘラミガキ。黄褐色を呈す。口径20.8cm。C(図22)は外面タテハケ、口縁部に凹

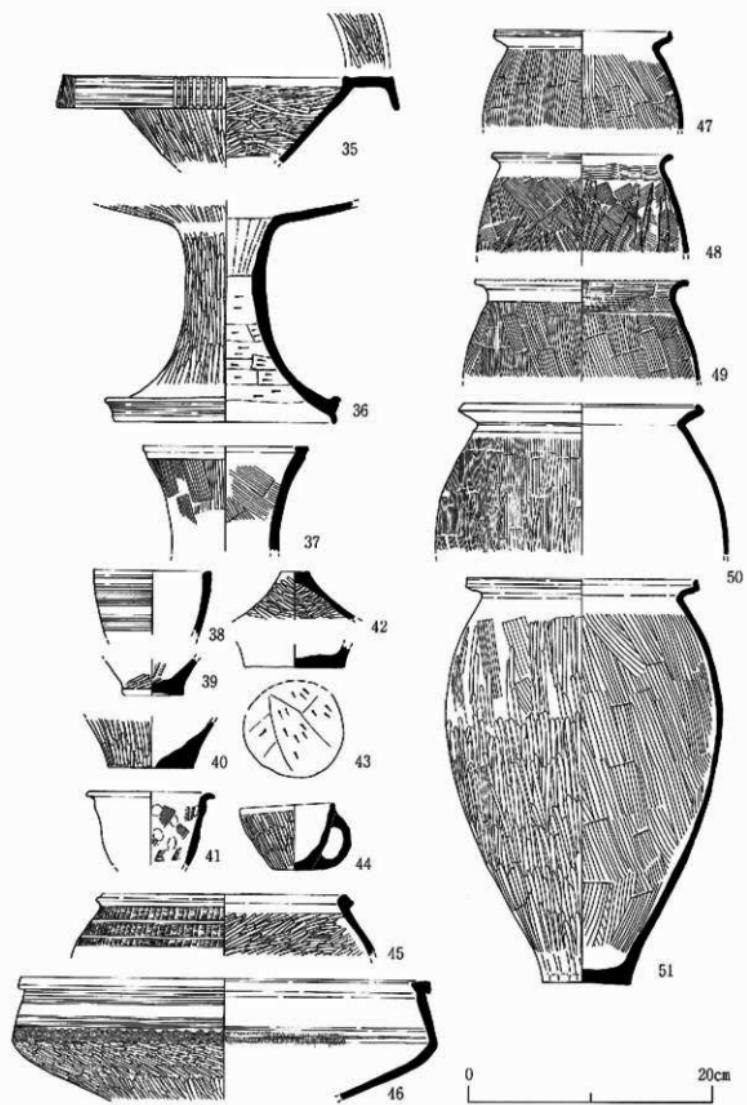


第19図 土器だまり1出土土器(甌・壺・鉢)実測図

線1条。外面に煤付着。灰黄褐色を呈す。口径13.7cm。(図23)は口縁部に原体11条の波状文、頸部以下に直線文(波状文と同一原体、1.3cm)、口縁部内面扇形文、浅黄色を呈す。口径20.8cm。(図25)は口縁部内面および口縁部に原体10条の波状文、頸部に凸帯。凸帯以下に波状文が残る。灰白色を呈す。内外面とも煤ける。口径19.5cm。(図26)は口縁部に原体12条の波状文、口縁部内面扇形文(波状文と同一原体)。灰黄褐色を呈す。口径23.4cm。(図27)は口縁部に原体7条の波状文、頸部以下に原体9条の直線文(1.5cm)。黄褐色を呈す。口径20.2cm。底部(図32~34)はいずれも外面ヘラミガキ。(図



第20図 土器だまり3出土弥生土器(壺)実測図



第21図 土器だまり3 出土弥生土器(甕・壺・鉢)実測図

32)は生駒西麓産。

高杯は水平にのびる口縁をもつB1(図35)がある。杯部内面ヨコ方向、外面タテ方向のヘラミガキ、口縁部に凹線5条の上に捺状浮文。浅黄色を呈す。内外面に黒斑あり。口径26.9cm。脚部(図36)は外面ヘラケズリの上を密にヘラミガキ。橙色を呈す。外面に黒斑あり。底径18.0cm。

細頸壺は細長い筒状の口縁部が内傾するB(図37・38)がある。(図37)は内外面をタテハケ、口縁部ヨコナデ、凹線1条。灰黄色を呈す。口径13.3cm。(図38)は口縁部ヨコナデ、頸部に原体8条の直線文(1.2cm)。灰黄色を呈す。口径9.4cm。

鉢はA1(図44)、口縁部を下方に折り曲げ段状を呈すB2(図45・46)がある。A1(図44)は外面ヘラミガキ。灰白色を呈す。口径7.5cm、器高5.5cm。B2(図45)は口縁部外面ヘラミガキ、体部に原体10条の簾状文(1.2cm)、間にヘラミガキ。淡黄色を呈す。口径19.2cm。(図46)は体部に原体9条の直線文、波状文(1.2cm)、下半ヘラミガキ。黄橙色を呈す。口径33.0cm。

壺(図42)は内外面ともに密なヘラミガキを施す。生駒西麓産。

壺はA1(図48・49)、C(図47・50・51)がある。(図48~50)が生駒西麓産。A1(図48)は口縁部ヨコハケ、体部内外面タテハケの上粗くヘラミガキ。外面全体に煤付着、口径14.2cm。(図49)は口縁部ヨコハケ、上端に刻目文。内外面タテハケ。外面全体に煤付着、口径17.2cm。C(図47)は内外面タテハケ。黄褐色を呈す。口径14.2cm。(図50)は外面タテハケ後粗いヘラミガキ、内面ナデ。口径19.0cm。(図51)は内外面タテハケ、体部外面以下密なヘラミガキ。外面に黒斑あり。赤褐色を呈す。口径18.7cm。底部(図39・40・43)。(図39)は生駒西麓産。(図40)は焼成後の穿孔あり。(図43)は底面ヘラケズリ。

(図41)は小形の壺と思われる。口縁部が短く水平に外反する。口径10.0cm。生駒西麓産。

川2出十弥生土器(第22図、図版24・25)

コンテナ約3箱分が出土した。広口壺・短頸壺・鉢・高杯・壺・蓋などがある。

広口壺はA2(図52・53・55・56)、C(図54)、口縁部が受口状のE(図57・58)がある。(図52・53)が生駒西麓産。A2(図52)は口縁部に原体8条の簾状文(1.3cm)、刻目文、頸部直線文(簾状文と同一原体)。外面に黒色物質塗布。口径19.2cm。(図53)は口縁部に原体12条以上の簾状文、頸部直線文。口縁部内面のやや下がった位置に円形浮文。口径23.2cm。(図55)は口縁部に条数不明の波状文、口縁部内面に原体18条の扇形文(1.8cm)。口縁部外面に黒斑あり。浅黄橙色を呈す。口径21.2cm。(図56)は口縁部凹線4条、円形浮文。口縁部内面に原体11条の列点文(1.5cm)、頸部ヨコ方向の密なヘラミガキ。外面に黒色物質塗布。にぶい灰黄橙色を呈す。口径24.6cm。C(図54)は口縁部内面に原体9条の扇形文(1.3cm)、口縁部外面に波状文(扇形文と同一原体か)。橙色を呈す。口径12.8cm。E(図57)は口縁部外面に凹線3条、円形浮文、間に原体数不明の波状文(1cmあたり9条)、頸部直線文、波状文(同一原体か)。にぶい橙色を呈す。口径17.0cm。(図58)は口縁部外面に原体10条の扇形文(1.6cm)、波状文、頸部直線文(扇形文と同一原体)、直線文の間ヘラミガキ。頸部内面粗いハケメが残る。にぶい橙色を呈す。外面煤ける。口径20.8cm。底部(図77)は外面ヘラミガキ、内面タテハケ。底径6.8cm。生駒西麓産。

細頸壺はB(図80)がある。簾状文、ヘラミガキを施す。

無頸壺は段状口縁のB2(図76)がある。摩滅が激しい。外面ヘラミガキ、内面板ナデ。橙色を呈す。体部外面に黒斑あり。口径11.6cm。

鉢はA2(図69)、B1(図78)、B2(図79)がある。(図69)は口縁部凹線5条、内外面タテハケ残る。黄灰色を呈す。口径37.2cm。(図78)は生駒西麓産。

壺はA1(図60・61)、口縁部を下方に拡張するB(図71)、C(図62・72)、口縁端部を上下に拡張す

るD(図59)がある。(図60・64・66・67・71)が生駒西麓産。A 1は外面ヘラミガキ、内面タテハケ。(図60)は口径12.8cm。(図61)は口縁部内面ヨコハケ。褐色を呈す。口径15.2cm。B(図71)は外面ヘラミガキ、内面ヨコハケ後粗いヘラミガキ。口径25.6cm。C(図62)は内外面ともタテハケ。(図62)は口縁部ヨコハケ、頸部に刻目あり。にぶい橙色を呈す。口径14.5cm。(図72)は口縁部外面上下端部に刻目。浅黄橙色を呈す。口径23.4cm。D(図59)は外面ともタテハケ。淡黄色を呈す。体部外面に黒斑あり。口径37.0cm。底部(図64~68・73)は外面ヘラミガキで内面を板ナデ(図64・68)、ナデ(図65・66・71)、ヘラミガキ(図67)するものがある。

蓋は笠形のA(図75)、口縁部に紐穴を有するB(図74)、大井部が平らで内面に煤が付着するC(図63)がある。(図75)は外面タテハケ後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。橙色を呈す。口径13.6cm。(図74)は口縁部内面にリング状に煤が付着。明褐灰色を呈す。口径14.3cm。(図63)は外面ヘラミガキ。体部外面にも煤が多量に付着。にぶい黄橙色を呈す。

高杯の脚(図70)は内外面ヘラミガキ。杯部内面煤ける。灰白色を呈す。底径15.6cm。

その他の遺構出土弥生土器(第23図、図版19・20・25)

土坑21(図81~86)

コンテナ半箱分が出土した。壺・鉢・甕・壺底部がある。(図81・82・84~86)が生駒西麓産。

壺A 3(図81)は口縁部簾状文2帯(1.3cm)、間をヘラミガキ。口径19.6cm。鉢A 2(図82)は口縁部外面に原体6条の簾状文(1.3cm)、体部ヨコ方向のヘラミガキ。体部外面に黒斑あり。口径16.0cm。甕A 1(図83・84) (図83)は外面タテハケ、内面ナデ。口縁端部外面刻日。褐灰色を呈す。口径16.5cm。(図84)は外面ヘラミガキ、内面タテハケ。口径15.1cm。

溝32(図87~93)

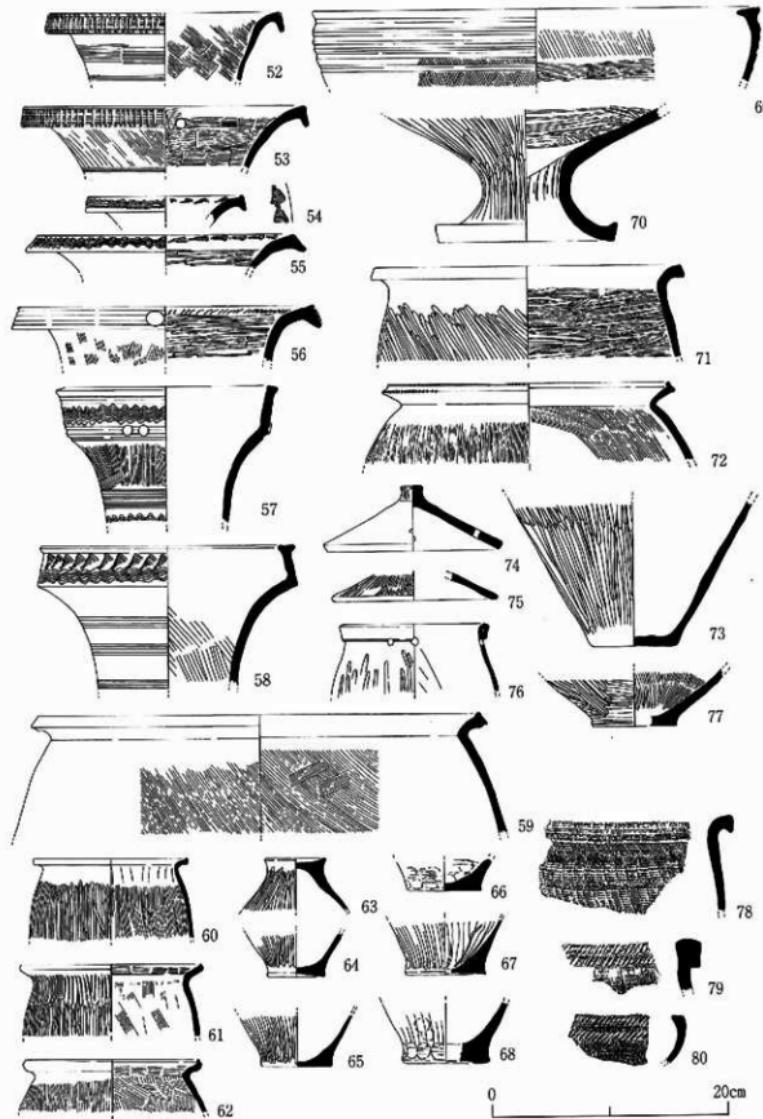
コンテナ半箱分が出土した。鉢・甕・蓋・高杯がある。

鉢A 2(図87・88) (図87)は外面ヘラミガキ、内面ナデ。灰オリーブ色を呈す。内外面に黒斑あり。口径6.1cm、器高4.6cm。(図88)は外面ヘラミガキ、内面ヨコハケ。灰褐色を呈す。体部外面に黒斑あり。口径15.4cm。甕D(図89)は口縁部外面に刻日、タテハケ後ヘラミガキ。口縁部内面ヨコハケ、体部ナデ。口径21.7cm。B(図90)は外面ヘラミガキ、内面ナデ。灰黄褐色を呈す。口径11.3cm、器高16.6cm。蓋C(図91)は内外面ハケ。口縁部内面にリング状に煤付着。浅黄色を呈す。口径14.0cm。蓋D(図92)は脚を転用したもの。内外面密なヘラミガキ。口縁部内面にリング状に煤付着。浅黄褐色を呈す。口径14.4cm。高杯B 1(図93)は内外面密なヘラミガキ、中空。杯部煤ける。蓋に転用。口径31.8(19.6)cm。生駒西麓産。

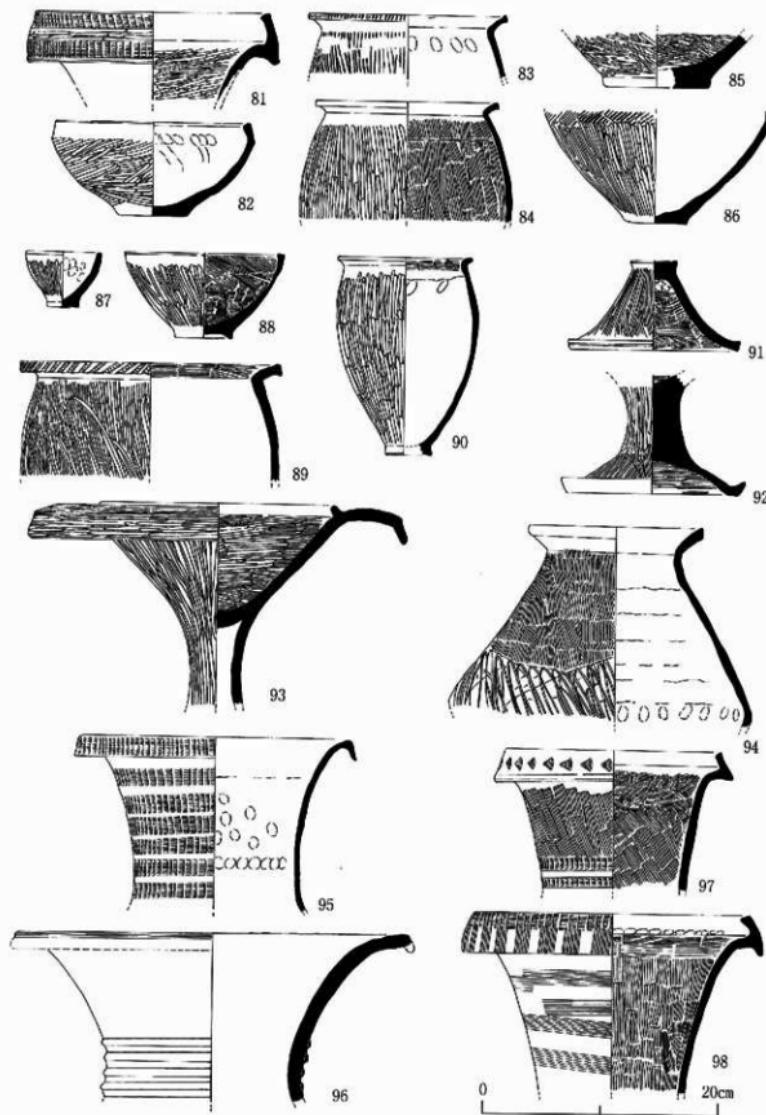
溝38(図94~98)

コンテナ半箱分が出土した。壺がある。いずれも頸部を打欠いており、器台に転用したと思われる。内外面とも煤ける。(図96)以外は生駒西麓産。

A 2(図95)は口縁部および頸部に原体13条の簾状文(1.5cm)。口径22.6cm。(図96)は口縁部内面に原体10条の列点文(1.5cm)、頸部に凸帯。口縁端部外面凹線1条。灰黄色を呈す。口径32.8cm。A 3(図97)は口縁部扇形文、頸部に原体9条の簾状文(1.2cm)。口径18.0cm。(図98)は口縁部に原体13条の簾状文およびタテ方向の直線文(1.6cm)、頸部に原体10条の直線文(1.4cm)。口径23.0cm。(図94)は特異な形態の壺である。外面上半タテハケ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ。口径14.2cm。



第22図 川2出土弥生土器(堀・壺・鉢)実測図



第23図 土坑21・溝32・溝38(甕・壺・鉢)出土器実測図

## 石器

今回の調査において、弥生時代中期末の遺構および包含層から出土した石器・剥片の類は総点数約400点を数える。本道跡の從来の調査例からみると調査面積に比して出土量が多い。出土した石器には、磨製・打製石器と剥片等がある。

磨製石器は、男根状石製品1点、女性器形石製品1点、石庖丁14点、大型石庖丁2点、大型石庖丁原材1点、太型蛤刃石斧1点、砥石9点、叩石3点、石錐3点、磨製石劍1点、紡錘車3点等である。この中には性器形石製品や大型石庖丁とその半加工品、原材など興味深いものも含まれている。石材の鑑定は一部を除き実施しておらず、一応の目安として記した。また磨製石器のうち荒砥石と考えられる砥石などまだ整理途中のものがあり、これらについては石材の正式鑑定結果も含め本報告にまとめて紹介する予定である。

打製石器については一応の整理が終了した。出土した打製石器の種類は、石錐19点、石錐7点、打製石劍3点と削器とみられる不定型石器等がある。石材は全てサスカイトで低湿地に埋没していたため風化がほとんど見られない。サスカイトの産地同定作業をまだ実施していないが、おそらく二上山産と思われる。また剥片が多く、石錐などの未製品とみられるものも出土している。

石錐・石錐の形態分類に関しては下記の表を作成しこれによったが、この表は大阪府文化財調査研究センター刊行の『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』で示された表を元に一部改編し、作成した『植附遺跡第5次発掘調査報告書』(1999 東大阪市文化財協会)発行の「表1 石錐・石錐形態分類表」を、さらに今回一部追加したものである。

以下、出土した石器について磨製・打製の順に概要を報告する。個々の詳細については石器観察表(p 57~59)を作成したので参照されたい。また、石錐・石錐の各部名称に関しては『弥生時代の石器』(平井勝 著 ニューサイエンス社)を参照した。

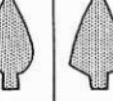
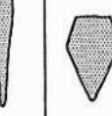
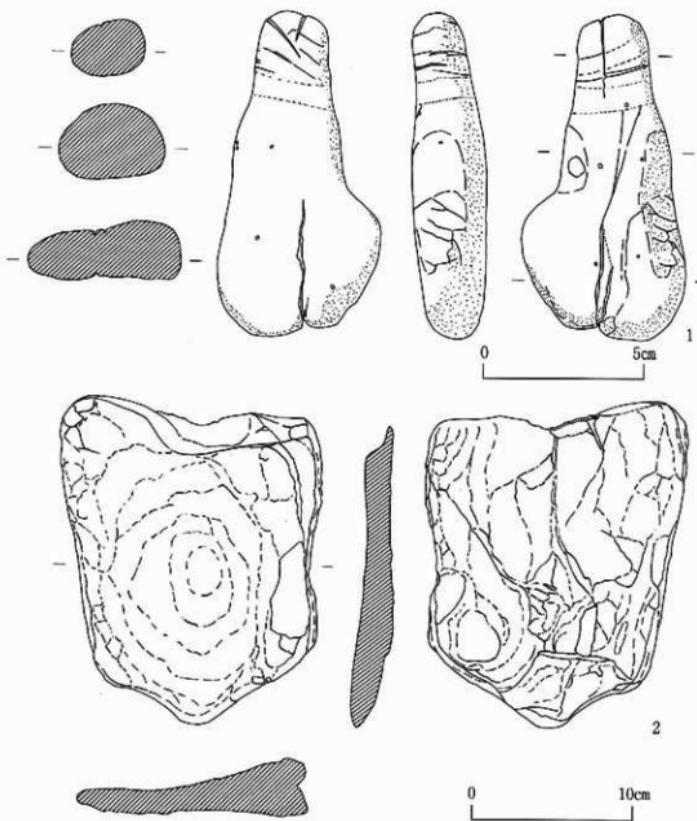
1類	2類	3類	4類			5類	
			a	b	c	a	b
							
1類	2類	3類	4類	5類	6類		
							

表1 石錐・石錐形態分類表(植附遺跡第5次発掘調査報告書より、一部加筆)



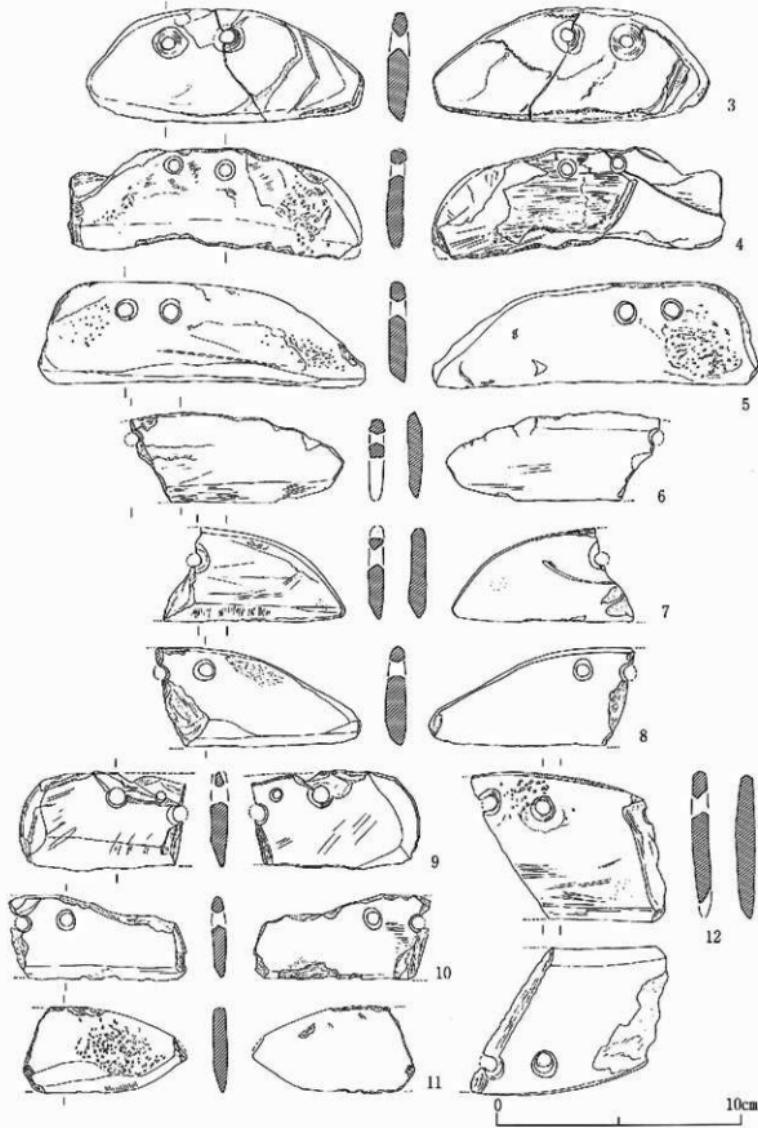
第24図 磨製石器(性器形石製品)実測図

#### 磨製石器(第25~28・33図)

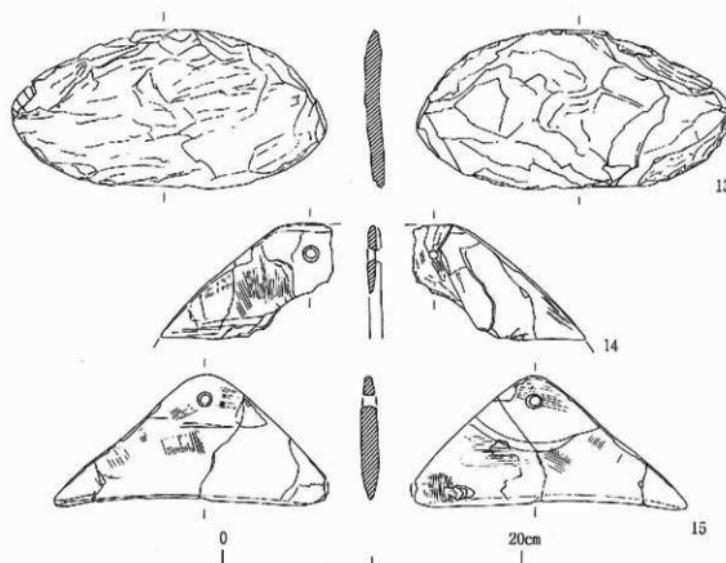
磨製石器は、性器形石製品・石庖丁・大型石庖丁・大型石庖丁原材・叩石・大型蛤刃石斧・砥石・石錘・石剣・紡錘車がある。

#### 性器形石製品(第24図、図版28)

男根状石製品(図1)は石材は和泉層群中の砂岩で、近辺では石川で採取できる。形状の似た石に回転を利用した研磨を施し先端から茎部分をつくりだし、尿道孔を縦方向に、亀頭を横方向に線刻して表現する。長辺10.3cm、最大幅5.3cm、厚さ2.3cm、重量113.1gを測る。女性器形石製品(図2)は石材は片麻状黒雲母花崗岩で、近辺では生駒山麓で採取できる。ほぼ長方形を呈し、下辺の中央部が突出し上辺、表面中央部は凹む。加工の痕跡は不明瞭であるが、下辺の突出、上辺、表面中央部の凹みは



第25図 磨製石器(磨製石器石窓 J)実測図



第26図 扉製石器(大型石庖丁)実測図

意識的に加工されたと考える。石皿状を呈するが、もろい石材のため石皿としての機能は果たせない。砥石の可能性はある。長辺19.2cm、短辺16.5cm、最大厚4.0cm、重量1225g。いずれもA-1出土。

#### 石庖丁(第25図、図版29・30)

石庖丁は破片を含めて14点出土した。石材は(図6)が粘板岩である他は緑泥片岩である。(図3)は二次的な被熱のため、全体が変色している。(図4・8)は刃潰れ、背潰れがみられ、研ぎ直しを繰り返して使用されている。(図9)は3孔を穿つ。(図12)は幅5.9cmを測り、やや大ぶりである。

#### 大型石庖丁(第26図、図版26・27)

大型石庖丁は原材・半加工品・完形品がそれぞれ1点出土した。完形品(図15)は刃部の一端部分が被熱し変色する。刃部の面積は小さい。背部の表面に帯状の黒い変色が認められる。半加工品(図14)は刃部を欠く。原材(図13)と完形品(図15)では、長さや厚さはほぼ変化しないが、重量は395.2gから181.8gとなり、約半分となっている。

#### 叩石(第27・28図、図版32)

叩石(図16・20・21)はいずれも砂岩で先端部に敲打痕が認められる。

#### 大型蛤刃石斧(第27図、図版33)

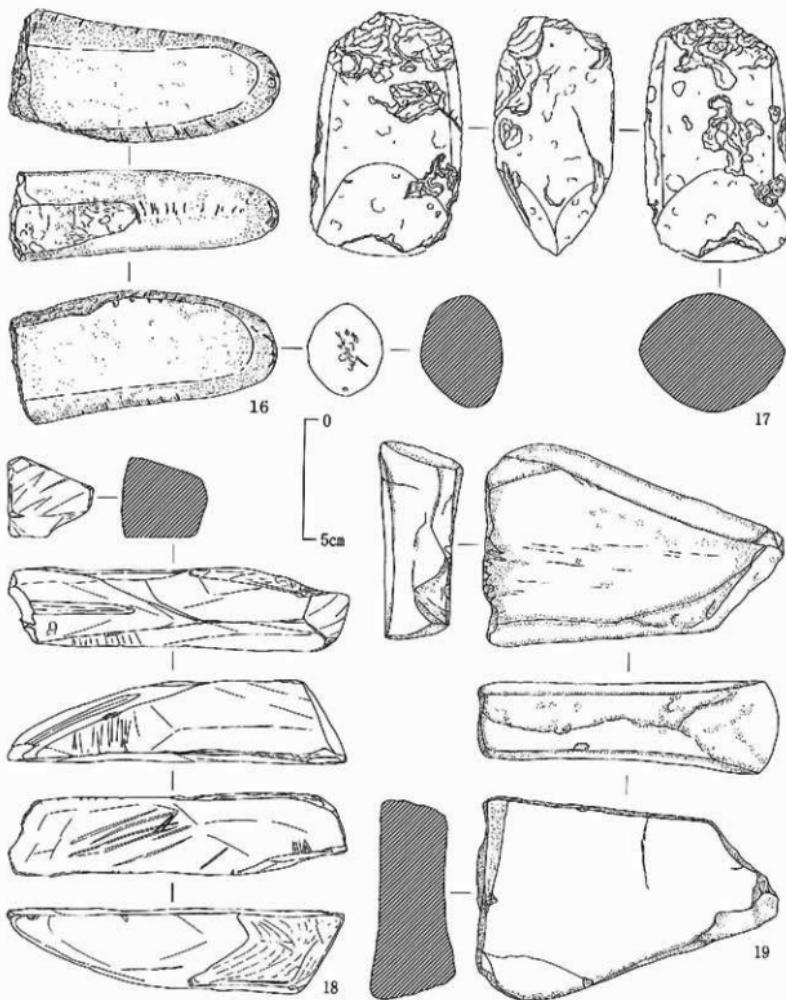
大型蛤刃石斧(図17)は風化もしくは被熱のために表面が荒れている。花崗岩製。

#### 砥石(第27図、図版31)

砥石(図18・19)はいずれも目が細かく、仕上げ砥石と考えられる。

#### 石錘(第28図、図版32)

石錘(図22・23)はいずれも紐痕が認められる。(図22)は砂岩、(図23)は石英製。



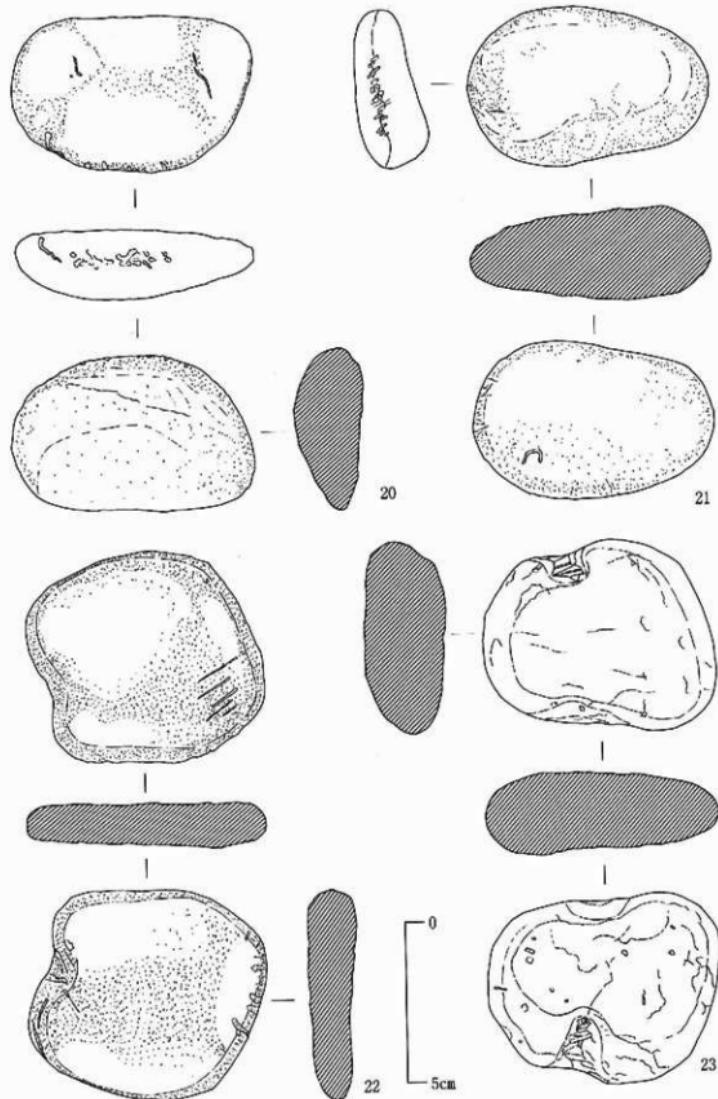
第27図 磨製石器(叩石・大型蛤刃石斧・砥石)実測図

石劍(第33図、図版29)

(図58)は小破片で両端を欠く。研磨の方向は一定せず、しのぎは不明瞭。

紡錘車(第33図、図版29)

いずれも緑泥片岩製であり、石泡丁の転用品と考えられる。(図59)は両面に敲打痕あり。



第28図 磨製石器(叩石・石錐)実測図

### 打製石器(第29~32図、図版34~38)

#### 石鎚(第29・30図、図版34・35)

打製石器の中で最も多い19点(図24~42)が出土した。

4類-cと分類した弥生中期に典型的な柳葉形石鎚が最も数が多く、9点を数えた(図26・29~33・35~37・39)。最小のものは長辺3.85cm(図26)、最大のものは6.6cm(図32)である。重量については、最も軽いものが2.46g(図26)、最も重いものが12.87g(図37)、平均値は6.36g。厚さは、大きさにかかわらず0.7cm前後と一定している。しかし、いずれも先端もしくは基端に欠損のあるものがほとんどである。(図26)は厚みの薄い方が基部とした。欠損部を先端と考え、また基部の薄い方が石鎚を矢柄に装着する際有利であると考えたためである。(図30・32)も同様のことが考えられる。(図29)は表面、欠損面とも表面が白く変色しているが、風化した原材を加工したためと考えられる。(図30)主剥離面が基部に大きく残っている。先端部は欠損している。先端部より基部が薄い。(図32)先端部の欠損はその形状から、同方向からの衝撃によるものである。同じく先端部に比べ基部と考える部分の方が薄い。(図39)先端欠損。剥離調整が荒いことから未製品とも考えられる。

石鎚の中で次いで点数の多いのが5類-bの3点である(図24・25・28)。最小のもので長辺3cm(図25)、最大は長辺4.6cm(図28)。重量の最も軽いものが1.94g(図25)、重いものが3.18g(図28)。平均値は2.5g。厚さは大きさにかかわらず0.4cm前後である。(図24)は先端・基端共に欠損しており、他の石鎚にくらべ稜線が摩滅して不明瞭である。使用によるものか別の原因かは定かでない。(図25)については主剥離面が大きく残っている。平面形が菱形を呈する4類-bのようにもみられるが、基端部の剥離の向きから5類-bと分類した。(図28)は完形品である。側刃には鋸歯加工がみられる。

5類-aに分類した(図27)は先端部が欠損している。幅は2.25cm、厚さは0.55cm、重さ3.98g。1点出土。

4類-bと分類した(図34)は左右への張り出しが故意に作りだされている。長辺は3.75cm、厚さ0.95cm、重さ4.1g。1点出土。

石鎚未製品と考えられるものが3点(図38・40・41)見られる。いずれも調整が荒く厚みがあり、先端加工が施されていないことなどから未製品と判断した。

(図42)は形態からみて石鎚とするには先行剥離面に大きく原面が残っており、未製品と考え一応ここに含めた。

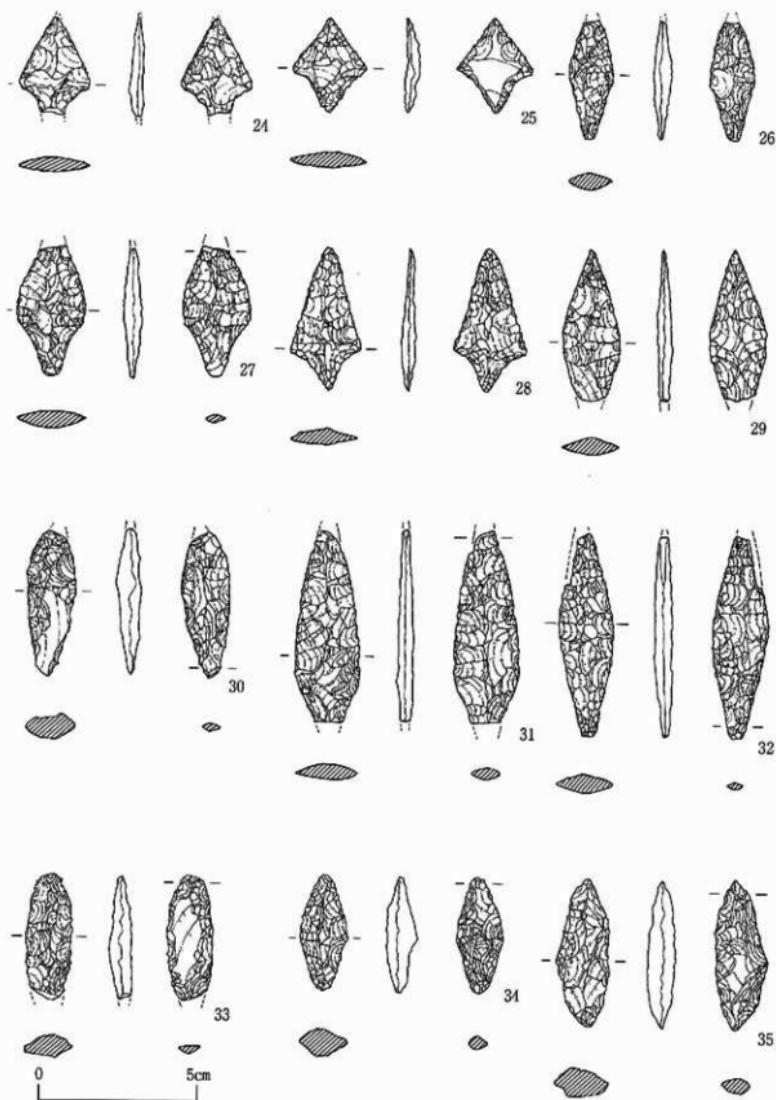
未製品を除く石鎚の重量平均は4.2g、厚さの平均値は0.67cmである。長辺は3~6cmのものが大半である。欠損品が多いことから平均値は算出していない。

#### 石錐(第30・31図、図版35・36)

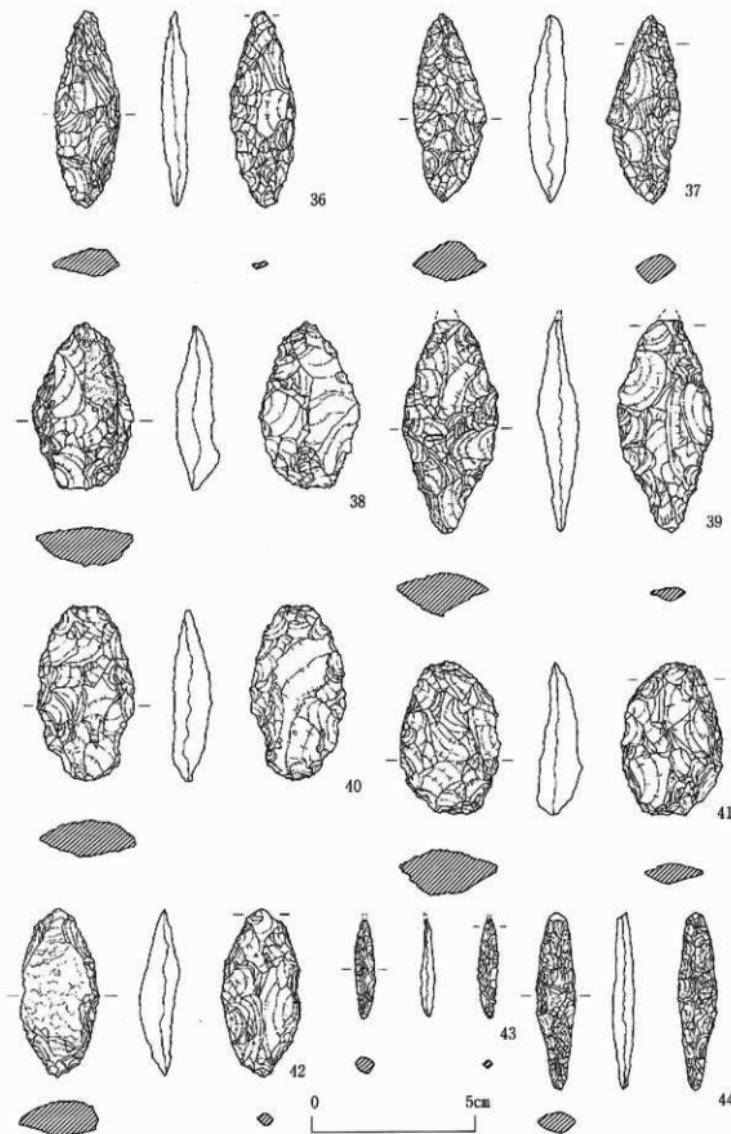
7点(図43~49)が出土した。

1類に分類した頭部と錐部の境が明確で錐部が細長いものは3点(図46・47・49)出土した。(図46)は錐部に欠損があり、回転痕はみられない。(図47)には錐部先端から2mmの範囲に回転痕と思われる磨耗がみられる。全体が白く風化しており、頭部には原面が残っている。(図49)は錐部先端が欠損しているものの、欠損部から5mmの範囲が僅かであるが使用により磨耗している。

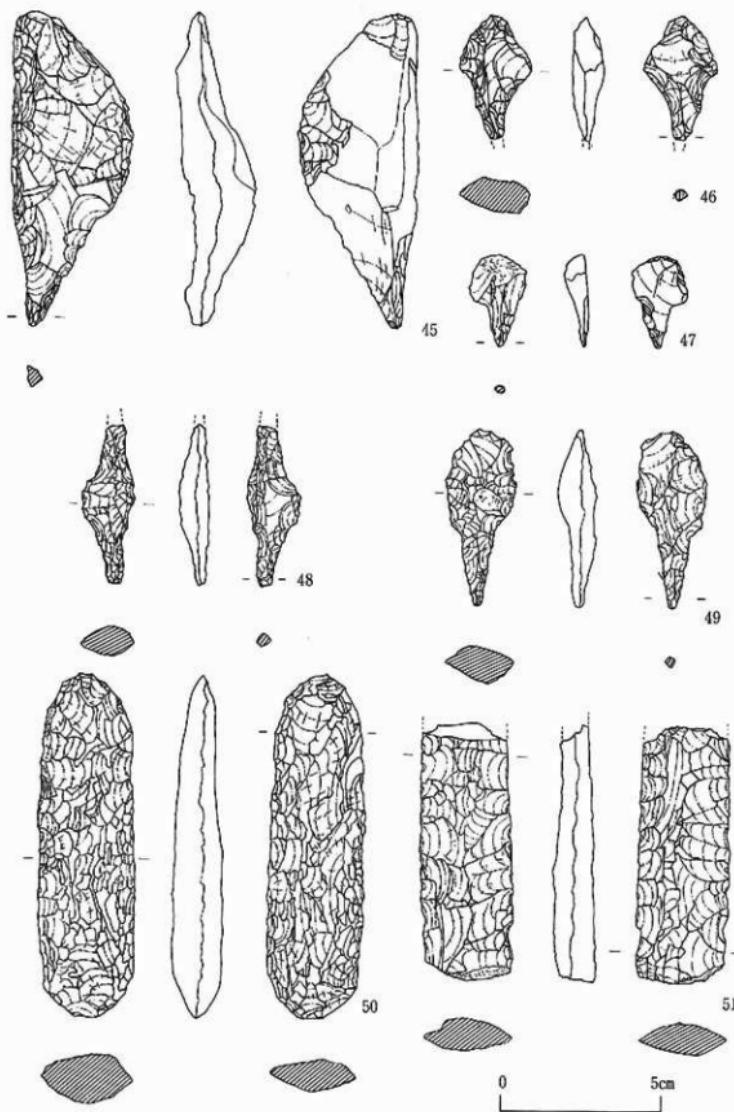
6類-bとした頭部と錐部の境がなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状のものは2点(図43・44)出土した。なお、上下は判断できないため任意に図示した。(図43)は今回出土した中で最小の石器である。その大きさから石錐とも考えられる。上錐部欠損、下錐部先端から3mmほどが使用により僅かに磨耗。(図44)は下錐部先端から2mmが磨耗、回転痕と思われる。その他上錐部の欠損した部分、側刃全体にも磨耗がみられる。



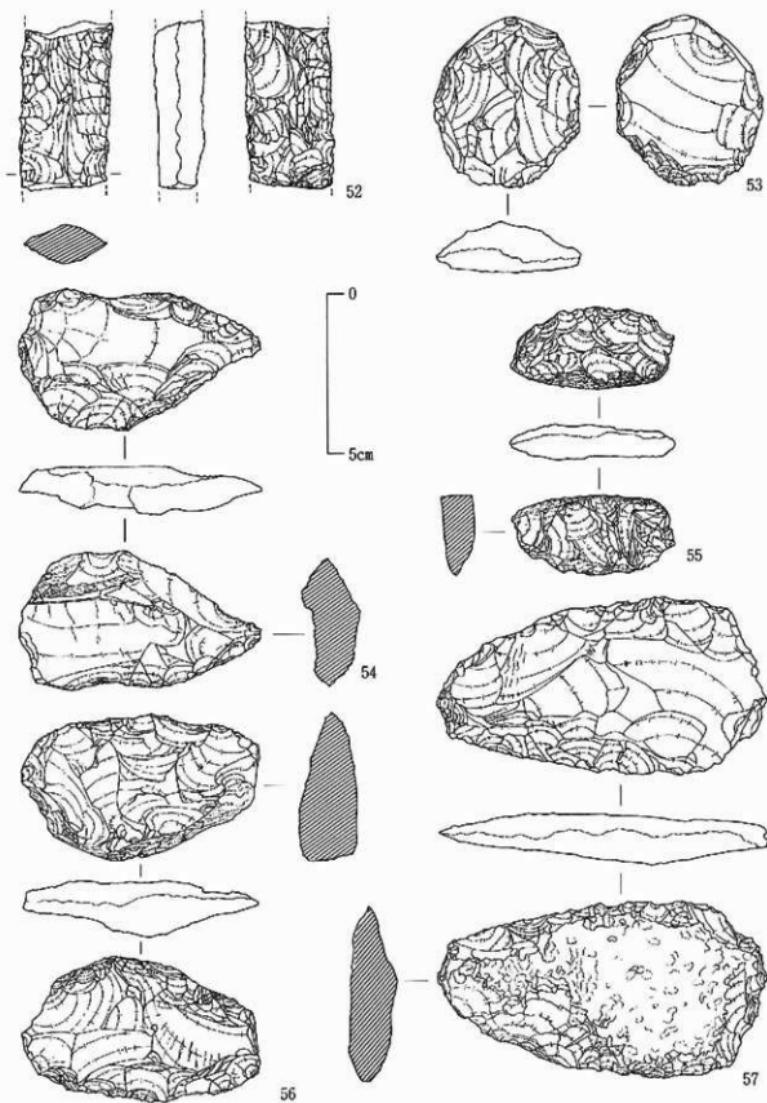
第29図 打製石器(石鎧)実測図



第30図 打製石器(石鎌・石錐等)実測図



第31図 打製石器(石鎚・石剣等)実測図



第32図 打製石器(石剣・削器等)実測図

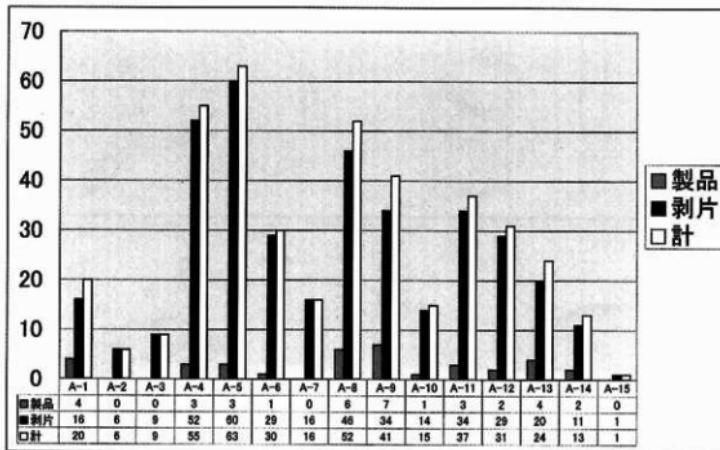


表2 サヌカイト点数地区別集計表

5類と分類したものは1点(図45)出土した。錐部先端から5mmの範囲に使用による磨耗がみられる。大型石錐と考えられるが側辺の調整も細かく、背済しのような痕が白く残っていることから、削器の可能性もある。先行剥離面に原面が大きく残る。

6類-aは両端が細く錐部加工されたもので、中間部のふくらみを頭部とする。1点出土した(図48)。上錐部先端を欠損しており下錐部に磨耗はみられない。

錐部の断面は磨耗のため判別しがたいものもあるが、(図45)が三角形を呈している以外は概ね菱形である。長辺・重量ともに最大のものは(図45)で9.7cm・62.82gである。最小のものは(図43)の3cm・0.82g。全体の平均値は長辺5.04cm・重量13gである。

#### 石剣(第31・32図、図版36)

完形品1点(図50)、欠損品2点(図51・52)の3点が出土した。厚みはいずれも1.5cmとほぼ均一である。

(図50)は長辺10.75cm。栗田薰氏の教示によれば、先端部は円い刃を最初から意図して加工されており石剣の未製品ではなく石斧と考えるべきとのことである。(図51)は基端部下表面が原面のまま残されている。両側辺には磨耗があり、先端部の折れは欠損の形状より同方向からの衝撃によるものと判断できる。残存長辺8.1cm。(図52)は両端を欠損している。表面は白く風化。図上で基部とした部分の方が一方より厚みが少ない。栗田氏によればこの部分の折れは衝撃によるものではなく、急激な温度変化によるもの(ポット・リッド)と推測されている。残存長辺5.3cm。

#### 削器(第32図、図版37・38)

12点出土した内、特徴的なもの4点(図53~57)を図示した。(図53)は円形削器と分類した。主剥離面が大きく残っている。(図54)は形態から大型の錐の可能性もある。先行剥離面に原面が残る。(図55)背部に原面が残っている。(図56)は表面全体に有機物のようなものが付着している。(図55・56)この2点以外にも図示していないものの、背部に原面を持ち平行した側辺に細部調整(刃部)を作りだしているものが2点、計4点が出土している。(図57)は先行剥離面に原面が広く残る。大型の石錐未

製品との見方もあるが、厚みが少ないと可能性は低いと思われる。

他に一部に細部調整を施した剥片が37点出土している。最も大きいもので長辺10.3cm、最も小さいもので2.05cm。最も重いもので89.01g、最も軽いもので0.95g。その平均値は長辺5.92cm、重量30.83gである。

調整の見られない、もしくは調整の荒い剥片・石核・チップは382点出土した。最大のもので長辺10.35cm、最小のもので1.15cm。最も重いもので62.01g、最も軽いもので0.08g。

なお、地点別のサヌカイト出土点数をグラフ化してみた。表2を参照されたい。この結果、A-4～6(マウンド2)、A-8・9(マウンド3)、A-11～13(マウンド4)にピークが求められた。遺構集中地域と一致する。それぞれにサヌカイト剥片が相当数みられることから、打製石器を作成していた可能性が高い。製作された石器は、剥片の大きさからみて石鏃など小型の石器は確実である。しかし、打製石剣などを製作するための大型剥片はみられず、これが製作されたかは不明である。

#### 土製品(第33図、図版44)

土製品はミニチュア土器、紡錘車、円板などがある。

#### ミニチュア土器(図70・71)

いずれも外面にタタキが残る。無頸壺(図70)はタタキにより、底部は7角形を呈す。淡黄橙色を呈す。体部下半から底部にかけて黒斑が認められる。口径2.1cm、器高2.8cm。溝40出土。鉢(図71)は口縁部を丸くおさめる。褐灰色を呈す。口径2.9cm、器高4.5cm。A-3D層出土。

#### 紡錘車(図62～64)

いずれも壺の体部片を転用する。(図62)は内外面ヘラミガキ、生駒西麓産。直徑4.2cm。A-6D層出土。(図63)は外面ハケメ、褐灰色を呈す。外面に煤付着。A-11E層出土。(図64)は内外面ハケメ、黄橙色を呈す。土器だまり3出土。

#### 円板(図65・66)

いずれも壺の体部片を転用する。打欠いてからの調整が粗く、角が残る。(図65)は内外面ハケメ、外面に煤付着。灰白色を呈す。直徑約3cm。A-3D層出土。(図66)は内面に煤付着。黄褐色を呈す。直徑約3cm。A-13D層出土。

#### 不明土製品(図72)

円柱状を呈す。2破片が接合。一方は割れてから被熱する。ナデ調整で中実。直徑6.3cm、器高4.1cm。生駒西麓産。土器だまり3出土。

#### 骨製品(第33図、図版44)

骨製品は刺突具、骨角器がある。

#### 刺突具(図67・68)

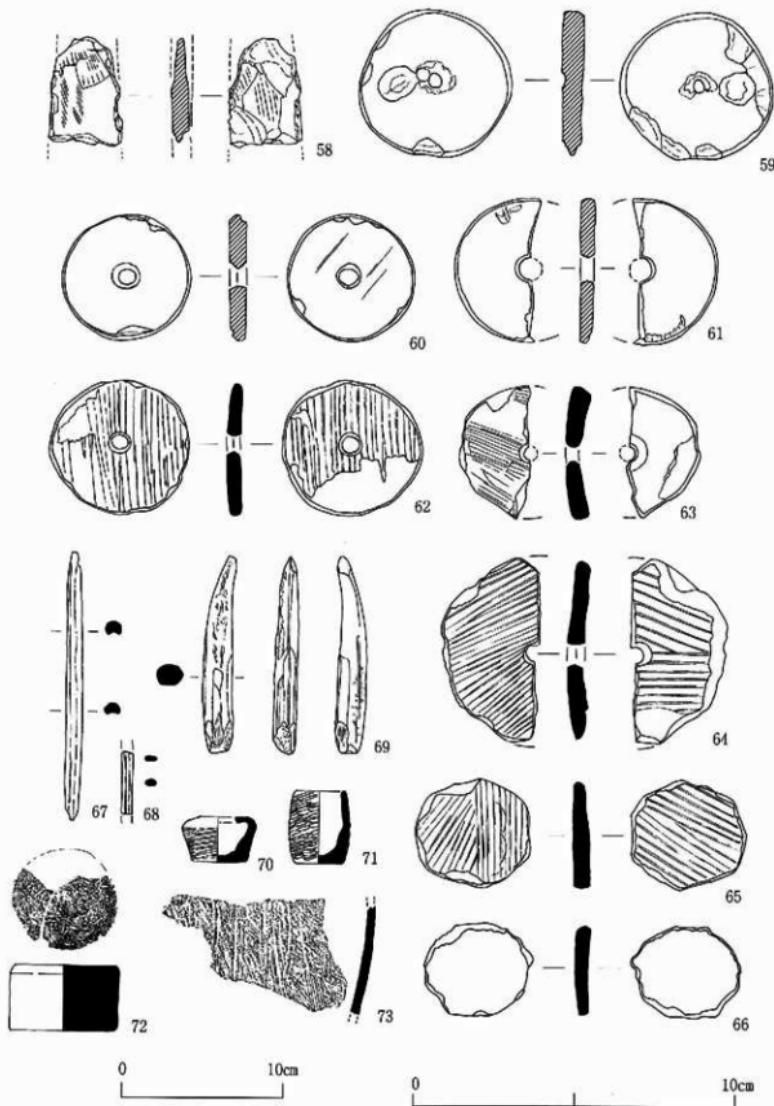
いずれも鹿の中足骨を使用する。(図67)は一方の先端を欠く。残存長16.8cm、幅1.0cm。溝13出土。(図68)は両端を欠損する。残存長3.9cm、幅0.7cm。A-13D層出土。

#### 骨角器(図69)

鹿角の先端と根元を削り、全体を磨いている。表面に膠質が残る。長さ12.4cm。A-8D層出土。何らかの未製品と思われる。

#### 繩文土器(第33図、図版44)

深鉢の体部(図73)が1点出土した。外面を条痕調整し、内面をナデ調整する。内面に炭化物が付着する。器表は摩滅していない。生駒西麓産。A-15第23層出土。



第33図 磨製石器(石劍・紡錘車)・土製品・骨製品・網文土器実測図

## 木製品

今回の調査では、弥生時代中期末の遺構および包含層から多くの木製遺物(以下、木製品と略す)が出土した。これらの中で製品と考えられるものは、農耕具・生活用具・柱材・用途不明木製品などがある。それぞれ代表的なもの25点を選別し器種ごとに概要を報告する。個々の遺物の詳細については観察表を作成したので、参照されたい。これらの他にも柱材を中心に木製品が出土しているがそれらについては、本報告で紹介する予定である。また挿図中の横断面のスクリーントーンは模式的に年輪を表し、木取り法を示している。

### 農耕具(第34~36図、図版39~42)

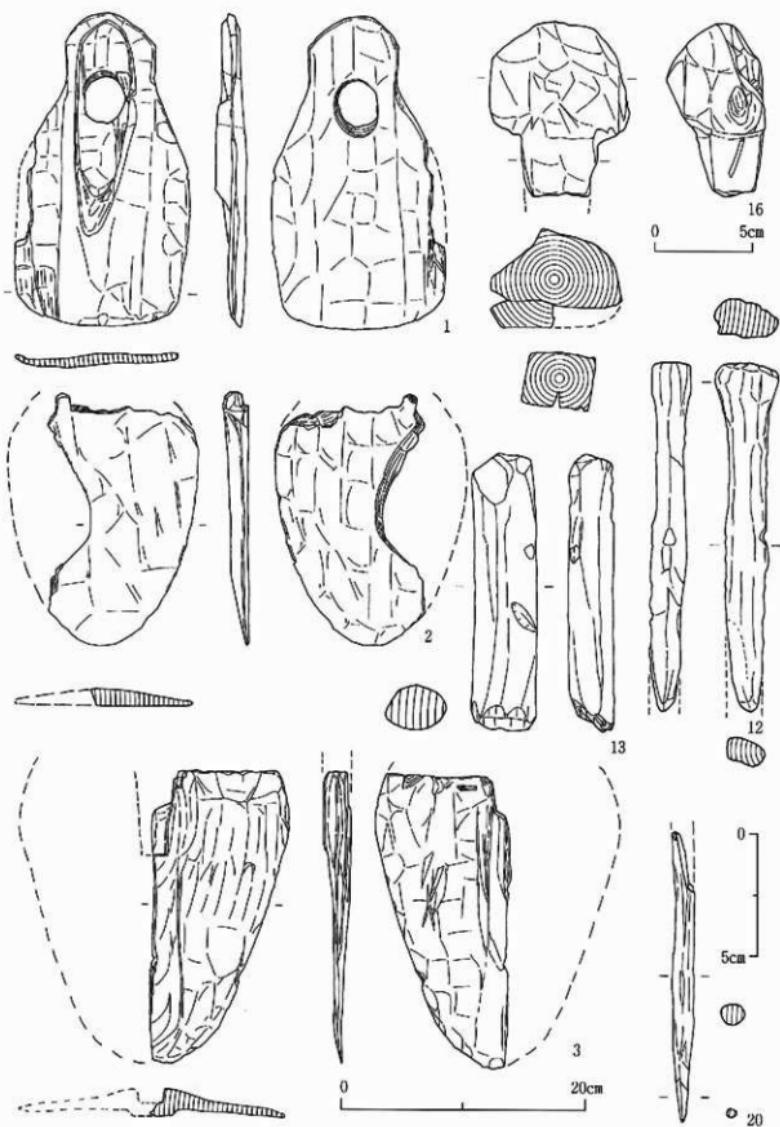
包含層や遺構から平鋤・狹鋤・丸鋤・組合せ狭鋤・鋤身・鋤柄・木庖丁がある。出土したすべてを図示した。

鋤は5点出土している。平鋤は(図1)の1点である。平面形が撥型を呈するもので中央に船形突起を作り出す。着柄孔はやや梢円形を呈す。刃縁はほぼ直線状である。全長25.7cm、刃部幅1.4cm。材質はアカガシ亜属である。丸鋤は(図4)の1点である。平面形が隅丸方形を呈すると思われるが、刃部と側面の一部に2次焼成を受けて欠損しているため詳細は不明である。着柄孔は梢円形を呈する。着柄孔の周辺は削りによってわずかな隆起をつくりだす。残存長13.6cm、残存幅27.6cm、最大厚3.4cm。材質はアカガシ亜属である。狹鋤は2点出土した。(図5)は柄部の一部と着柄部が残存した。柄が着柄したまま出土した。今回の調査で出土した鋤の中で唯一着柄状況のわかる狹鋤である。刃部は欠損しており、全体は不明である。身部の残存長14.0cm、最大幅9.0cm、最大厚2.0cm。柄部は残存長8.8cm、径2.3cm。材質は刃部がアカガシ亜属、柄部がハイノキである。(図6)は組合せ狭鋤である。身は装着部分と刃部からなる。装着部の先端に紐かかりとなる段を削りだし、刃部の境の側面の2箇所に刻みをつける。全長47.2cm、柄部幅4.7cm、刃部幅4.7cm、最大厚1.5cm。材質はアカガシ亜属である。鋤の未製品は1点出土した。(図10)は鋤の未製品の状態で出土した。平面形が隅丸方形を呈す。中央部に船形突起と思われる隆起を作り出している。下部を削って段となしている。器厚6.4cmと厚く、全体に荒く削っただけで未製品のまま放置されたと思われる。全長25.8cm、幅12.4cm。材質はコナラである。

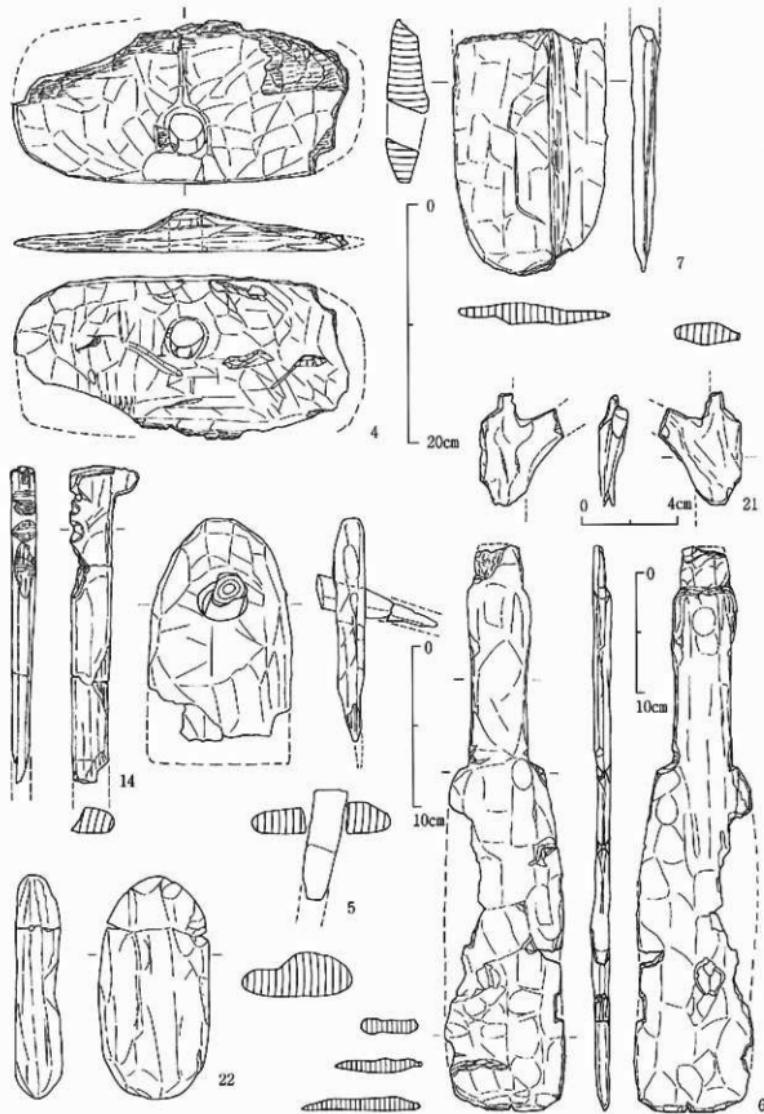
鋤は未製品も含めて3点出土した。3点すべて着柄部を含めた上部構造は欠損により不明である。(図2)は平面形がやや丸みを帯びた逆三角形を呈する。隆起はほとんどみられず、刃部は円刃と思われる。残存長19.6cm、最大幅11.4cm、最大厚1.4cm。材質はアカガシ亜属である。(図3)はソケット状の受け部をもつ鋤身である。平面形が逆三角形を呈すると思われるがほぼ半分が欠損しているため不明である。受け部の周辺はやや隆起するように削りだす。残存長24.0cm、残存幅11.1cm、最大厚2.3cm。刃部は円刃と思われる。材質はアカガシ亜属である。(図7)は鋤の未製品状態で出土した。刃部は円刃で、身部に隆起はみられない。材質はアカガシ亜属である。

鋤柄が1点出土した。(図11)は柄の一部と把手部が残存する。把手部は柄に対して直角に削りだしており、平面形がT字形を呈する。残存長79.1cm、径3.1cm。材質はアカガシ亜属である。

その他、農耕具の把手と思われる木製品が4点出土した。(図12)は一端を3方向から削りだして、やや丸みを帯びた握り状の把手を持つ。もう一端は2次焼成を受けて欠損している。材質はアカガシ亜属である。(図14)は頭部にL字状の突起を持ち、下部になるほど細くなる。側面に2方向から削った刻みを持つ。柄部断面は梢円形を呈する。残存長26.7cm、長径3.3cm、短径2.0cm。材質はアカガシ亜属である。(図15)は断面が多角形になるように表面を削り、下部にいくほどやや細くなる。一端は多方向から斜に削って尖らせる。もう一端は欠損。材質はコウヤマキである。(図16)は3方向から削



第34図 木製品(平鋸・鋸・有頭棒等)実測図



第35 木製品(丸鋸・鋤未製品・朱塗木製品等)実測図

ってやや角張った半球状の頭部と細い柄部をもつ。頭部は球状であったと思われるが欠損により不明。柄部断面は方形を呈する。下部は欠損により不明である。残存長10.6cm、頭部幅8.6cm、柄部幅4.6cm、最大厚5.8cm。材質はタブノキである。心持材を使用。

木庖丁は1点出土した。(図8)は平面形が平行四辺形を呈する。木目にそって割りとられている。刃部は1方向から削りだした片刃である。両側面から円孔を1箇所穿って紐孔としている。紐孔の周辺は紐の使用による磨耗がみられる。刃部と側面の一部が激しく摩滅している。全長13.5cm、幅5.6cm、厚さ0.9cm。材質はヤマグワである。

#### 容器状製品(第37図、図版43)

容器は土坑などの遺構から2点出土した。

(図17)は平面が隅丸方形を呈すると思われる槽である。厚さ5.0cmの板材を削り浅い容器としている。破損が激しいため全形は不明である。残存長33.7cm、残存幅12.4cm、器厚1.5cm。材質はコウヤマキである。A-7土坑40より出土。(図18)は把手付き槽である。平面形が長方形の板材の中央部分を長方形に削りぬいて容器とした。一辺の中央部に長方形の把手を1箇所付けたものである。長辺の一辺が欠損している。全長57.6cm、幅19.1cm。器厚は9.0cmと厚く、底面は平坦である。材質はクマノミズキ類である。A-11井戸状遺構より(図13・23)とともに出土した。

#### 刺突具(第37図、図版41)

刺突具(図20)は1点のみ出土した。先端を鋭利に尖らす。もう一端は欠損。残存長12.0cm、最大径1.0cm。材質はモミである。A-9溝33より出土。

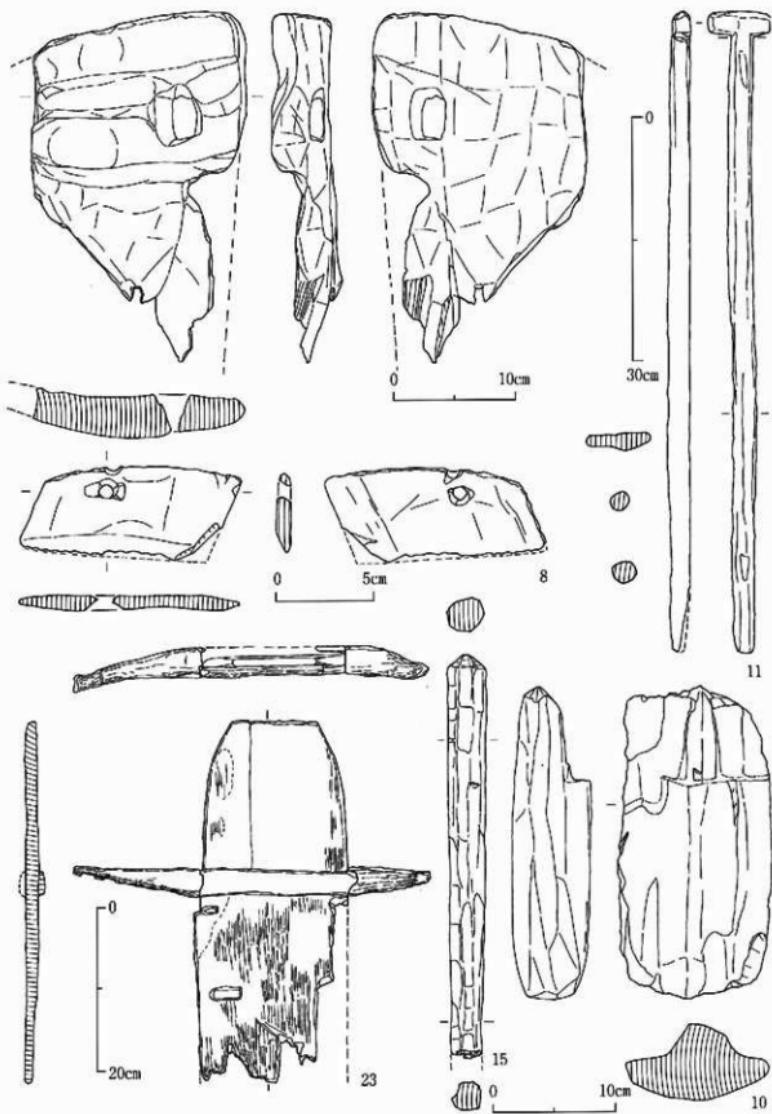
#### 柱材(第37図、図版43)

柱材は多く出土しているが、整理作業が終了していないため、今回は(図25)の礎板を組合せるよう加工された柱材1点を紹介する。柱材は下部を2方向から削って抉りを入れて礎板と組まれた状態で検出した。上部は欠損。樹皮は残っていないかった。礎板は心持材を半裁したものである。柱材は残存長42.3cm、径9.8cm、礎板は残存長21.3cm、幅7.9cm、厚4.2cm。材質は柱材がサカキ、礎板がスダジイである。A-5ピット154の柱根である。

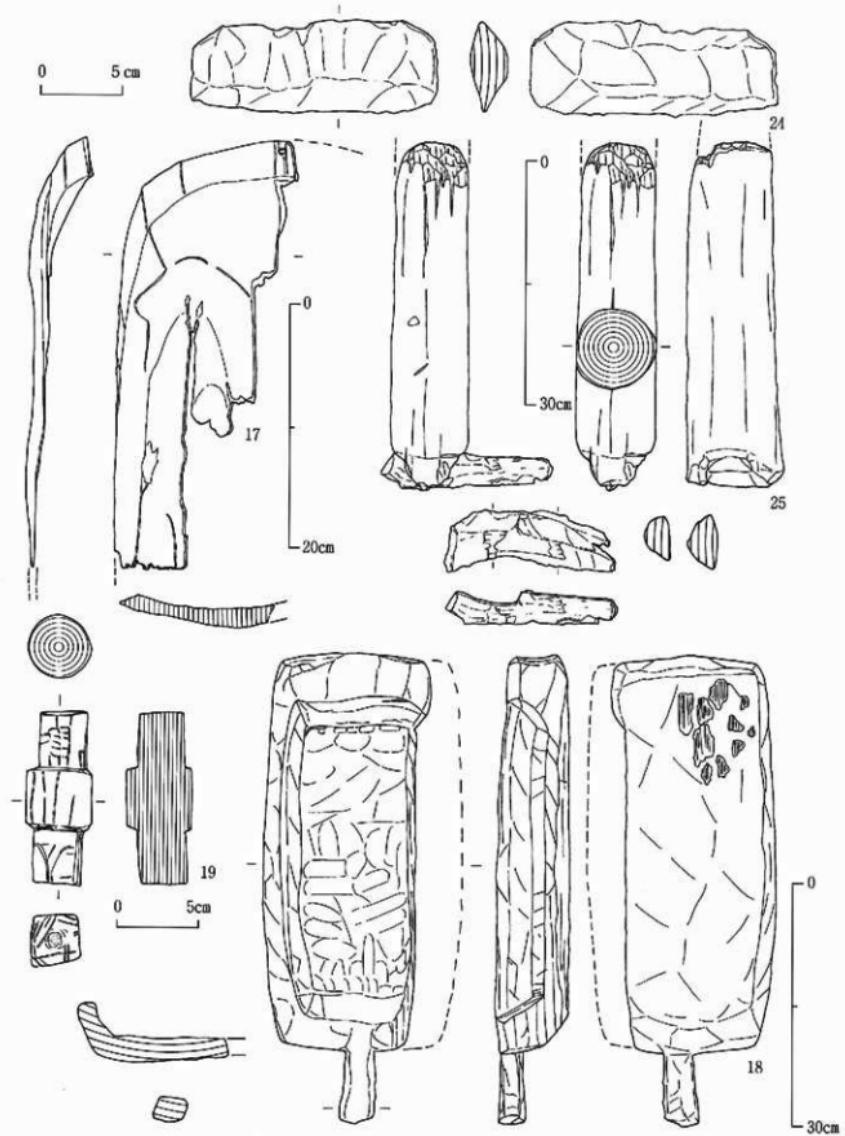
#### 用途不明木製品(第36図、図版42)

遺構や包含層により用途不明木製品が多く出土した。(図9)は全体形状は不明だが、上部から中央部にかけて下駄の歯状の長方形の隆起をもつ。中央部に長方形の1孔を両面から穿つ。残存長28.8cm、残存幅17.4cm、最大厚4.9cm。材質はクスノキである。A-5ピット453より出土。(図19)は心持ちの棒材であるが、何らかの製品を接合する部品である可能性もある。心持材に使用する。両端は断面が方形になるように4方向から削りだす。全体的に丁寧な作りである。全長10.7cm、径3.9cm。材質はカヤである。A-10溝38より出土。(図21)は小片ながら両面に朱が塗られており、何らかの特別な製品の一部と思われる。残存長4.7cm、最大幅3.5cm、最大厚0.9cm。材質はハイノキである。A-14C層より出土。(図23)は板材と中央部を削りぬいた棒材を組合せたものである。板材はその厚さに合わせてあけられた棒材の孔に通した状態で出土した。棒材の固定のために板材の側面にホゾをきっている。板材の中央部に長方形の2孔が穿たれている。板材、棒材ともに2次焼成をうけて炭化しており、板材の一部が欠損している。残存長44.6cm、幅44.1cm、最大厚3.8cm。非常に丁寧な作りである。材質は板材がアカガシ亜属、棒材がヒノキである。A-11井戸状遺構より出土した。

今回の調査では製品だけではなく、農耕具の未製品が出土したことから少なくともかつて言われた瓜生堂遺跡は木製品を消費するだけの集落でなく、その製作を行なっていたと考えられる。



第36図 木製品(木包丁・鎌柄・鉢木製品等)実測図



第37図 木製品(槽・柱材等)実測図

## 石器・木製品觀察表

磨 製 石 器 觀 察 表

拂岡番号	分類	石質	重さ(g)	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	備考	出土地点	出土地	出土層
1	男模状石製品	和泉層群中砂岩	133.1	10.35	5.25	2.3	圓軸研磨・縫割痕あり。石川で採取された川原石と思われる。	(マ1)	A-1	B
2	女性器型石製品	片麻岩状黒雲母花崗岩	1,225	19.2	16.5	4.05	風化の為加工痕は不明瞭。砥石の可能性あり。石材は生駒山麓で採取可能。	(マ1)	A-1	B
3	磨製石庖丁	綠泥片岩	59.77	11.3	4.7	0.95	外弯半月形態。縫縫ははっきりしない片刃。縫穴2カ所。 ほほ完形。火を受けた跡あり。	土器だまり3 (マ5-3)	A-12	D
5	磨製石庖丁	綠泥片岩	64.93	13.35	4.1	0.7	内弯刃半月形態。片刃。背潰れ。縫穴2カ所。4/5残存。		A-12	D
6	磨製石庖丁	黑色粘板岩	29.47	8.4	3.7	0.7	直線刃半月形態。片刃。縫穴1カ所。1/2残存。		A-1	B
7	磨製石庖丁	綠泥片岩	27.06	7.4	3.9	0.7	直線刃半月形態。片刃。縫穴1カ所。1/2残存。	(マ3)	A-9	D
8	磨製石庖丁	綠泥片岩	40.43	7.95	4.25	7.5	直線刃半月形態。片刃。縫穴2カ所。1/2残存。	南壁断面	A-12	D
9	磨製石庖丁	綠泥片岩	30.72	6.5	4	0.6	長方形態。片刃。縫穴3カ所。1/2残存。	(マ5-2)	A-13	C
10	磨製石庖丁	綠泥片岩	24.8	7	3.5	0.65	長方形態。片刃。背潰れ。縫穴2カ所。2/3残存。	(マ3-1)	A-8	D
11	磨製石庖丁	綠泥片岩	20.03	6.75	3.5	0.5	杏仁形態。片刃。背潰れ。1/2残存。	残土精査時		
12	磨製石庖丁	綠泥片岩	54.72	6.7	5.9	0.8	両刃。背潰れ。縫穴2カ所。刃部先端のみ残存。		A-13	C
13	大型磨製石庖丁	綠泥片岩	395.2	20.8	10.6	1.15	未製品。		A-12	D
14	大型磨製石庖丁	綠泥片岩	66.44	11.5	7.5	0.75	刃部欠損。1/3残存。	(マ2-7)	A-6	D
15	大型磨製石庖丁	綠泥片岩	181.9	18.1	9.3	1.15	両刃。縫穴1カ所。 ほほ完形。刃部一端に火を受けた跡あり。	土器だまり3 (マ5-1)	A-12	D
16	叩石	砂岩	270.11	10.6	4.9	3.35	下頂部に叩き痕。側面には擦り痕が全体にみられる。燃受けた部分が欠損部近くにみられる。		A-12	E
17	大型敲打石斧	花崗閃緑岩	438	9.75	5.9	4.85	風化、もしくは熱により表面が荒れる。	ピット270	A-9	B
18	砧石	砂岩		13.8	3.4	3.5	擦り痕有り。目の細かい仕上げ砥石と思われる。		A-1	D
19	砧石	砂岩	462	12.3	8.3	4	擦り痕有り。目の細かい仕上げ砥石と思われる。	(マ2-7)	A-6	D
20	叩石	砂岩	102.92	7.6	5	1.25	叩き痕(擦り痕?)あり。川原石。	南壁断面	A-11	B
21	叩石	砂岩	132.91	7.55	4.95	2.9	下頂部に叩き痕(擦り痕?)あり。川原石。		A-4	D
22	石錐	砂岩	95.25	6.85	6.75	1.45	両表面とも繊擦れの痕あり。	(マ5-1)	A-13	C
23	石錐	石英	157.83	7.35	5.75	2.55	繊板あり。		A-15	
58	磨製石剣	結晶片岩	5.25	3.4	2.2	0.6	しのぎは不明瞭。	(マ2-4)	A-4	C
59	紡錘車	綠泥片岩	27.25	4.7	4.65	0.7	両面に各2カ所敵打痕。木製品と思われる。	(マ3下)	A-8	D
60	紡錘車	綠泥片岩	16.95	4.05	3.8	0.6	完形品。	南北アゼ (マ2)	A-5	
61	紡錘車	綠泥片岩	8.61	4.5	2.5	0.5	1/2残存。	(マ3-7)	A-6	D

## 打 製 石 器 觀 察 表

博物番号	分類	石質	重量(cm)	長辺(cm)	短辺(cm)	厚み(cm)	備考	原面	類	出土地	出土地点	出土層
24	石鏃	サヌカイト	2.37	3.15	2.3	0.4	先端と基端に折れあり。後線がはっきりしないのは使用のためか。		5類b	A-1	ピット20	
25	石鏃	サヌカイト	1.94	3	2.4	0.4	主翼端面が大きく残る。		5類b	A-8	(マ3)	D
26	石鏃	サヌカイト	2.46	3.85	1.5	0.55	先端と基端に時期の違う折れあり。		4類c	A-11	(マ4-1)	D
27	石鏃	サヌカイト	3.98	4.25	2.25	0.55	先端欠損。		5類a	A-10		D
28	石鏃	サヌカイト	3.18	4.6	2.3	0.45	凸基有茎式。側刃に鋸歯加工あり。		5類b	A-12	(マ5-1)	D
29	石鏃	サヌカイト	3.71	4.85	1.9	0.5	全体が白く風化。基部に折れあり、折れ面は風化の度合いが同じ。		4類c	A-12	南壁断面	D
30	石鏃	サヌカイト	5.15	4.7	1.7	0.75	基端部に原面が残る。先端に折れあり。	○	4類c	A-13	(マ5-1)	D
31	石鏃	サヌカイト	6.54	6.25	2.1	0.5	柳葉形石鏃。先端と基端に折れあり。		4類c	A-8		D
32	石鏃	サヌカイト	5.89	6.6	1.8	0.6	先端と基端に折れあり。剥突によるものか。		4類c	A-4	(マ2)	D
33	石鏃	サヌカイト	4.27	3.9	1.55	1.15	主翼端面が大きく残る。		4類c	A-1	先行トレンチ	
34	石鏃	サヌカイト	4.1	3.75	1.5	0.95	左右の削り出しが故意に作りだされている。		4類b	A-14		C
35	石鏃	サヌカイト	7.04	4.75	1.7	0.9	形が整っていないため未製品とも考えられる。		4類c	A-14	先行トレンチ	
36	石鏃	サヌカイト	9.39	6.1	2.15	0.8	欠損のない石鏃の中では最大のもの。		4類c	A-6	(マ2-2)	D
37	石鏃	サヌカイト	12.87	5.9	2.3	1.15	基端部表面の一部に原面が残る。	○	4類c	A-9	先行トレンチ	
38	細部調整薄片	サヌカイト	16.93	5.1	3.15	1.2	調整が荒いため、石鏃未製品と思われる。先端に原面が見られる、こちらが基部の可能性有り。	○		A-5	(マ2-2)	D
39	石鏃	サヌカイト	17.83	6.6	2.95	1.3	先端に折れあり。基端部に原面残る。	○	4類b	A-5	南北アゼ⑦	
40	石鏃	サヌカイト	18.28	5.4	2.9	1.15	調整が荒いため、石鏃未製品と思われる。			A-1		B
41	細部調整薄片	サヌカイト	20.04	4.75	3.15	1.4	調整が荒いため、石鏃未製品と思われる。			A-5	先行トレンチ	

持国番号	分類	石質	重さ(cm)	長辺(cm)	短辺(cm)	厚み(cm)	備考	原面	類	出土地	出土地点	出土層
42	縦部調整削片	サヌカイト	13.46	5.2	2.5	1.15	先行剥離面に原面が大きく残る。石器の未製品にしては高いと思われる。	○		A-5	(マ2-2)	D
43	石鏨	サヌカイト	0.82	3	0.7	0.45	上端部欠損。下端部から3mm摩耗。		6類b	A-11		D
44	石鏨	サヌカイト	5.43	5	1.75	0.9	側邊が全体に白く磨耗。上部に欠損、その部分に摩耗あり。下端部先端から3mm回転痕あり。		6類b	A-4	ビット106	
45	大型石鏨(?)	サヌカイト	62.82	9.7	3.55	1.9	縦部側刃先端から5mmの範囲磨耗。先行剥離面に大きく原面が残る。	○	5類b	A-5	(マ2下)	D
46	石鏨	サヌカイト	6.63	3.8	2.25	1	縦部に折れあり。		1類b	A-13		D
47	石鏨	サヌカイト	2.51	2.84	1.9	0.7	全体が白く風化。回転痕の摩滅が縦部先端から2mmにみられる。頭部に原面残る。	○	1類b	A-13		A
48	石鏨	サヌカイト	4.3	5.5	1.25	0.65	両端部を縦部加工。上部先端に欠損。回転痕はみられない。		6類a	A-11		D
49	石鏨	サヌカイト	8.67	5.5	2.25	1.05	縦部欠損。先端から5mmの範囲磨耗。		1類	A-4	(マ2-4)	B
50	打鍛石劍	サヌカイト	66.34	10.75	3.1	1.7	石劍の未製品ではなく、石斧をイメージしたものと思われる。			A-8		D
51	打鍛石劍	サヌカイト	34.52	8.1	2.9	1.3	先端部の折れは上からの衝撃によるものか。両側刃摩耗。基盤部下表面が原面のまま。	○		A-8	(マ3下)	D
52	打鍛石劍	サヌカイト	29.56	5.3	2.65	1.5	両端部欠損のため一部のみ。表面は白っぽく風化。			A-1		B
53	円形削器	サヌカイト	35.35	5.4	4.5	1.4	主要剥離が大きく残る。側邊に一部に原面残る。	○		A-12		B
54	複刃削器	サヌカイト	38.35	7.5	4.1	1.5	縦部調整のある尖端に折れ(兼の可能性あり)。先行剥離面表面に原面残る。	○		A-8	(マ3-6)	D
55	凸刃削器	サヌカイト	16.14	5.1	2.55	1.1	背部に広く原面が残る。	○		A-12	構22	E
56	複刃削器	サヌカイト	51.39	7.45	4.35	1.8	全体に有機物(?)がこびりついている。背部一面に原面残る。	○		A-11		E
57	複刃削器	サヌカイト	89.01	10.3	5.65	1.5	先行剥離面に原面が大きく残る。石器の未製品にしては薄いと思われる。	○			先行トレンチ	

木製品観察表

博物番号	器種	法量(cm)	材質	木取り	調査概	出土点	出土地	出土層	備考	
1	平鉗	全長 頭部幅 頭部厚 刃部幅 刃部厚	25.7 7.4 2.5 14.0 1.4	アカガシ亜属	柾目材	・身は撥形を呈す ・船形突起をもつ ・着柄孔はやや楕円形を呈す ・刃縁はほぼ直線状を呈す		A-13	C	
2	鎌身	残全長 最大幅 最大厚	20.2 11.4 1.4	アカガシ亜属	柾目材	・中央部分がやや厚みを持つ ・刃先をやや尖らせる		A-14	C	
3	鎌身	残存長 残存幅 最大厚	24.0 11.1 2.3	アカガシ亜属	柾目材	・中央部をやや隆起させ、長方形の着柄孔をもつ		A-13	C	
4	丸鎌身	残存長 残存幅 最大厚	13.6 27.6 3.4	アカガシ亜属	柾目材	・平面形が隅丸方形 ・楕円形を呈す着柄孔をもつ ・中央部の着柄孔周辺を削って隆起させる	土坑21	A-8		・2次焼成により刃部と側面が欠損する。
5	狭鉗	残存長 幅 最大厚 柄孔長径 柄孔長径	14.0 9.0 2.0 3.0 2.4	身部 アカガシ亜属 柄部 ハイノキ	柾目材	・刃部が欠損しており、全体形状は不明		A-7	D	・出土木製品の中で、唯一着柄状況のわかる鉗
6	組合狭鉗身	全長 装着部幅 刃部幅 最大厚	47.2 4.7 9.9 1.5	アカガシ亜属	柾目材	・装着部分と刃部からなる ・装着部の先端に縫かかりとなる段を削り出す ・側面に2箇所の刺みをつける	落込1	A-3		
7	鉗末製品	残存長 幅 厚	20.2 12.5 2.5	アカガシ亜属	柾目材	・欠損のため上部は不明 ・刃部は丸刃と思われる ・隆起はほとんど見られない		A-11	E	
8	木庖丁	全長 幅 厚 縫孔長径 縫孔長径	13.5 5.6 0.9 0.9 0.7	ヤマグワ	柾目材	・平面形は平行四辺形を呈す ・木目にそって削りとる ・片刃 ・縫孔周辺は円孔が1つ ・縫孔周辺は縫による摩耗が見られる ・刃部と側面が激しく摩滅している	川2	A-15		

排開番号	器種	法量(cm)	材質	木取り	調整	出土点	出土地	出土層	備考
9	不明木製品	残存長 17.4 残存幅 4.9 最大厚 4.3 穿孔長軸 2.9	クヌキ	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・欠損が激しく、全体形狀は不明</li> <li>・上部から中央部にかけて下部の齒状の隆起を持つ</li> <li>・両面から長方形の1孔を穿つ</li> </ul>	ビット 453	A-5		・2次焼成を受けている
10	銀木製品	全長 25.8 幅 12.4 最大厚 6.4	コナラ	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平面から隅丸方形を呈す</li> <li>・中央部に船形突起と思われる隆起を削り出す</li> <li>・下部を段をなくすように削出す</li> <li>・全体に荒く削ったのみである</li> </ul>		A-13	C	
11	動柄	残存長 79.1 長径 3.1	アガシ亜属	板目材	・柄と直行する把手を持つ	川2	A-15		
12	有頭棒	残存長 18.7 頭部幅 5.2 柄部幅 3.1 最大厚 3.2	アカガシ亜属	板目材	・表面を削って一端を3方向から削り出す、やや丸みを帯びた握り状の把手をもつ	土坑40	A-7		・下部は2次焼成を受けて不明
13	棒材	残存長 17.1 幅 4.0 厚 2.8	アカガシ亜属	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一端を削ってやや尖らせる</li> <li>・もう一端は欠損する</li> </ul>	井戸底 造構	A-12		
14	刺み入り 有頭棒	全長 26.7 長径 3.3 短径 2.0	アカガシ亜属	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭部にし字状の突起を持つ</li> <li>・側面に2方向から削った刺みを3ヵ所もつ</li> <li>・柄部断面は長椭円形を呈す</li> </ul>		A-4	C	
15	棒材	残存長 33.0 長径 3.0	コウヤマキ	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表面を削って角をつくる</li> <li>・一端を6方向から斜に削って尖らせる。もう一端は欠損</li> </ul>	溝12	A-12		
16	有頭棒	残存長 10.6 頭部幅 8.6 頭部厚 5.8 柄部幅 4.6 柄部厚 3.8	タブノキ	板目材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3方向から削って、やや丸みを帯びたツカ状の頭部をもつ</li> <li>・頭部から断面が方形を呈す柄が続くが欠損のため全長は不明</li> </ul>	溝15	A-6		
17	槽	残存長 33.7 残存幅 12.4 厚 1.5	コウヤマキ	板目材	・槽厚は薄く、底面は反っている	土坑40	A-7		

摘要番号	器種	法量(cm)	材質	木取り	調整	出土地点	出土地	出土層	備考	
18	把手付棒	全長 幅 厚 把手部長 幅 厚	57.6 19.1 9.0 9.0 4.3 3.3	クマノミズキ 類	楕円材	・平面は長方形を呈す ・長方形の板材の中央部分を長方形にくりぬいたもの ・一辺に長方形の把手を1ヶ所もつ ・器厚は厚く、底部は平坦である	井戸状 遺構	A-11		
19	棒材	全長 径	10.7 3.9	カヤ	心持材	・中央部分は丸木のまま使用する ・両端は断面が方形になるように4方向から削り出す	溝38	A-10		
20	刺突具	残存長 最大径	12.6 1.0	モミ	楕円材	・表面を削って鋭く尖らせる ・もう一端は欠損	溝15	A-6		
21	朱塗木材	残存長 最大幅 最大厚	4.7 3.5 0.9	ハイノキ	楕円材	・全体は不明である	A-14	C	・両面に朱が塗られている ・何らかの製品の一部と思われる	
22	椎円板材	全長 幅 最大厚	14.0 6.9 2.8	アカガシ亜属	楕円材	・平面は長楕円形を呈す ・長軸方向に沿って中央部分に隆起をもつ	川3	A-13		
23	不明木製品	板材 残存長 幅 厚 棒材 全长 幅 厚	44.6 18.0 1.4 44.1 3.4 3.8	板材 アカガシ亜属 棒材 ヒノキ	楕円材	・板材を中央部を削り貫いた棒材を組合せたものである ・板材の厚さに合わせて棒材の孔をあけている ・棒材の固定のために板材の側面のホゾが切られている ・板材中央部に長方形を呈する2孔を穿っている	井戸状 遺構	A-11		・全体に2次施成を受けて炭化しており、一部欠損している
24	板材	全长 幅 最大厚	16.1 5.7 2.3	アカガシ亜属	楕円材	・平面は長方形を呈す ・端部は2方向より削って尖らせる	A-3	D		
25	柱材礎板	柱材 残存長 径 礎板 残存長 幅 厚	42.3 9.8 21.2 7.9 4.2	サカキ 礎板 スダジイ	心持材	・下部を2方向から削って刺りを入れ、礎板と組むように加工されている ・礎板は心持材を半裁したものを使用	ビット 154	A-5		

## IV まとめ

今回の調査によって現在までに明らかになっている事柄の概要を記して中間報告のまとめとする。最終的には、平成11年度実施中及び12年度に実施を予定している発掘終了後の成果を受けて検討することとした。

今回の調査地は、従前の調査の大半が大阪府文化財調査研究センターにより遺跡の中央を南北に実施されていたのに対して、北端付近を東西にトレンチを設ける形で実施した。調査地付近は、今までの調査成果から弥生時代に存在した河内湖の南岸にあたると想定されており、余り多くの遺構や遺物が存在しないと考えられていた。しかし、調査の結果は予想に反して弥生時代中期末の上・中・下3面の遺構面から掘立柱建物などの多くの遺構を検出し、弥生土器をはじめとする多数の遺物が出土した。また、従前から想定されていた南北方向に延びる自然堤防の先端付近を横断して東西に調査する形となった。

弥生時代中期の遺構は、標高-1 m付近の5箇所の自然堤防が起因するマウンド状の高まり(マウンド1~5と仮称)を中心に検出した。自然条件的には標高から見て、この地に居住域が営まれたのは当時小規模な海退が起こり河内湖の水位が低下した結果、水辺が一時期陸化したためと推定される。また、上・中・下遺構面の存在は、海退が短期間で終わり一旦水没した際に居住域を移動したが、再度陸化し、そこをまた居住域としたことを示している。ただ、少しでも高まりを大きくすることを意図したのか、下面遺構の上に再度盛土を行っていた。

上~下面の遺構面から出土する弥生土器は、個々を見れば畿内第Ⅲ様式後半~Ⅳ様式前半に属するものであるが、全体として見れば第Ⅳ様式前半と見ることができる。したがって非常に短期間に2回以上の居住がおこなわれたと考えられる。この時期は本遺跡が最も栄えた時代である。逆に言えば、そのような時代であったからこそ、不安定で低湿な立地条件にもかかわらず今回の調査地付近にまで居住域をひろげたのである。ただ、上面遺構はわずかな溝などしか認められないことから、第Ⅳ様式後半には、ヨシなどが生える状況で確実に陸化しているのもかかわらず居住域は南に移動したと考えられる。集落の衰退を示している可能性もあると思われる。

中面・下面遺構とともに柱穴はかなり密集し、切り合いも認められたことから第Ⅳ様式前半という短期間に掘立柱建物が建て替えられたことが判明した。掘立柱建物の柱は、基本的に建物を建てることに不適当な軟弱で低湿な地に敢えて営んでいることから様々な工夫が認められた。最も多かったのは、ヨシを柱穴に厚く敷き詰めることである。また、敷き詰めたヨシの上に礎板にあたる木(大半は自然木)を柱を建てる前に置くことも行っている。ただ一つの建物に同じ柱の立て方を行った様子は見られない。また、以前の調査で検出されている柱の下端に切り込みを入れ、そこに礎板を組み合わせるものは、わずか1例しか認められなかった。柱材の材質については今後鑑定作業を進める予定であるが、大半が広葉樹と思われる。

出土遺物のうち弥生土器は、まだ整理作業が終了していない。したがって概要を述べるにとどまるが、土器だまり出土品などに前述したように第Ⅳ様式前半の良好な一括資料が認められる。上器の中には、タタキを施すものがあり、また広口壺の口縁部などを器台に転用したものもかなり認められる。

サスカイトの剥片を含めてすべての石器の出土地点を検討したところマウンド2・3付近が最も多く出土していることが判明した。また、大型石窓の原材や半加工品も出土している。このことは調

査地付近で大型石瓶丁を含む打製・磨製石器製作が行われていたことを示している。今後、マウンド2・3で検出した掘立柱建物については石器の製作と関係する可能性も検討せねばならない。

出土した木製品は、鍬などの農耕具の未製品が含まれており、石器の製作だけでなく農耕具の製作も行われていたことはまちがいない。

マウンドを構成する包含層からの出土遺物の中に、掘立柱建物の居住者が残した食糧残滓と考えられる淡水産のセタシジミや海産のアカニシと思われる貝殻・イノシシなどの動物遺存体が認められ、確実に居住し日常生活をおくっていたことを示している。また、川2からは火を受けて炭化したため遺棄されたと推定される稻の穂束が一定量出土している。

男性器と女性器を表したと考えられる性器形石製品が、マウンド1で出土した。男根状石製品は先端を東に向か横向きに置かれ、女性器形と思われる石製品は約40cm離れて凹んだ面を男根状に対する形に向けて立てられていた。調査地付近が居住域でなかった時（村はずれ）に置かれたと思われる。溝で区画された一画が当時の瓜生堂遺跡の祭祀場の一つであったと考えられる。

出土した性器形石製品は、船作に関わる農耕儀礼の道具と考えてよいと思われる。男根状石製品は、一般的には「古説拾遺」の「イナゴを追い払う手段の一つとして男根形の道具（男茎）を田の溝口に立てる」記述から虫追いに使用されたと考えられているが、春成氏<sup>注1)</sup>は稻の生育を願う（勃起した男根の活力に感應して萎えた稻が再生するようにと願った）儀礼に用いられたとする。現状では具体的にどのような目的を持った祭に使用されたかを推定することは困難である。

ただ、縄文時代の石棒や女性器形石製品とは、形は似ているが系譜はつながらない。狩猟採集社会と農耕社会という社会背景が違い使用された儀礼の性格が異なると考えるからである。

写実的ではないが女性器形と考える石製品は、今までの調査で出土している同様の製品（砥石ないしは石皿として報告されていると思われる）を、見直すきっかけになるであろう。男根状石製品は特徴的であることから比較的識別しやすいが、女性器形石製品は識別が困難なものが多いと考えられる。それぞれ単独で儀礼に用いられたこともあろうが、現代に伝わる各民俗例から見ても今回明らかになつたようにセットで使用されることもままあつたであろう。

男根状石製品の類例は、今まで溝や河川からの出土が多いが、中に竪穴住居の壁に巡った溝から出土した例（兵庫県西宮市七日市遺跡）もある。今回は、村はずれの溝で開まれたマウンド状の祭場と考えられる場所で出土している。色々な場所で行われた儀礼に用いられたのであろう。

絵画文上器の盛行や鋼鐸形石製品の存在など儀礼が発達する弥生時代中期の社会において、この種の儀礼が各地で行われていたことが予想される。今後、この発見を契機に類例の発見が増加すれば、当時の農耕儀礼の一端が明らかになるであろう。

今回出土した石製品は、石材の鑑定結果からさほど遠距離で採集されたものでないことが判明した。瓜生堂遺跡の人々が日常行き来できる範囲の地域（中・南河内）で採集できるものであろう。おそらく、石川や生駒山麓のムラに出かけた際に適当な石を持ち帰ったものと考えられる。

以上のように、今回の調査では多大な成果が上がっている。整理作業を継続中であり、弥生土器などの細かな分析・報告はできなかった。遺構・遺物ともさらに検討を進め本報告に生かしていくたい。

注1) 春成秀爾 「性象徵の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告 第66集』 p.69~159  
国立歴史民俗博物館 平成8年

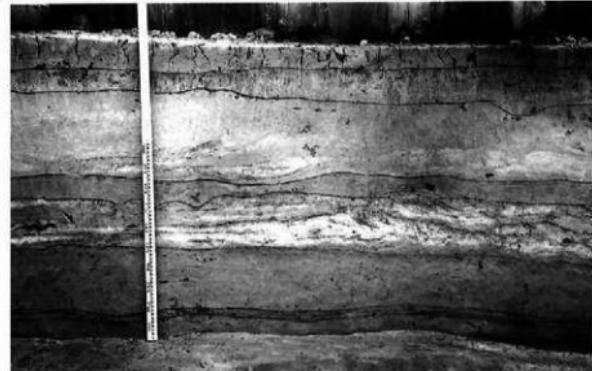
# 図 版



調査地全景



A-1 東壁断面



A-1 南壁断面

圖版 2  
透視



A-11南壁断面 1



A-7 南壁断面



A-7~9 南壁断面



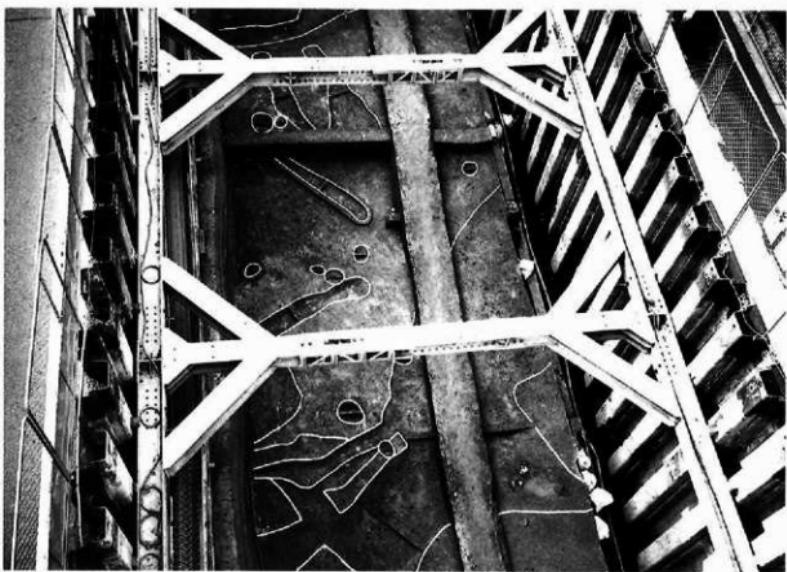
A-11南壁断面



A-12南壁断面



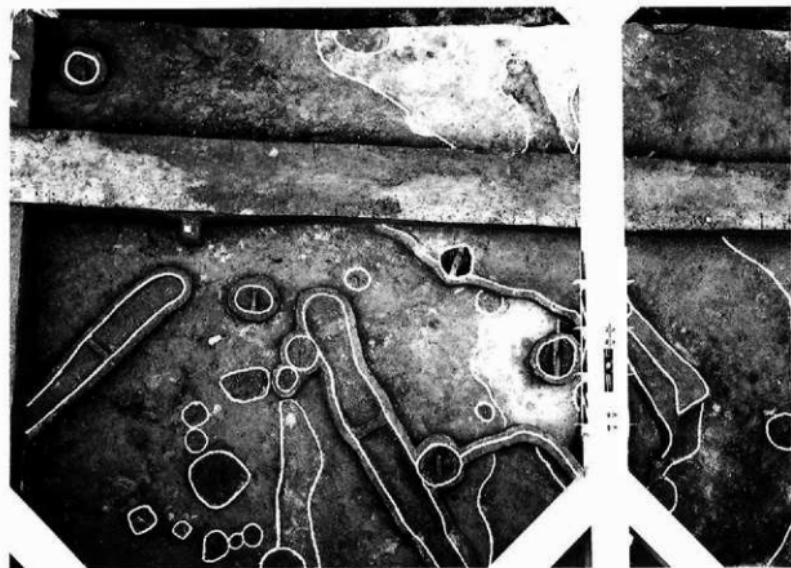
A-15川2 東西アゼ断面  
(南西より)



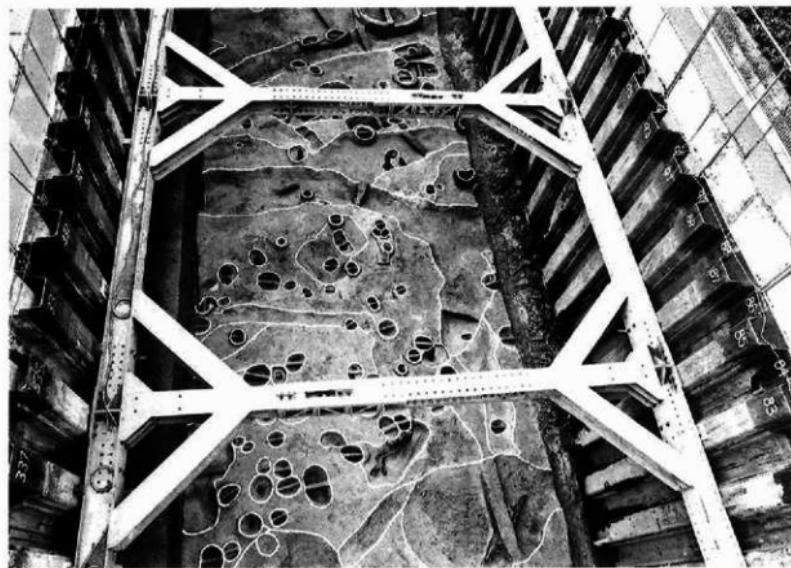
A-7・8 上面遺構検出状況(東より)



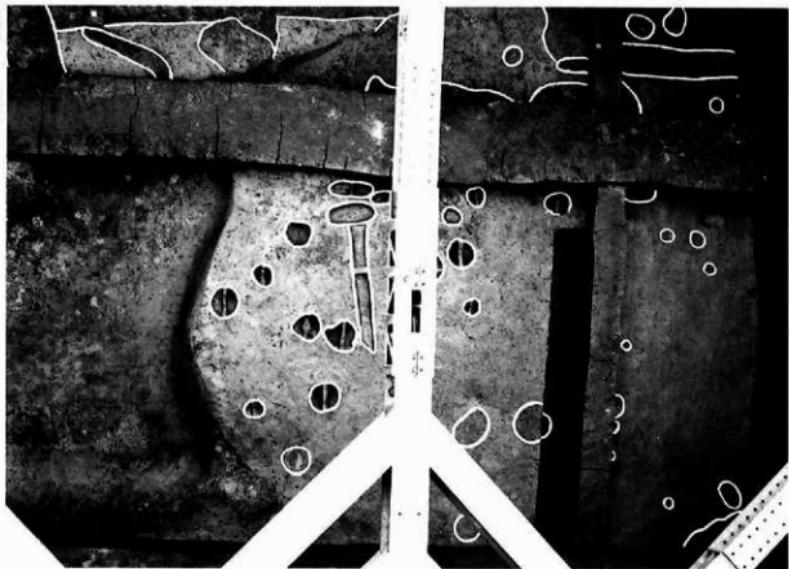
A-6~10 上・中面遺構検出状況(東より)



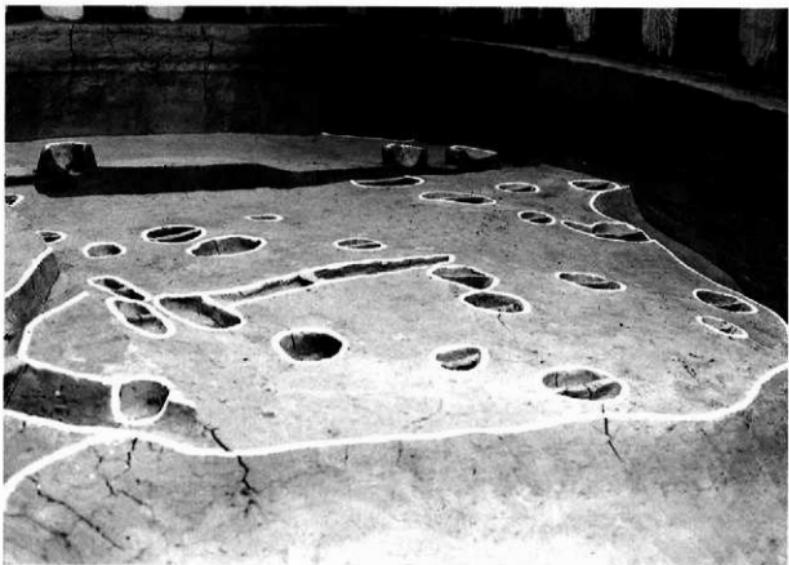
A-7・8中・下面遺構検出状況(南より)



A-6・8中・下面遺構検出状況(東より)



A-1 マウンド1 遺構検出状況(南より)



A-1 マウンド1 遺構検出状況(北西より)



A-12~14中・下面遺構  
検出状況(東より)



A-11・12溝・土坑  
検出状況(東より)



A-15ピット検出状況  
(北西より)



A-8～10中・下面造構  
検出状況(南より)



A-2～6中・下面造構  
検出状況(東より)



A-5 ピット群検出状況  
(東より)



A-5ピット内壁板  
検出状況(南より)



A-15ピット421  
断ち割り断面(西より)



A-5ピット内底物  
検出状況(南より)



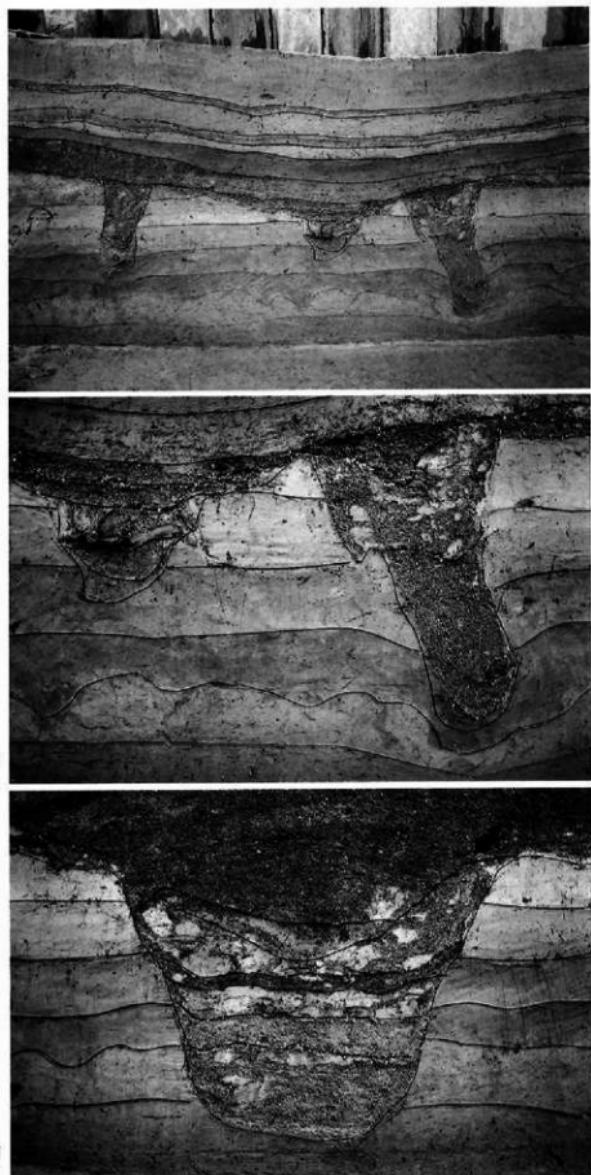
A-5 ピット154  
断ち割り断面(西より)



A-5 ピット163  
内壁板突出状況(北より)



A-5 ピット146  
内壁板突出状況(北より)



A-6 ピットF・G・H断面  
(北より)

A-6 ピットG・I断面  
(北より)

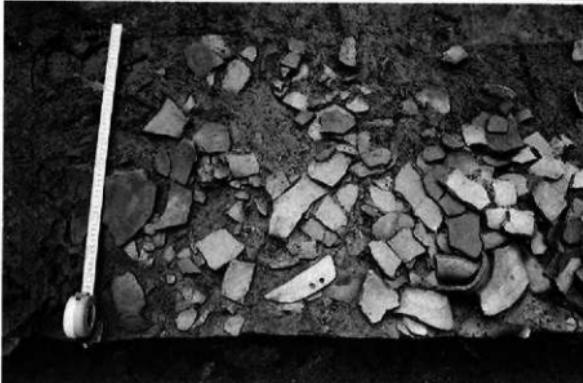
A-6 土坑D断面  
(北より)



A-9・10土器だまり1  
検出状況(西より)



A-12・13土器だまり3  
検出状況(西より)



A-13土器だまり3  
遺物検出状況(北より)



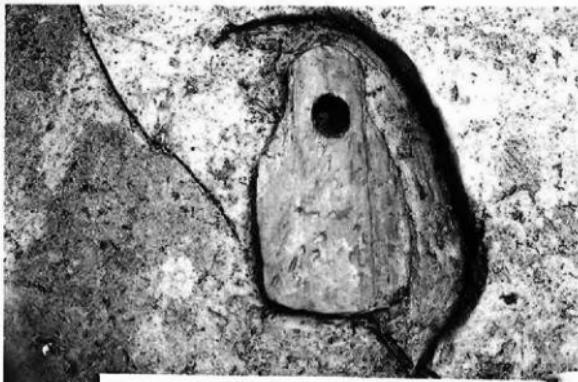
A-1 性器形石製品  
出土状況復元(南西より)



A-15川2 陶生土器  
出土状況(南より)



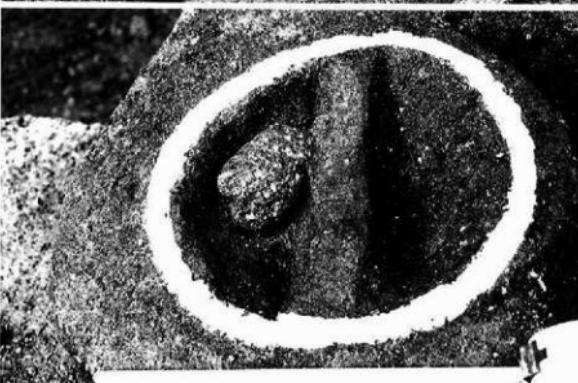
A-8溝32 陶生土器  
出土状況(東より)



A-13坑出土状況



A-12井戸状造構内  
木製品出土状況(北より)



A-9ビット270内  
大型蛤刃石斧出土状況  
(南より)



A-9講13骨製刺突具  
出土状況(南より)

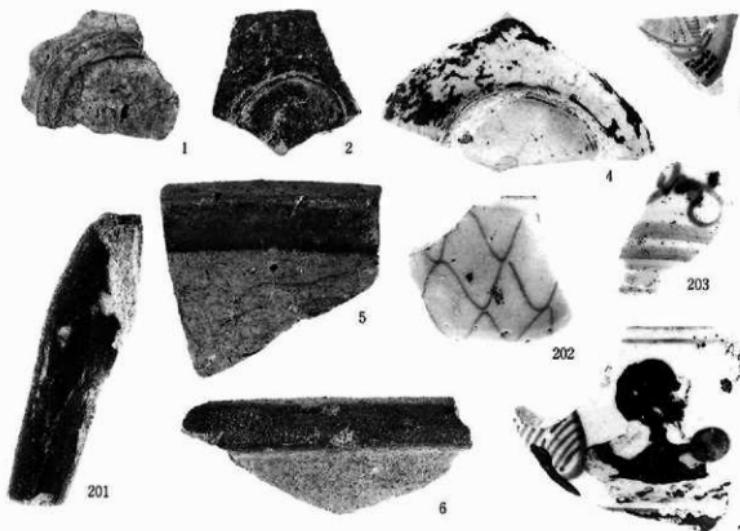


A-14海産貝(アカニシ)  
出土状況(南より)

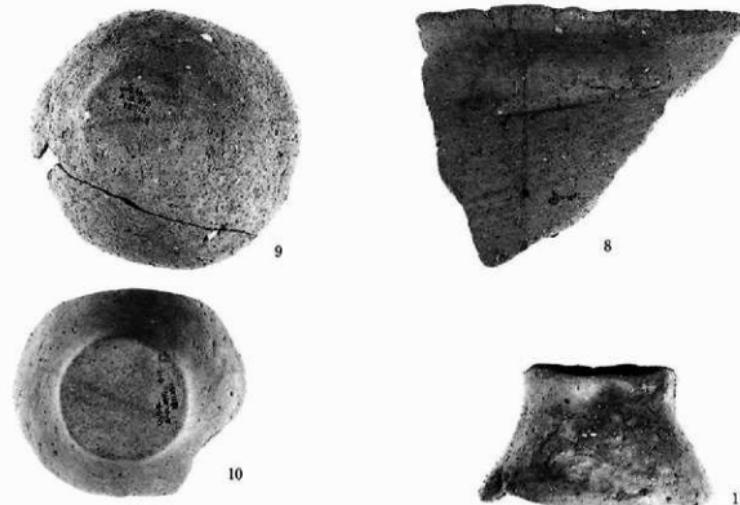


A-9ビット315淡水産貝  
(セタシジミ)出土状況  
(南東より)

圖版 16 遺物 旧耕土・床土・川1出土遺物(中近世、弥生時代後半末・庄内期)



国産磁器(7・202・203)、瓦器(1・2・201)、中世須恵器(5・6)、中国産磁器(3・4)



壳(8)、底部(9~11)

図版 17 遺物  
土器だまり 1・3 出土弥生土器



14



204



19



18



51

甕(14・18・51)、壺(204)、壺底部(19)



23



44



28



20



30



36

壺(23・28・30)、鉢(20・44)、脚(36)



脚(70)、蓋(91・92)、鉢(87)、高杯(93)、甕(90)



94



96



98



95

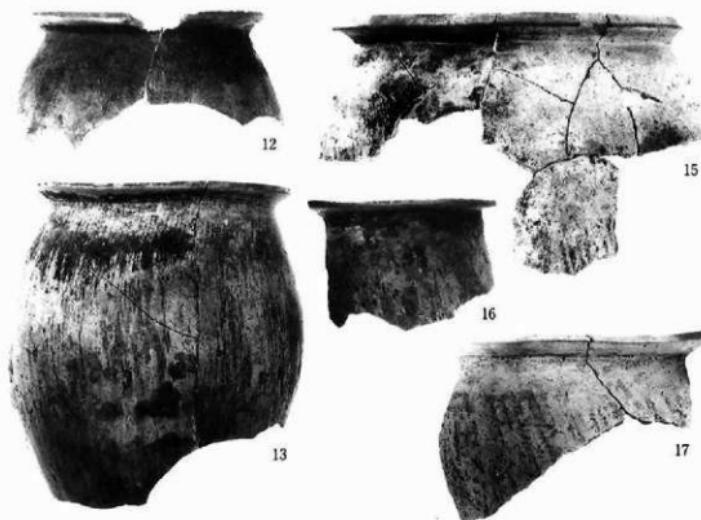


97

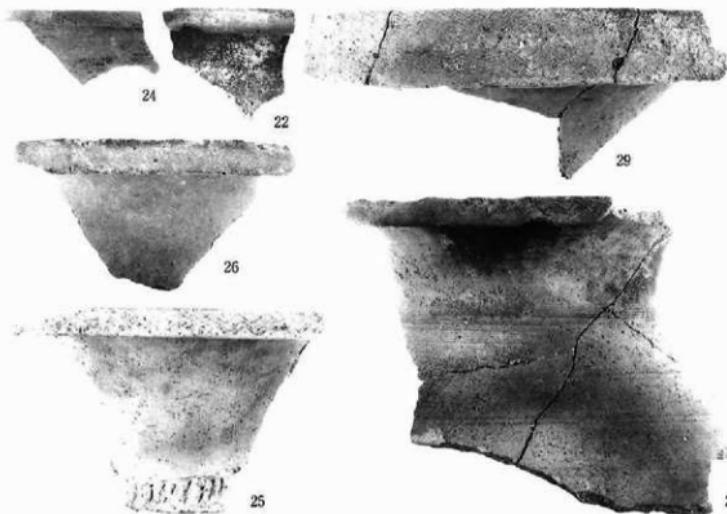


205

図版 21 遺物  
土器だまり 1・3 出土弥生土器

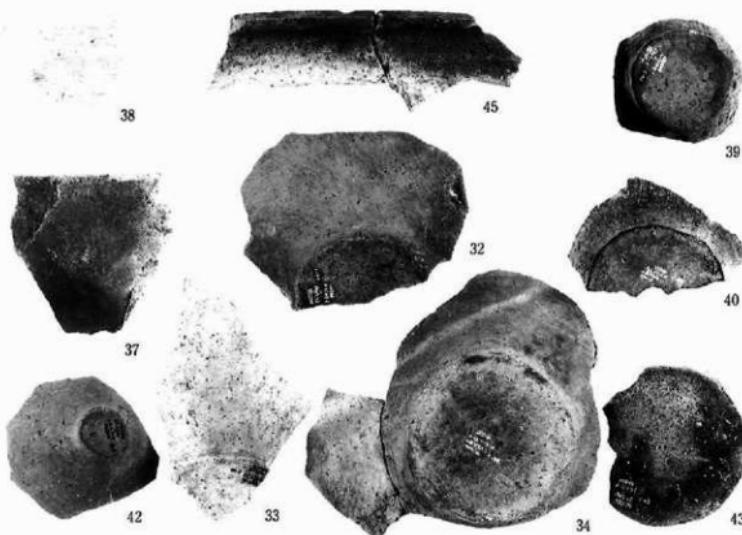


甕(12・13・15~17)

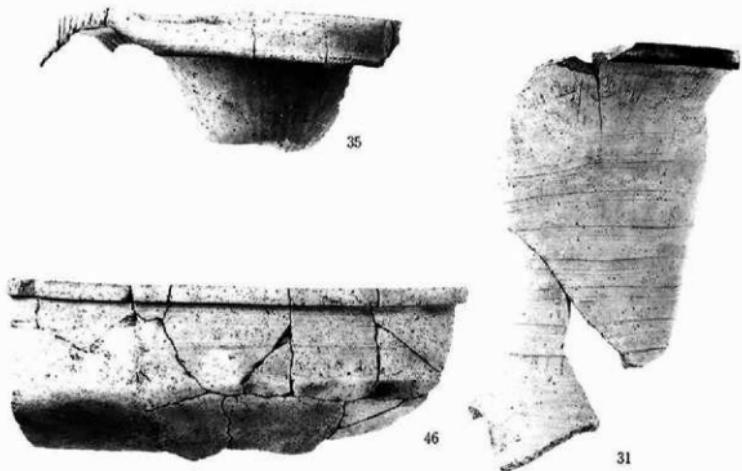


甕(22・24~27・29)

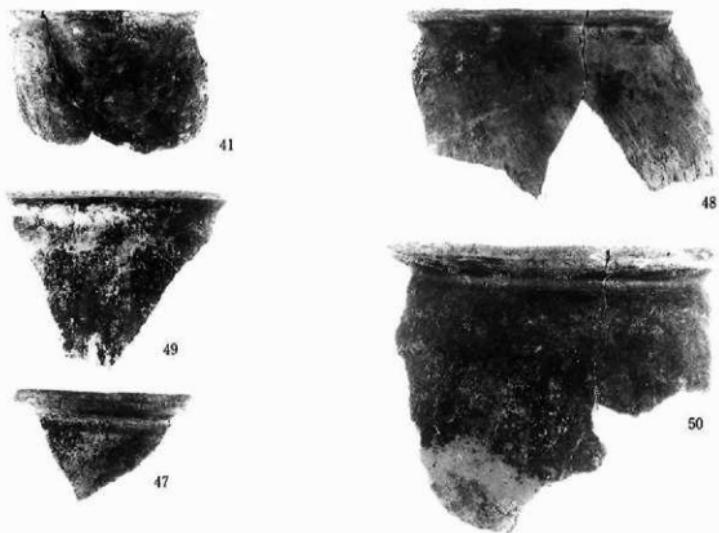
図版  
22  
遺物  
土器だまり3出土弥生土器



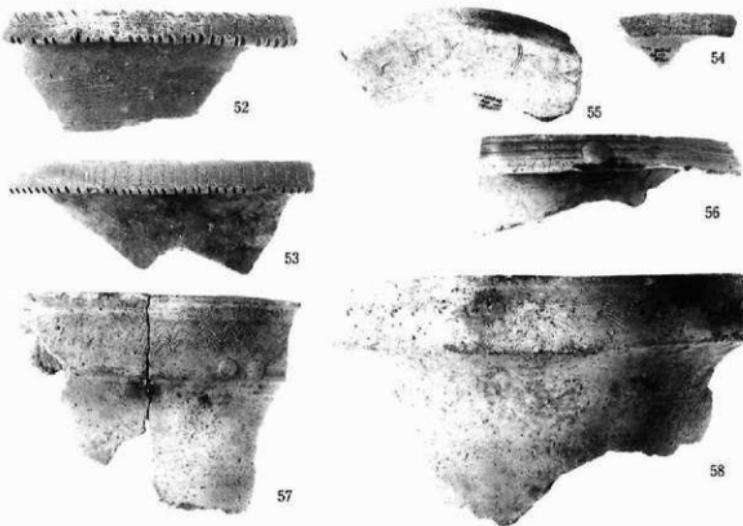
罐頭蓋(37・38)、鉢(45)、蓋(42)、蓋底部(32~34)、甕底部(39・40・43)



壺(31)、高杯(35)、鉢(46)

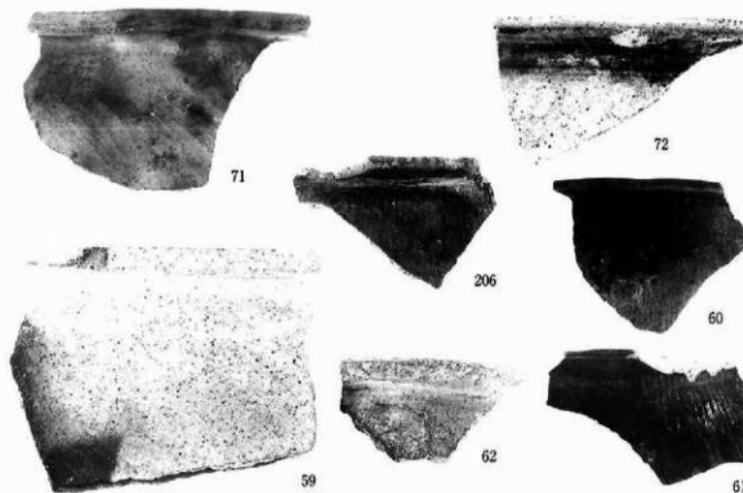


甕(41・47~50)

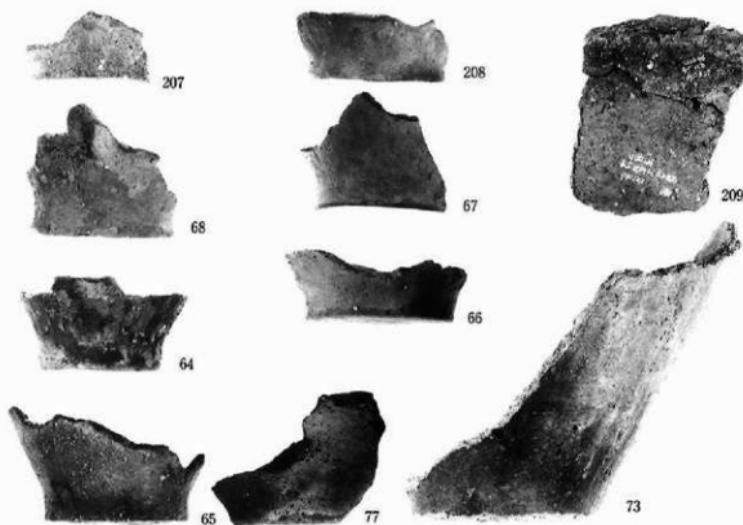


壺(52~58)

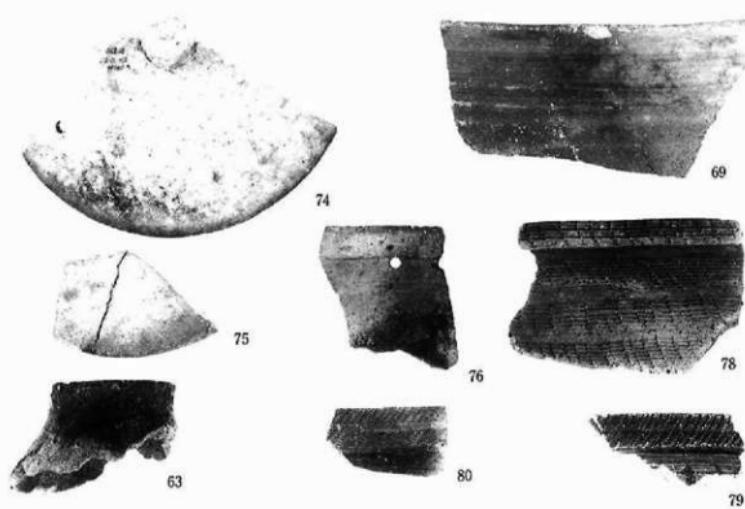
圖版  
24  
遺物 川2出土  
新石器



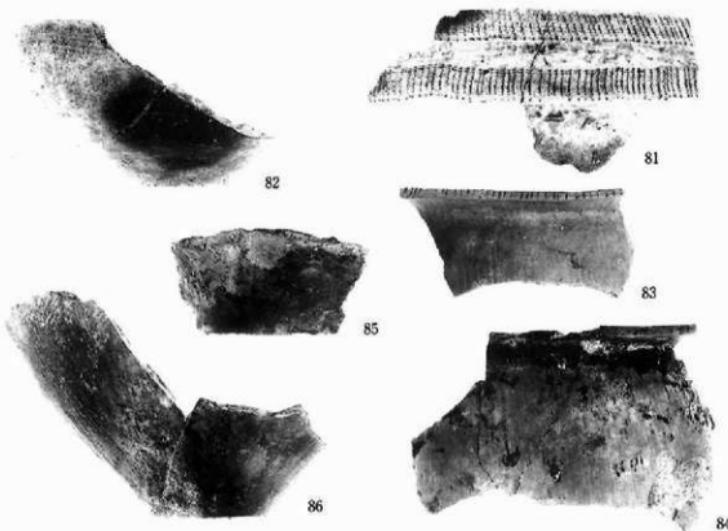
甕(59~62・71・72・206)



甕底部(64~68・73~77・207~209)



鉢(69・78・79)、無頸甌(76)、繩頭甌(80)、蓋(63・74・75)



甌(81)、鉢(82)、甌(83・84)、底部(85・86)

圖版 26  
遺物 磨製石器(大型石庖丁)



15

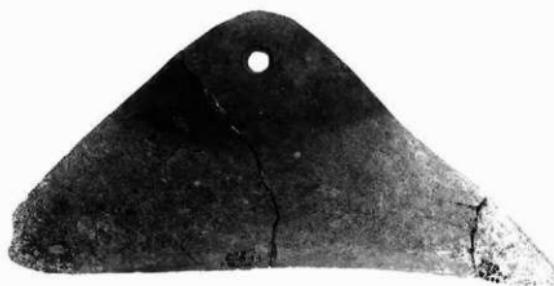


14



13

大型石庖丁(A面)



15'



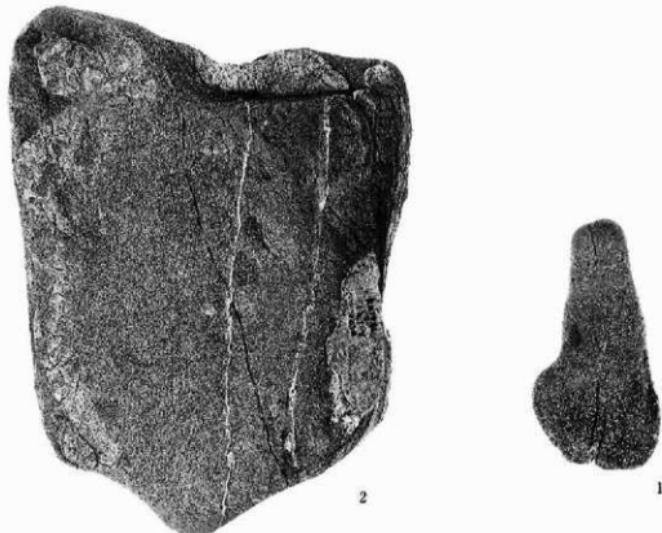
14'



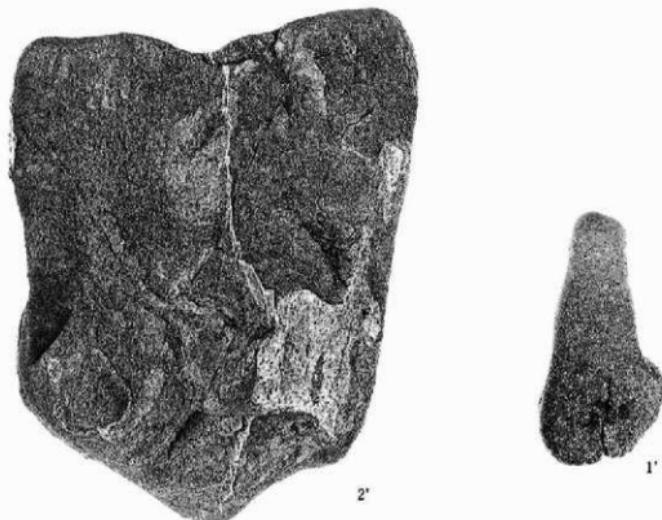
13'

大型石庖丁(B面)

圖版 28  
遺物  
磨製石器(性器形石製品)

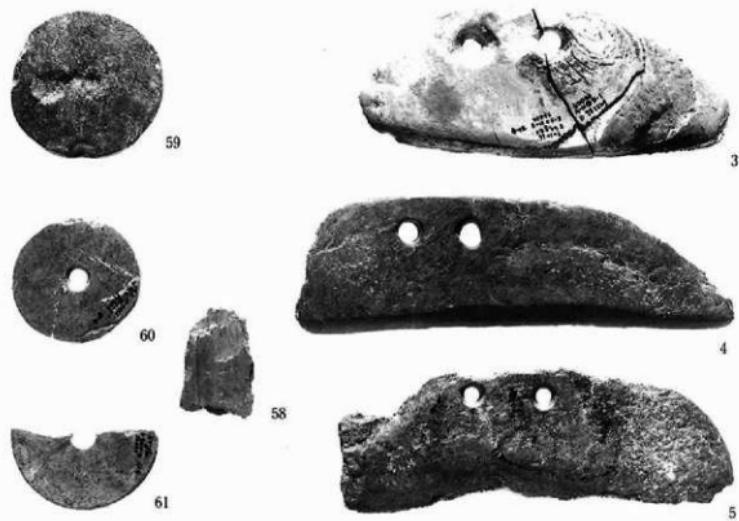


性器形石製品(A面)

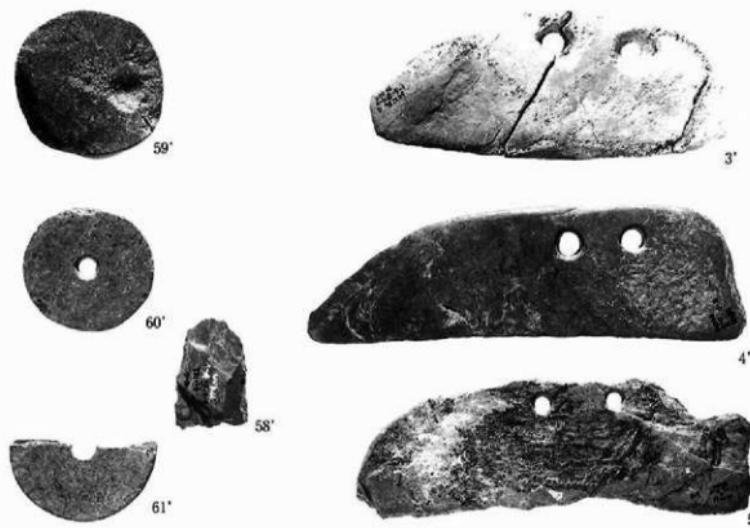


性器形石製品(B面)

圖版 29 遺物 磨製石器(石庖丁・石劍・紡錘車)

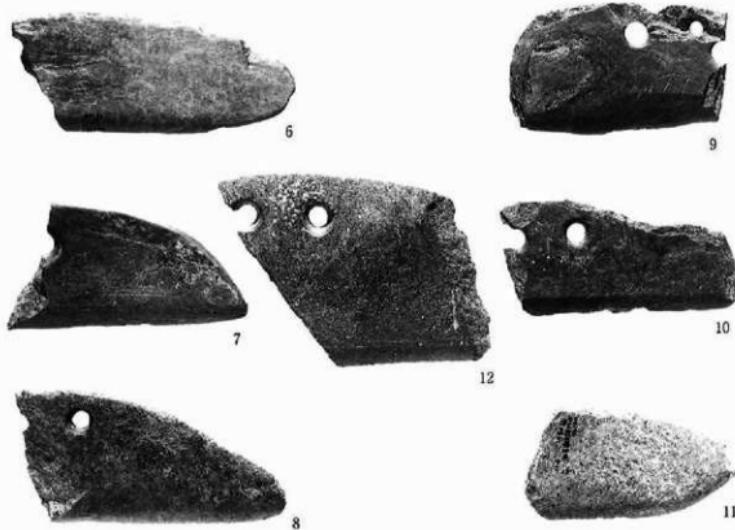


石庖丁(3～5)、石劍(58)、紡錘車(59～61)(A面)

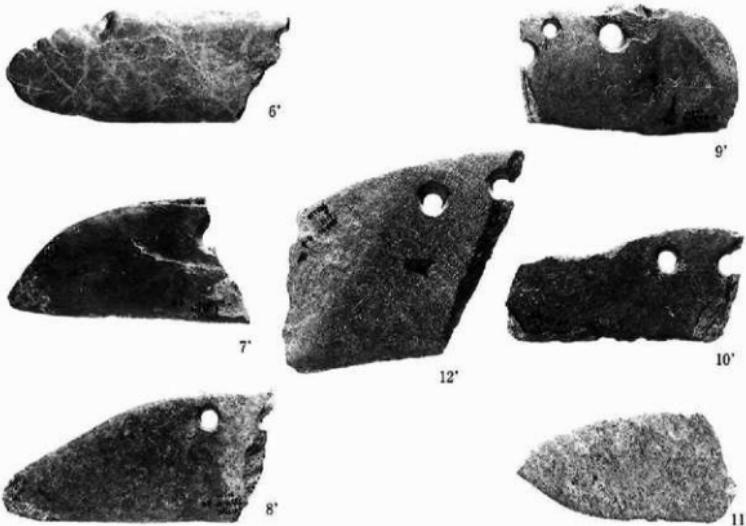


石庖丁(3''～5'')、石劍(58')、紡錘車(59''～61')(B面)

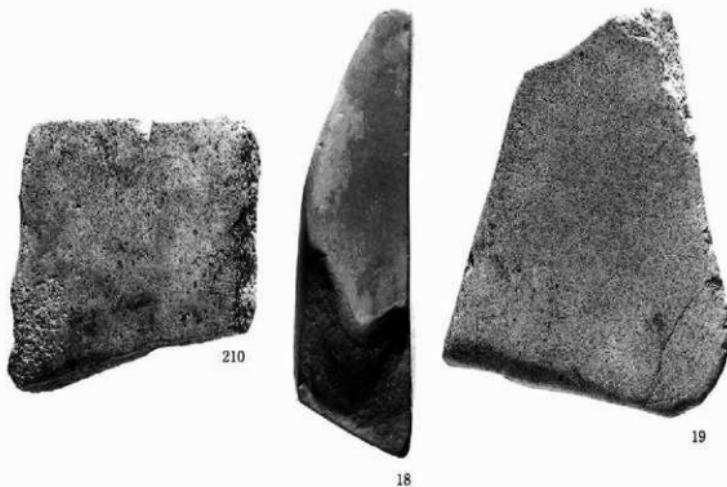
圖版 30 遺物 磨製石器(石庖丁)



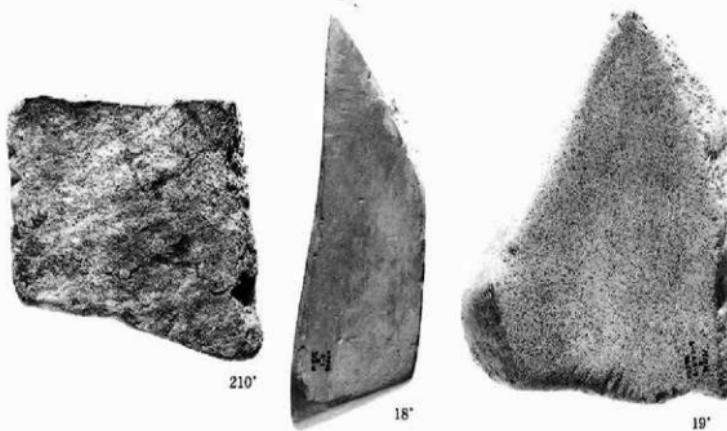
石庖丁(A面)



石庖丁(B面)



砾石(表)



砾石(表)

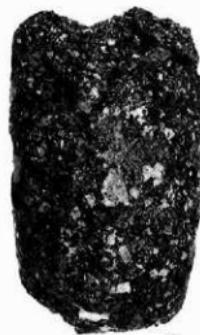
圖版 32  
遺物 磨製石器(石錘·大型蛤刃石斧)



23



22



17

石錘(22·23)、大型蛤刃石斧(17)(表)



23'



22'



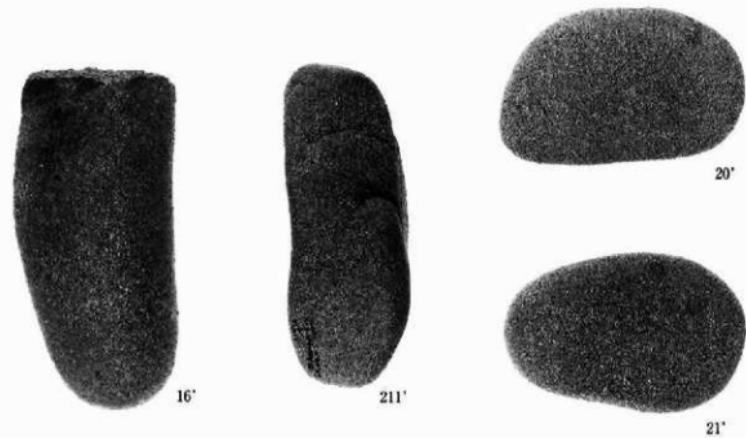
17'

石錘(22'·23')、大型蛤刃石斧(17')

圖版 33  
遺物 磨製石器(印石)

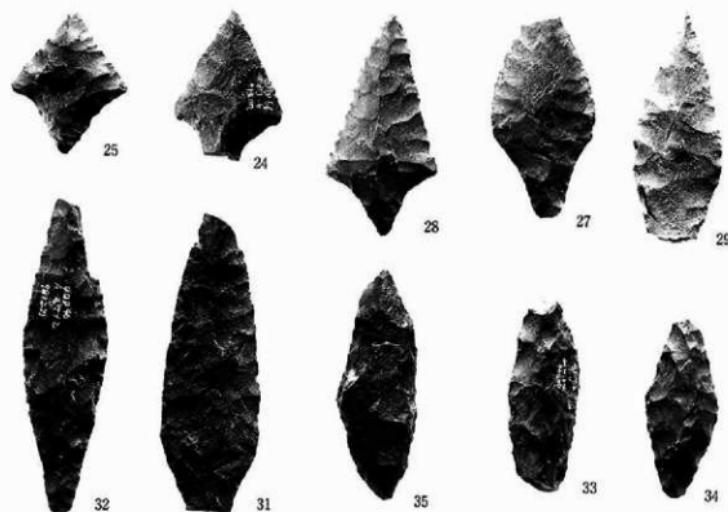


印石(表)

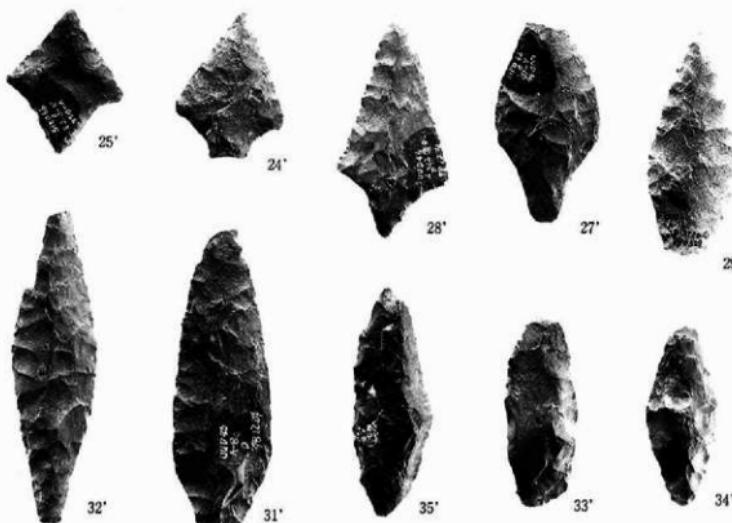


印石(表)

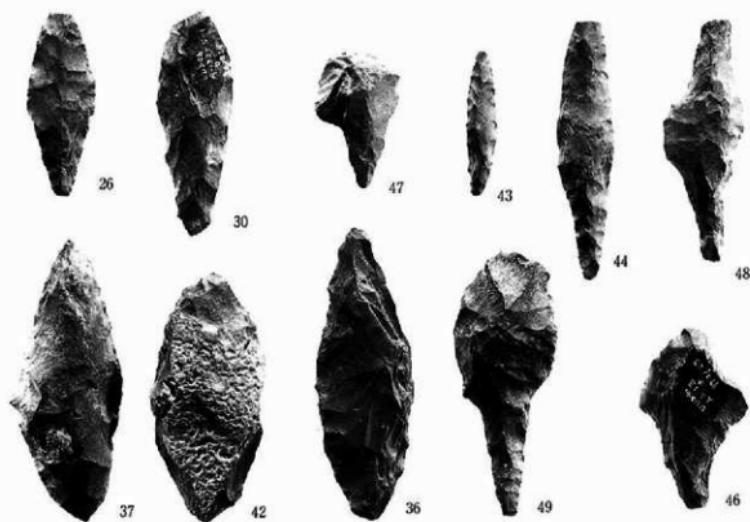
圖版34  
遺物 打製石器(石鑿)



石鑿(A面)



石鑿(B面)

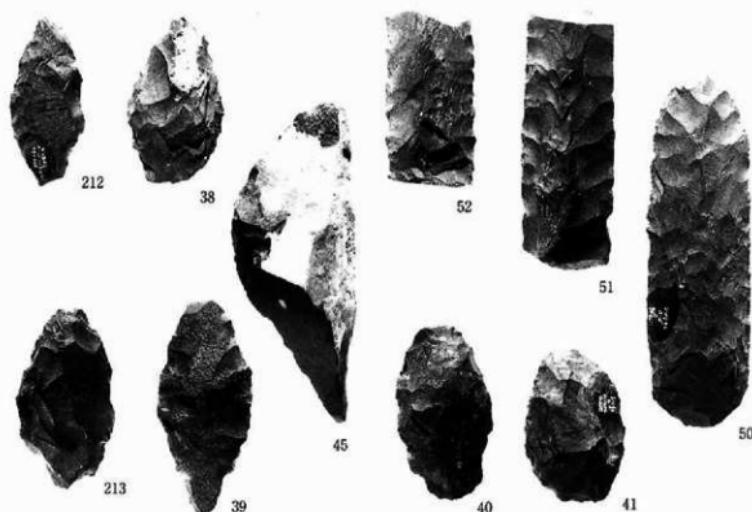


石鑿(26・30・36・37・42)、石錐(43・44・46~49)(A面)

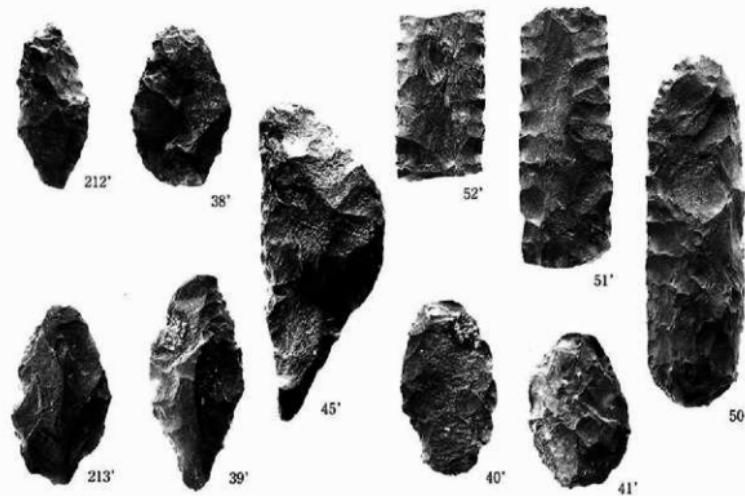


石鑿(26'・30'・36'・37'・42')、石錐(43'・44'・46'~49')(B面)

圖版 36 遺物 打製石器(石劍·石鋸·石錐)



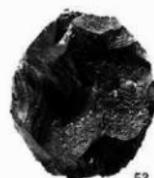
石劍(50~52)、石鋸(38~41·212·213)、石錐(45)(A面)



石劍(50'~52')、石鋸(38'~41'·212'·213')、石錐(45')(B面)



54



53



57



214



215



216



217

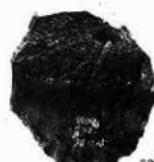


55

削器(A面)



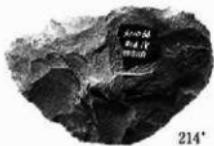
54'



53'



57'



214'



215'



216'



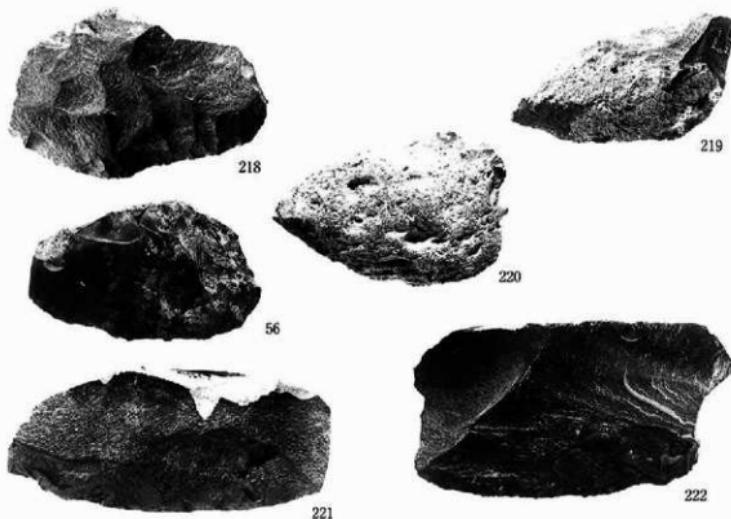
217'



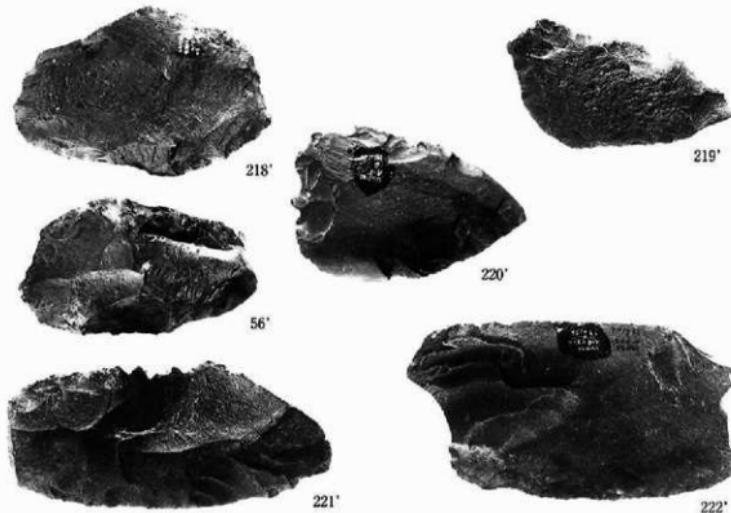
55'

削器(B面)

圖版  
38  
打製石器削器  
(通物)



削器(A面)



削器(B面)



1



1'



2



2'



3



3'



12



13

平鍬(1・1')、鉤(2・2'・3・3')、有頭棒(12)、棒材(13)



16



16'



16''



10



22



11

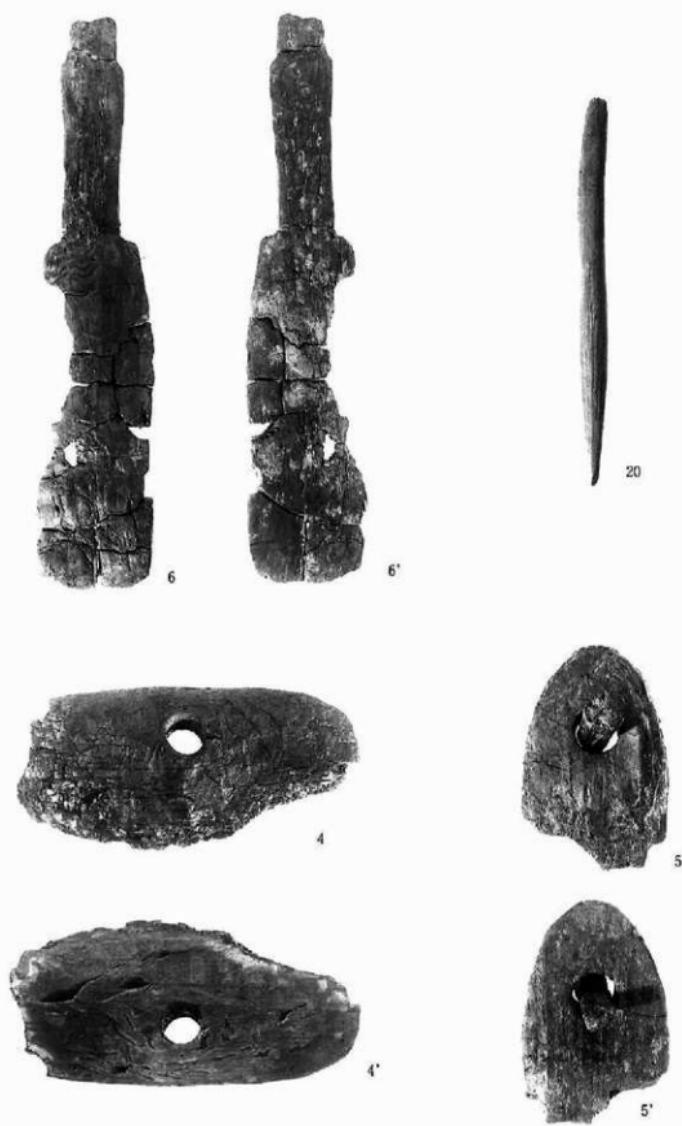


9



9'

有頭棒(16·16'·16'')、銀朱製品(10)、不明木製品(9·9')、棺內板材(22)、鐵柄(11)



組合せ鏃(6・6')、刺突具(20)、丸鉤(4・4')、狭鉤(5・5')



8



8'



15



7



23"



23



23'

木庖丁(8・8')、棒材(15)、錐木製品(7)、不明木製品(23・23'・23")



把手付棒(18・18'・18'')、刻み入り有頭棒(14)、朱塗木製品(21)、板材(24)、棒材(19・19'')、棒(17)、柱材(25・25'')



70



72



71



72\*

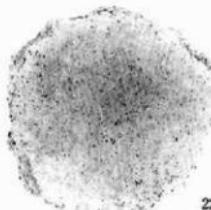
ミニチュア土器(70・71)、不明土製品(72)



62



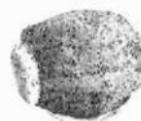
65



223



64



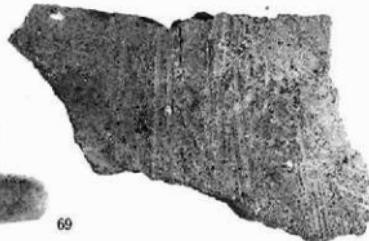
66



63



69



73

67

68

紡錘車(62~64)、円板(65・66・223・224)、骨製刺突具(67・68)、骨角器(69)、縄文土器(73)

## 報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせきだい じはくつちょうさちゅうかんほうこくしょ						
書名	瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	福永信雄・鶴山まり・田之上裕子・井筒美智与						
編集機関	東大阪市教育委員会						
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4-23						
発行年月日	平成12年3月30日						
所収遺跡	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
瓜生堂遺跡	東大阪市西岩田2丁目地内	27227	34°39'37"	135°36'10"	平成10年6月1日～11年3月30日	640m <sup>2</sup>	都市計画道路大阪瓢箪山線建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
集落	弥生時代中期	掘立柱建物・溝・土坑・柱穴	弥生上器・石器・木製品 石器には男根状石製品と女性器形石製品を含む。			弥生時代中期後半ごろの一括資料。 石器製作地。祭祀場所。	

## 瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書

平成12年3月30日

発行 東大阪市教育委員会

印刷 鮎近畿印刷センター